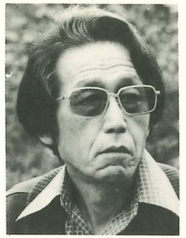
われら旗本愚連隊 (下)

柴田錬三郎

集英社文庫



柴田錬三郎
一九一七年三月二六日岡山県生。本姓斎藤。慶大文学部卒。在学中『三田文学』に「十円紙幣」を発表。戦後編集者生活を経て、五一年「イエスの裔」で直木賞受賞。代表作「眠狂四郎」「赤い影法師」「曲者時代」他。

カバー・西のぼる
デザイン・後藤市三

柴田錬三郎
われら旗本愚連隊(下)

集英社文庫

Ⓛ 1 26

われら旗本愚連隊(下)

柴田錬三郎

集英社文庫

★
¥410

江戸時代も中期を過ぎ、困窮した旗本小普請組の中でも、剣に優れた男たちがいた。無頼に走る彼等の中で、天保和寇党を結成した古城進八郎は、狩野弥太郎、井部鉄之助等を誘って江戸城大奥を襲い、また怪盗・庄吉と組んで佐渡金山から回送される御用金を狙うが、公儀隠密に知れ……。やるかたなき泰平の世に憤った若者たちを、官能の世界を織り込みながら描く長篇時代小説。解説・武蔵野次郎

ISBN4-08-749411-X C0193 P410E 定価410円
(本体398円)

集英社文庫

柴田錬三郎作品

英雄 生きるべきか 死すべきか (上)(中)(下)
度胸時代
生死の門
大　将
図々しい奴
地獄の館
曲者時代
乱世流転記
貧乏同心御用帳
江戸っ子侍(上)(下)
遊太郎巷談
生きざま
おらんだ左近
うろつき夜太(上)(下)
花の十郎太
毒婦伝奇
日本男子物語
若くて、悪くて、
　凄いこいつら(上)(中)(下)
われら旗本愚連隊(上)(下)
忍者からす
南国群狼伝／私説大岡政談

集英社文庫

われら旗本愚連隊
(下)

柴田錬三郎

集英社

われら旗本愚連隊(下)

柴田錬三郎

集英社文庫

集英社文庫

われら旗本愚連隊
(下)

柴田錬三郎

集英社版

われら旗本愚連隊（下）

第二十話　醜　女

一

大名屋敷というものは、徳川中期以後は、よほど、警戒がルーズになっていた模様である。文政年間、大名屋敷専門にあらしまわった鼠小僧次郎吉は、逮捕されてから、自身の記憶にあるだけの罪状を申し立てたが、まことにおびただしい大名の数であった。

ざっと挙げてみると――。

戸田采女正（うねめのしょう）の土蔵から四百二十二両
仁賀保（にがほ）孫九郎の奥向から百八十両
松平河内守の奥向から四十両ほど
細川長門守の奥向から三十九両
前田大和守の奥向から三十両ほど
本多大隅守の奥向から八十両ほど
溝口信濃守の奥向から三十両ほど

六郷兵庫頭の長局から三十両ほど
田安家大奥の女中部屋から四十両ほど
松平大和守の奥向から三十両ほど
松平周防守中屋敷の奥向から四十両
榊原式部大輔の奥向から百三十両ほど
青山大膳亮の長局から百七十両ほど
松平越前守の霊巌島屋敷から百両ほど

この松平越前守の屋敷へは、三度も忍び込み、また常盤橋の方にある上屋敷にも、二度も忍び込んでいる。

当時、飛ぶ鳥も落すほどの権勢を誇っていた若年寄林肥後守の上屋敷にも忍び込んで、奥向から六十両、長局から八両ばかり、盗んでいる。

御三家のひとつ水戸家の小石川屋敷にも忍び込んで、七十両ばかり盗んでいる。紀伊家にも忍び込んでいる。

まことに、その忍び込みぶりは、見事なものであった、といえる。

幕府の参政・執政はじめ、国司譜代の大名屋敷を、片っぱしからあらしまわっている。その数は、百家以上であった。

そして、盗み取った総高は、およそ一万二千両に及んだ。

次郎吉は、北町奉行榊原主計頭の吟味にこたえて、次のように、述べている。

「お武家屋敷というものは、外見は、いかにもきびしゅうございますが、一歩門を入ってみると、どこにも、鍵はかかって居らず、出入りはまったく自由なのでございます。植木職人にでも化ければ、一日中、お庭をぶらぶらしていても、どなたにも見咎められるようなことはございませぬし、奥向、長局のお部屋へ入り込むには、畳職人に化ければ、よろしいわけでございます。奥向、長局には、男子は遠慮されて居りますし、万一、女中衆に見咎められても、逃げるのに造作はございませぬ。つまり、お屋敷が、広すぎるというわけでございます。それにひきかえて、町家は、油断がありませぬ。戸締りも厳重であれば、盗難の用心も行きとどいて居ります。どんな大きな商家でも、互いに顔も名も知らぬ、という奉公人は居りませぬから、見知らぬ人間が入り込めば、すぐ、怪しい奴、ということになります。……大名屋敷というものは、門と塀だけが、いかめしいだけで、内へ入れば、こんな自由にどこへでも入れるところはございませぬ」

鼠小僧については、次のような逸話が、「甲子夜話」に出ている。

姫路侯の隣屋敷で、祝儀の能があった。

中入の時、舞台の袖に、柱にかくれるようにして、一人の男が立っているのを、主人が、見咎めた。

年頃二十七、八、月代をのばし、伊達模様の単衣に、脇差をさして居る。

主人は、

「おこの者が、そこに居るぞ。追いはらえ」

と、命じた。

左右の者が、おどろいて、舞台へ馳せ上ったが、影も形もなかった。

能が終った時、舞台の一箇処に、紙の小札が貼りつけてあった。
「鼠小僧　御能拝見」
と、記してあった。
隣屋敷では、すぐに、姫路侯邸へ、通報して、「当家へ狼藉者が侵入つかまつったが、もしそちらへ参った気配があれば、捕えられよ」と教えた。
姫路侯では、屋敷境に、人数をそろえて、待ちかまえたが、怪しい者は、忍び入っては来なかった。
しかし、その間に、長局のいくつかの女中部屋では、金子が盗まれて、その高は、百両あまりになっていた。
元来が、大名の江戸屋敷には、老朽無能の人物が奥向勤めをしていたので、剛健の気風など地を払っていた。
しぜん、長局の女中たちも、だらしなくなり、鼠小僧のような盗賊にまで、バカにされてしまった。

二

桜田優之助が、貧乏御家人の娘に化けて、若年寄堀田摂津守正衡の下屋敷へ、奉公に上ったのは、秋晴れの佳日であった。
その下屋敷には、摂津守の息女田鶴が、女主人として、三十人あまりの女中をかしずかせて、くらしていた。摂津守は、下屋敷へは、年に二度か三度、やって来るだけであった。
家臣は、表の方に、十人あまりが留守居しているだけで、まず、女護ケ島の様相を呈している。
鼠小僧が、生きていれば、盗みを働くのに恰好の屋敷であった。
大名屋敷は、江戸城に準じて、表と奥に別れている。女性たちが住むのは、江戸城では大奥といい、大名屋敷では、奥向という。
大名の奥向は、夫人の絶対支配下にあった。柳営とちがって、規模が小さいから、夫人は、充分に権力がふるえたわけである。
堀田家下屋敷では、夫人の代りに、一人娘田鶴が、その権力を独占していた。
優之助は、むささび吉五郎の情婦小まきを下女にしたてて、堀田家下屋敷の長局に入った。
息女田鶴附きの中老が、吟味にやって来て、優之助を視るや、
「通報たがわず、美しい女人よの、そなた」
と、云った。
「しかし、その厚化粧は、いかがなものか。当家では、お側役でも、薄化粧にて、髪もかざらぬしきたりじゃ」
「すぐに、お白粉を落しまする」
「ま――今日はよい」
中老は、衣裳を着かえるように、命じた。
紋のついた裾模様の間着に、総模様の掻取が用意されていた。

中老の面前で、着換えるわけであった。

——やはり、小まきをつれて来てよかったな。

優之助は、内心そう思った。

堀田家の女中たちに手つだわせて、着換えたならば、男であることが、露見するおそれがあった。

中老は、優之助が着換えおわるのを待って、立ち上り、

「では、お目見を——」

と、促した。

江戸城大奥に比べれば、きわめて小さな規模であるが、それでも、長局は、一ノ側、二ノ側とわかれて、それぞれ十五、六の住居が並んでいた。

一ノ側には、年寄とか御側とか表使いなどの高級女中が住み、これを表局という。

二ノ側には、祐筆、御次、お三の間など、身分のひくい女中が住み、これを裏局という。

出仕廊下をしずしずと進み乍ら、優之助は、表局の各部屋の障子が細めに開けられて、そこから、いくつかの視線が放たれるのを、感じた。

——自分が男であることを、看破る者がいたら、この屋敷からつれ出して、当分わが妾にしてくれるのだが……。

その視線も、どうやら、こっちの美しさに見惚れただけらしい。

摂津守息女田鶴は、まだ午まえだというのに、褥に横たわって、二人の女中に、肩や腰をもませていた。

「直参御家人桜田強右衛門のむすめ優、お目見つかまつります」

中老が、紹介すると、田鶴は、枕からものうげに、頭をあげた。

優之助は、畳に両手をつかえて、平伏している。

「顔をあげよ」

「はい——」

ゆっくりと、顔をあげると、田鶴は、大きく目をみはった。

「なんという美しい女子じゃ！」

正直に、感動の声をあげた。

優之助の方は、田鶴の面貌を一瞥して、

——やれやれ！

と、うんざりした。

遠藤但馬守は、無類の醜女、と云ったが、たしかに、よくもこんなにみっともない造作に生れついたものだ、と感服させられるくらいであった。

——但馬守は、三日間で、この女を無我夢中にさせよ、と云ったが、三日間など、こっちがねがい下げだ。たった一度、抱くだけで、もうたくさんだ。

優之助は、自分に呟いた。

田鶴は、中老にうなずいてみせておいて、優之助に、

「そなた、家で、父母のからだをもんだことがあるかえ？」

と、訊ねた。

「はい」
「では、この者どもに代って、少時、もんで欲しい」
「かしこまりました」
田鶴は、二人の女中を下らせた。
優之助は、褥に寄って、田鶴の腰へ、両掌を置いた。
「どのようにきつう押してくれてもよい」
「はい」
少々指圧を加えても、感じないほどの肥満体で、しかも、武芸でも習ったように、肉がかたかった。
「皮肉なものよ」
田鶴が、枕へ額を置き乍ら、云った。
「なんでございますか？」
「そなたは、絶世と申してもよいほど、美しい。それに、ひきかえて、わたしは、万人に一人も居らぬほど、みにくい面相を持っている。……わたしが、そなたに、按摩してこそ、図になる。そなたが、わたしを、もんでは、絵にはならぬぞえ」
「……」
「そっくり、顔をとりかえられるものなら……」

三

と——。
不意に、身をねじった田鶴は、すばやく、片手を優之助の頸へかけて、ひき寄せた。
優之助は、醜女の唇へ、おのが口がふれるや、思わず、
——南無！
と、胸でとなえた。
次いで、田鶴のもうひとつの手が、こっちの股間をさぐりかかるや、
——三宝！
と、となえた。
「ご息女！」
顔をはなすと、優之助は、声音を男のものにもどして、じっと、田鶴を見下した。
「貴女は、まだ、処女（きむすめ）のままで、いられる？」
「……」
田鶴のみにくい顔に、困惑の色が刷かれた。
「醜女のゆえに、どこへ嫁ぐこともならず、悶々としているうちに、女中どもを対手（あいて）に、欲情を散らすすべをおぼえられた」
「……」

「しかし、女と女が、どう睦み合うても、所詮は、なんとない不満がのこるもの。……今日までの貴女は、その不満を積み重ね乍ら、やむなく昼となく夜となく、女中どもを伽させて来られた。……思えば、お気の毒なご婦人と申せますな」

「そ、そなた……、いったい、何者じゃ？」

田鶴は、喘ぎつつ、問うた。

「貴女に、まことの満足を与えようとして、参上いたした者と、お思い下され」

「そ、そなたは……お、おとこか？」

「左様――」

優之助は、にことしてみせた。

田鶴の目には、どう眺めても、女でしかなかった。

「ま、まことか？」

「その証拠を、いま、ごらんに入れますわえ」

優之助は、ゆっくりと、田鶴の衣裳の前を、左右へひらかせた。

――生涯に、一度だけ、男と交わる、ということは、どういうものか、おぼえておくがよい。

優之助は、自身の前もはぐると、下腹を下腹へ密着させた。

「ああっ！」

田鶴は、強く張った、固い物に、徐々に押し入られるや、小さな悲鳴をあげて、首をねじった。

――女中ども対手の睦み合いは、どうやら、児戯にひとしいものであったらしい。

優之助は、一瞬、憐憫さえおぼえた。

「……いたい！」

田鶴は、鼻翼にあぶらを浮かせ、眉宇をしかめて、もらした。

「我慢！」

優之助は、一気に、女体を突いた。

「うっ！」

田鶴は、敷具の上を、摺って、がくりと、頭を落した。

あとに、静止が来た。

ふと――。

優之助は、なにやら、頬にふれるものがあるのに気づいた。

それは、天井から、まっすぐに垂らされた一本の絹糸であった。

天井板が、一枚、はずされている。

優之助は、見上げて、そのくらがりからのぞくむさぶり吉五郎の顔をみとめると、微笑した。

優之助が、すこし、顔をずらせると、絹糸は、田鶴の唇の上へ、来た。

絹糸をつたって、黒い液体が、落ちて来るのを、目蓋をひしと閉ざした田鶴は、気づかぬ。

ここで、目蓋をひらかれては、せっかくの趣向が、水の泡であった。

するすると、つたい落ちて来た液体は、田鶴の唇のあいだへ、ぽとりと、したたった。

絹糸が、たぐりあげられた時、もう毒薬のききめは早く、田鶴を昏睡の中へ、ひきずり込んでいた。

優之助は、田鶴の上から起き上ると、早速に、南蛮渡来の珍品を、物色しはじめた。

床の間には、置時計が、正確に廻転していたが、これは、かさがはっている。

床の間にならぶ、違い棚に、いくつかの壺と皿が飾られてあった。

いずれも、西欧の貴族風俗を描いてあった。

優之助は、まず、それらの壺皿の中からえらんで、吉五郎が、垂らした細引へくくりつけた。

厨子の文筥をあけてみると、どうやら婦人の頸やら耳朶やら腕を飾るものらしい、宝石と金銀でつくられた精巧な品が、ならべてあった。

優之助は、文筥毎頂戴することにした。

違い棚の上の袋戸棚をあけると、剣、拳銃などが、幾種類も置かれてあった。

「やれやれ、これでは、きりがない」

優之助は、廊下に衣ずれの音がひびいたのをしおに、物色を中止した。

天井板は、きちんと元通りにはめられ、部屋は何事もなかったかのように、ひっそりとなった。

「姫様――」

中老が、呼んだ。

「姫様は、おやすみでございます」

優之助が、こたえると、中老は、障子を開けて入って来た。

「そなた、表局へ、部屋を設けましたゆえ、それへ、さがって、やすむがよい」

「はい――」

優之助は、廊下へ出ると、

――役済みだ。

と、薄ら笑いして、歩き出した。

室町三丁目の「色や」へひきあげて来た優之助は、二階へ上ってみて、

「早いな、吉五郎」

と、おどろいた。

吉五郎は、八畳いちめんに、盗んで来た南蛮品をならべていたのである。

これだけのたくさんの品を、一人で、どうやって、堀田家下屋敷からこっそりはこび出したのか、優之助は、見当つかなかった。

「この品ものを、そっくり、遠藤但馬守へ、さし上げなさるんで――？」

「約束じゃからな」

「もったいねえ。……この短筒一梃だけで、二百両は、しますぜ」

「わしに、猫ばばせよ、とすすめるのかえ？」

「殿様のお気持次第でございますがね」

「吉五郎、これらの品を、背負い荷にして、ついて参れ」

夜もかなり更けてから、武家姿に還った優之助は、吉五郎を供にして、遠藤但馬守邸を訪れた。

みちびかれたのは、やはり、茶亭であった。

但馬守は、すでに、茶亭に坐っていた。

「流石(さすが)は、桜田優之助、仕事が、はやいな」

但馬守は、あばただらけの顔を、ほころばせた。

「盗んで参った品々、お気に召すかどうか――」

優之助は、吉五郎に、荷を解かせて、但馬守の前へ、つぎつぎと、ならべさせた。

「ほう、意外に、たくさん、盗んで参ったな」

但馬守は、ひとつひとつ、手に把(と)って、熱心に、眺めた。

やがて、但馬守は、優之助に対して、

「お主の働き、あつく礼を申す」

と、頭を下げた。

「但馬守様に、ひとつだけ、お願いの儀がありまするが、是非とも、おききとどけ願わしゅう存じます」

優之助は、語気をあらため、きびしい表情になった。

「きこうか」

「小普請組(こぶしんぐみ)の、われらが仲間の儀でございます」

「うむ」

優之助は、目下、その罪を問われて、行方を探索されている古城進八郎を、吟味無用にして頂きたい、と申し出た。

「古城進八郎は、なにやら、よからぬ企みをしている疑いがある」

但馬守は、云った。

「その企みは、決して実現いたすおそれはありませぬ。何卒(なにとぞ)、吟味無用のおとりはからいを、して頂きとう存じます」

優之助は、ひくく、頭を下げた。

但馬守は、しばらく、沈黙を置いてから、

「考えておこう」

と、こたえた。

第二十一話　勤番武士

一

井部鉄之助は、久しぶりに、子竜平山行蔵の道場「平原草廬」へ、姿を現わした。
道場は、ふたつにわかれていた。剣道場と学問道場と。
井部鉄之助は、学問はきらいなので、滅多に、そっちへは入ったことがなかった。
剣道場に入ってみると、門弟の数は、十人に満たぬさびしさであった。
平山行蔵が、ここ三年あまり、臥牀しがちになってから、門弟の数は、急速に減っていた。
尤も——。
行蔵自身が、自ら木剣を取って、教授した頃も、決して、門弟の数は、多いとはいえなかった。
平山道場の稽古は、面・胴・籠手をつけて、撓竹でパンパン打ち合うのではなかった。
素面・素籠手で、木剣をふるったのである。
したがって、怪我人が続出した。

当世、こんな凄じい稽古をするのは、平山道場だけであった。
平山行蔵は、撓竹でやたらに打ち合うのは、修業にならぬ、と軽蔑して、そのために門弟の数が限られても、妥協することをしなかった。
実戦兵法。
それが、平山行蔵が終生主張するところであった。
井部鉄之助が、入って行った時、三人ばかりが、木剣を素振りしているだけで、対峙して睨み合っている組はなかった。
「下村——、やろうか」
鉄之助は、まだ二十歳あまりの、下総の郷士の次男を、促した。
そういえば、平山道場には、旗本や各藩家中の子弟は、ほんの数人しか門下になって居らず、大半が、地方の郷士の伜が、出府して来て、ここに学んでいた。
本当に剣に強くなりたい、という志に燃えている青年は、もはや、旗本や各藩家中には、いないように思われた。
下村勇は、
「おねがいいたします」
と、鉄之助の木剣と自分のを携げて、中央へ進み出て来た。
鉄之助に、それを渡しておいて、下村勇は、すすっと退るや、
「ごめん！」
と、大上段に、ふりかぶった。

門弟の中で、最も熱心で、しかも、目ざましい上達を示して、群を抜く存在であった。
鉄之助は、青眼に構えて、じっと下村を凝視した。
――強くなったな。
たのもしい、と思う。
下村は、この半年ばかりで、奥旨会得でもしたように、退くことを知らぬ戦法を発揮していた。その戦法に、敵う同輩は、いなくなっていた。
いまも――。
下村は、じりじりと肉薄して来る。
狩野弥太郎とともに、竜虎と称される井部鉄之助に対して、自分の方から、間合をきめるのは、よほど自信がなければならぬことである。
と――。
「そこまでで、停止じゃ。あぶない」
その大声が、かかった。
武者窓からであった。
固唾をのんで、この立合いを見まもっていた門弟たちは、一斉に、武者窓を視た。
おそろしく長い馬面が、のぞいていた。無精髭をのばし、薩摩芋を、むしゃむしゃ喰べていた。
下村は、その忠告を無視して、すっと一歩すべり出るや、
「ええい！」

満身からの気合を噴かせて、攻撃を放った。
鉄之助は、その一撃を宙に唸らせておいて、下村の脇を奔り抜けた。
鉄胴が、激しい音を発し、下村は、だだっと、泳いだ。そして、勢いあまって、武者窓の前まで、駆けて、膝を折った。
「それ、みたことか」
武者窓の男は、笑った。

二

鉄之助は、武者窓の男に、入って来ないか、と誘った。
「……それでは――」
男は、うなずいて、戸口へまわって来た。
その姿は、浅黄裏と蔑称されている勤番武士であった。
大名屋敷には、二種類の藩士がいた。常時在府して、国許には一度も帰らぬ藩士と、参覲交替で一年置きに江戸へ出て来る主君に従って出府して来る藩士と。
前者は、江戸住いが永く、江戸で死ぬ者であるから、そのくらしぶりにそつはない。後者の方は、はじめて江戸を見物する田舎者であるから、万事が野暮ったく、江戸の市民たちに、さげすまれた。
まとっている羽織の裏の布地が、水色の浅黄木綿を用いていたので、勤番武士は、ひっく

るめて、「浅黄裏」と蔑称された。野暮の代名詞であった。

この馬面の勤番武士も、ご多分にもれず、非番の日を利用して、江戸見物に出かけて来た模様である。

江戸は、国許に比べて、非常な物価高である。

安いのは、薩摩芋だけであった。

そこで、焼芋屋から買って、これを午食にしている次第であった。懐中から、まだ三、四本、のぞいている。

勤番の下級武士にとって、江戸見物の敵は、物価の高いことである。

「いずれのご家中か？」

鉄之助が、訊ねると、

「西国の、吹けば飛ぶような一万二千石の小藩でござる。あるじの名はごかんべん下され。拙者は、五十嵐征十郎と申す。征は、出征、征伐の征でござる」

そうこたえてから、門弟の一人に、

「おそれ入り申すが、水を一杯」

と、所望した。

薩摩芋で、のどが焼けたらしい。

無遠慮で、いかにも土くさい田舎者だが、飄々として、愛嬌がある。

「お主、相当の手練者と看たが……」

鉄之助は、鋭い視線を当てて、云った。

「いや、いや――」

五十嵐征十郎は、門弟からさし出された大茶碗の水を、ひと息に、飲み干してから、かぶりを振った。

「正しい兵法など、習ったことは一度もござらぬ。……拙者の国は、岩山だらけでござってな、その岩を、棒きれで、なぐる独習をやったまでで、剣の修業などといえたものではござらぬ」

「一手、合せて頂こうか」

鉄之助は、興味を抱いて、挑戦した。

「さあ、どういうものでござろうかな」

五十嵐征十郎は、しぶった。

「どういうものかとは？」

「拙者は、今日まで、岩しか、なぐったおぼえがないのでござる。人間をなぐるのは、どういうものかと存じますな」

「それがしは、岩ではない。岩は動かぬが、それがしは、自由に動くことができる。貴公に打たれるままに、じっとしている筈がない」

鉄之助は、苦笑し乍ら、云った。

「左様でござるか。では、ひとつ、お手合せをお願い申しますかな」

五十嵐征十郎は、のそのそと、板壁の木剣架けに近寄って、一番重いのを、えらんだ。

三、四度、素振りをくれてから、鉄之助に向い立ったが、この男は、まるで立ち合う闘志

などないように、

「それにしても、江戸は、ひどう高直でござるな。まず、拙者の国に比べて、二倍でござるな。拙者は、江戸見物をいたすのに、一日に使う金を百文ときめて、駕籠には絶対に乗らず、午食は薩摩芋、夕食は、蕎麦ときめ申してな、蕎麦だけでは満たぬので、蕎麦湯を五、六杯もがぶのみいたして居るわけでござるが、なにせ、江戸と申すところは、どんな場末に行っても、一膳飯屋、汁粉屋、蕎麦屋、うなぎ屋、掛茶屋のないところはござらぬので、つい、うっかり、ふらふらと入り申すと、さあ大変、あの吉原土手の掛茶屋など、茶代をふんぱつして、三十文も置いたところが、茶くみ女が、さもさもさげすんだ口調でな、旦那、この吉原土手で、百文以下の茶代はござんせん、と申したことでござる。一日百文の予算が、茶代でふっとんだ次第でござる」

鉄之助は、しかたなく、対手が喋りおわるまで、待つことにした。

「そこで、拙者は、一計を案じ申して、湯屋に入ることにいたした。湯屋の二階は、ただで茶を飲ませてくれ申すので、薩摩芋持参で、半刻ばかりのんびりすごすことができて、有難いわけでござる」

「酒は？」

「好物でござる。しかし、とてもとても、清酒など買える身ではござらぬので、焼酎でがまんして居り申すな。……まずまず、われわれ勤番者にとって、最も居心地のよいのは、湯屋の二階でござろうか。茶店などにうっかり入ると、奈良茶六十四文などと記してあるので、つい注文すると、二百文の菓子が添えられていて、目から火の出る思いをいたしてな、だまされた気分になり申すが、湯屋の二階では、三助や小女が、ただ茶を出してくれ、菓子を取っても一個八文で、好きなものがえらべるし、湯代が八文、十六文ですみ申すな。糠袋の借り賃が四文、垢こすり代四文、三助は親切で、ていねいに背中を流してくれ申すし……こんなところは、国許にもござらぬ。勤番者をだまさぬ唯一の場所でござるな」

正直に、包みかくさず、田舎者ぶりを打明けてみせるのに、鉄之助も、門弟たちも、微笑していた。

瞬間——突如として、

「とおっ！」

道場をびりびりとうちふるわせるばかり凄じい懸声とともに、五十嵐征十郎は、鉄之助の脳天めがけて、長い木剣を、振りおろして来た。

三

しゃべりたてるのは、策であったのか。それとも、鉄之助が、うかつに、隙をみせたためであったか。

いずれにしても、その一撃は、これまで鉄之助があびたことのない程の鋭気のこもったものであった。

反射的に、鉄之助は、頭上で、受けとめることは受けとめたが……。

受けとめた木剣は、ま二つに折れ、衝撃は鉄之助の全身に、びいいんとひびいた。

「失礼つかまつった」
征十郎は、うしろへ退って、一礼した。
鉄之助は、なお四肢が、しびれて、動けなかった。
「お見事！　たしかに、それがしは、岩にされ申した」
そう云ってから、鉄之助は、吐息した。
「ご無礼ご容赦――、では」
出て行こうとする征十郎を、鉄之助は、呼びとめた。
「それがしに一敗を喫せしめた貴公に、旗本としては、江戸の最も華やかなところへ、案内する義務があるようだ。……おつきあい頂こう」
「忝じけのうござる。どこでござるかな？」
「吉原をまだ、ごらんになって居られまい」
「ほう、吉原でござるか。いや、これは、夢のような話でござる。拙者は、まだ、独身でござって、国許では、十八歳の折、菩提寺の後家になった梵妻によって、たった一度色の道を教えられただけでござる。男子でござれば、江戸へ出たならば、吉原へ行くことは、最高の願望でござる。胸がおどり申すな。わくわくいたす」
鉄之助は、こんな正直な男には出会ったことがなかった。
それから、半刻後――。
鉄之助と征十郎は、吉原土手を歩いていた。
掛茶屋がならんでいて、さかんに茶汲みたちが、客を呼んでいた。

「勤番者が歩いていても、一声もかけてくれ申さぬが、さすが、旗本殿が歩かれると、女子どもが甘い声を降らせて参るものでござるな」
征十郎は、顔馴染の茶汲みたちから、呼びかけられる鉄之助に、感心した。
「莫迦金をすてた、というだけのことだ」
「なんでござるか。これらの茶屋の女子どもも、口説きかたによっては、寝るのでござろうか？」
「勿論、五人ばかり、それがしも、知って居るが……、べつに、どうということもない」
「顔だちと申し、肌の白さ、容姿の仇っぽさと申し、とても、一夜売りなどしそうもござらぬが、ふむ、客の口説き次第では、寝るのでござるか」
「貴公、寝たければ、それがしが、話をつけてもよいが……」
「いやいや、この浅黄裏が、などとさげすまれ乍ら、抱かせてもらうのは、まっぴらでござる。吉原の女郎ならば、さまざまの種類の客と枕を交しているのでござろうゆえ、勤番者でも、さげすみはいたしますまい」
「貴公のような人物こそ、まこと、惚れ甲斐があるのだが、女という奴は、外見しか見ないので、いかん」
そう云いすてる鉄之助のわきを、
「旦那、へい、おひさしぶりのお遊びで――」
顔見知りの幇間が、すり抜けて行った。
「おい、のだ六」

「へい――」

「大門まで、まだ三丁ある。この勤番衆に、お前のしぶいのどを、きかせてあげてくれぬか」

「へえ？」

のだ六は、けげんな面持で、鉄之助と征十郎を見くらべた。

旗本の中でも、遊び人として通っている井部鉄之助と、勤番武士の中でも最も土くさい部類に属する男と、つりあいのとれぬ連れ立ちが、のだ六には、解せなかった。

「実は、道場で、おれは、この御仁に敗北したのだ。その罰として、吉原をおごることになった」

「なァる――、それァ、おつらいことで……。いっちょう、やりやすかね」

「たのむ」

のだ六は、ひょいと、ぬき襟にして、やぞうをつくると、うたい出した。

花は上野か、染井のつつじ
今日かあすかへ日ぐらしの
思い込んだる狐穴から
いろはの女郎衆にまねかれて
うつらうつらと抱いて根岸の
身がわり地蔵を横にみて

土手を八丁、吉原五丁
まわれば、四つすぎ
間夫はひけ刻、ええ、上らんせ

四

やがて――。

鉄之助が、征十郎をともなって、登楼したのは、揚屋町の名代の総まがき丁子屋であった。

吉原は、深川芸者や私娼に圧倒されて、ひと時代前の隆盛はなくなり、大門をくぐっても、なんとなく、さびれた雰囲気が感じられるようになっていた。

引手茶屋からあがって、いろいろ面倒なしきたりを踏んで、女郎を呼ぶという旧慣が、客の足を遠のかせていたのである。

しかし、生れてはじめて、廓にあがった五十嵐征十郎にとっては、なにもかも珍しく、面白いらしく、その感動をいちいち、口にした。

花魁が、立兵庫の髪に、二十本近い金銀鼈甲の簪櫛をさし、金銀五彩の色絲で繡模様をほどこした緋縮緬に、錦襴緞子の俎帯を胸高に締めて、象眼の装飾を加えた仕掛をはおって、しずしずと現われるや、征十郎は、

「わあっ！」

と、両手を高くさしあげて、歓喜の叫びをあげたものだった。

芸者がならび、座持ち、太鼓持ちが入って来て、座がにぎやかになると、征十郎は、

「これは、まさしく、極楽でござる」

と、うきうきして、腰もおちつかぬていになった。

鉄之助は、征十郎に、敵娼をきめてやり、

「いかがか？」

と、意見をもとめた。

「この美女と、拙者が一夜をすごすのでござるか！　ふうむ！」

征十郎は、信じられぬ表情になった。

「なんとも、どうも、あとで、罰でもあたるような気がいたす」

「金で買った女だ。煮て食おうと焼いて食おうと、明日正午までは、貴公の自由だから、存分に愉しまれるがいい」

鉄之助は、それから半刻もさわいでおいて、さっさと、座を立った。

小部屋に入って、しばらくすると、入って来たのは、花魁ではなく、小町という芸者であった。

鉄之助は、吉原へ来ると、この芸者以外とは寝なかった。

「いたちの道切りか、と思って居りましたえ、鉄ぬし」

小町は、いきなり、抱きついて来た。

「天下をひっくりかえそうという大陰謀で、忙しかったのでな」

「天下をひっくりかえして、どうなさるのですか？」

「おれが、将軍家に――と云いたいが、どうも、将軍家は柄ではないようだな」

「ご老中が、よござんす。公方様よりも、ご老中の方が、本当の力をお持ちなのでしょう？」

「老中か。老中になる器量もないのう。せいぜい、目付ぐらいの役どころだ」

鉄之助は、小町を横抱きにすると、片手で、裳裾をたくしあげて、膝の奥へ、指を匍い込ませた。

「いや！　せっかち殿様！」

小町は、身をゆすった。

「お前は、吉原は、性分に合わぬのではないか。深川へ鞍がえしたらどうだ。……どうも、吉原は、品位を下落させ乍ら、形式しきたりだけを頑固に守っていやがる。だから、だんだん面白くなくなって来た」

「しようがないぞえ。お上が、つかまえた淫売を、みんな、この吉原へ送り込んで来るものだから、小見世の安女郎ばかりが増えて、しまつにおえなくなっちまったんですよ」

「世の中万事せちがらくなって来たのだ。吉原が、妙なもったいぶったしきたりをふりまわすのも、面妖しなものだ。そこで、おれも、こうして――」

と、小町を、座布団の上へ仰臥させると、

「ちょんちょん、ちょんの間の、蟬の小便、という野暮なまねもやってくれるのだ」

と、のしかかった。

それから、ものの四半刻も経った頃——。
突如として、丁子屋に、騒動が起った。
騒動を起したのは、五十嵐征十郎であった。

第二十二話　骸　骨

一

それは、人間ではなかった。骸骨であった。四肢は、細い枯枝であった。顔は、骨に土色の皮膚が貼りついているだけで、眼窩の奥で、眸子がまだ動いているのが、ふしぎなくらいであった。

骸骨であり乍ら、生きていた。しかも、緋の長襦袢をまとっている女なのであった。

それを、勤番武士の五十嵐征十郎が、両腕にかかえて、長廊下を、のそのそ歩いて来たのである。

恰度、ひけ刻に登楼して来た客数人が、敵娼をつれて、それぞれの部屋へ入ろうとして、征十郎にぶっつかり、ぎょっとなって、立ちすくんだ。

丁子屋の用心棒が三人ばかり、あわてて、奔って来た。

「お客さん、妙なものを、ひろい出さねえでおくんなさい」

物腰はいんぎんだが、凄味をおびた眼光を刺しつけた。

「妙なもの？……これは、べつに、妙なものではないぞ。生きている人間だ。生きている人間を、物置小屋にほうり込んでおいて、死ぬのを待っている、残酷な仕打ちをする方が、人間ばなれがして居るのではないかな」

征十郎は、云った。

征十郎は、厠に立ったのであるが、勝手のわからぬまま、廊下を歩きまわっているうちに、裏庭へ出た。

ままよ、と庭へ降りて、小便をやろうとして、物置らしい小屋わきに立った時、内部から、微かな呻き声が、つたわって来たのであった。

覗いてみると、この女郎が、ぼろ夜具にくるまって、息絶え絶えのていで寝ていたのである。

華やかな世界には、必ず裏面に、悲惨な現実があるのは、いつの時代でも、共通している。

江戸の川柳に、

生きては苦界、死しては浄閑寺

というのがある。

三の輪に近い南千住にある浄閑寺というのが、吉原遊女の投げ込み寺であった。

遊女というものは、親や良人のため、あるいは悪い男にだまされて、廓に売られ、夜毎、見知らぬ客と枕を交した挙句、からだをこわし、年期明けまで生きのびることのできる女は、すくなかった。

痩せさらばえて、死んで行くと、一般の庶民のように墓を建ててもらえることもなく、犬か猫のように、穴へ投げ込まれて、無縁仏になるのであった。

浄閑寺は、いつ頃創立されたのか、つまびらかではないが、明暦大火以後、移転して来た新吉原が、ここを、遊女の埋葬寺として、その過去帳には、すでに一万人以上の遊女の名がのこされている。

病死した遊女の年齢は、すべて二十代であったことが、いたましい。

つまり――。

五十嵐征十郎が、物置小屋で発見した遊女は、近い日に、浄閑寺に投げ込まれる運命にあったのである。

「ともかく、その女を、渡しておくんなさい」

用心棒たちは、三方から、征十郎に迫った。

「渡せんな」

征十郎は、はねつけた。

「どうしようと云いなさるんだ？」

「これは、人倫の道をふみはずした、むごたらしい行為だ。町奉行所へ、つれて行って、あわれな遊女どもを守って頂けるように、願い出ることにいたす」

「冗談じゃねえ！……とんだ、浅黄裏が舞い込んだものだ。いいかね、旦那、この吉原は、大門うちで起ったことは、お奉行所も、手を出さねえしきたりなんだ。……つべこべ云わねえで、さっさと、渡してもらいてえ！」

「拙者は、吉原のしきたりなんぞ、なにも知らんが、人間が犬猫以下のとりあつかいをされ

て、斃死させられるのを、黙視しては居れん！」

征十郎は、屋内がびりびりふるえるほどの高声を発した。

二

井部鉄之助が、遣り手婆の注進で、廊下へ出て来た。

眉宇をひそめて、近づくと、

「五十嵐氏、とんだ裏を見たものだな」

と、云った。

「これが、野暮の振舞いと申すものだ、と云われても、拙者は、こやつらに、渡すわけには参り申さぬ」

征十郎は、こたえた。

「どうするかな」

鉄之助は、いささか、当惑して、首をかしげた。

「旦那――、お旗本なら、この浅黄裏を押さえることぐれえ、おできになる筈ですぜ」

「ところが、五十嵐氏の方に、正当な道理がある」

「じゃ、旦那は、自分の連れだから、味方する、と云いなさるんで――？」

「味方をする、とは申して居らぬが、むりに押さえるわけにも参らん」

「じゃ、しかたがねえ！」

用心棒たちは、目くばせし合った。

鉄之助が、

「五十嵐氏、この連中は、腕ずくで、取りかえす、と申して居るが……」

「渡さぬ、と申している以上、そういうことになるでござろうな」

征十郎は、平然としている。

鉄之助が、用心棒たちに、

「場所は――？」

と、訊ねた。

「鷲明神の境内」

即座に、指定された。

「よかろう」

やがて――。

垂死の遊女を駕籠にのせて、鉄之助と征十郎は、大門を出ると、日本堤を、北へとった。

「吉原という廓の、表と裏を一時に見せて頂いて、お礼を申し上げねばなりませぬな」

征十郎は、云った。

「乗りかかった船、というわけだが、貴公は、もう二度と、吉原へは参れぬことになった」

「一日百文の予算しかない田舎侍には、たった一度、見物するだけで、もう結構でござる」

征十郎は、笑った。

鷲明神の境内には、すでに、さきに、敵がたが到着していた。

「十人――いや、十一人か」
その十一人の中には、五人の浪人者が交っていた。
「これは、一人では、扱いかねるな」
鉄之助が、云うと、征十郎は、
「ご見分だけお願いつかまつる」
と、ことわった。
鉄之助としては、道場で、征十郎の業前を見とどけている。
しかし、実戦となると、話は別である。
対手がたは、いずれも、人を一人や二人は殺している手輩であった。
――助太刀は必要であろうな。
鉄之助は、そう考えざるを得なかった。
しかし、ひとまず、見分の立場をとることにして、鉄之助は、駕籠わきに立った。
用心棒十一人は、一斉に、刀を、匕首を抜いた。
征十郎は、両手をダラリと下げたなりで、一人一人の構えを見ていたが、
「では、つかまつる」
と、云って、差料を鞘走らせた。
構えもなにもなく、のそのそと、半円を描く敵陣の中央へ向って、大兵の身をはこんだ。
鉄之助の方が、固唾をのんだ。
征十郎の正面には、浪人者が立った。これは、上段に構え、相当の手練者である。

これが、じりじりと迫って来るや、征十郎は、至極無造作に、ひょいと、まっすぐに、剣をさしのべた。
「えいっ！」
浪人者は、猛然と、撃ち込んで来た。
征十郎は、脳天をまっ二つにせんと振り下された一撃を、剣を直立させざま、鍔もとで、受けとめた。
と同時に――。
抜く手も見せぬ迅さで、脇差を、一閃させた。
逆手斬りに殺いだのは、対手の鼻であった。
血飛沫を顔面から噴かせて、浪人者は、よろめいて、後退し、片手で鼻を押さえると、うずくまってしまった。
「野郎っ！」
横あいから、一人が、匕首を突き出して、体当りをくれて来た。
征十郎は、躱しざまに、剣をはねあげた。その用心棒の耳が、飛んだ。
つづいて、斜め横から、浪人者が、躍り込んで、胴なぎの一手をくれて来た。
これに、征十郎が加えた迅業は、その片目へ、脇差の切先を、突き刺すことだった。

三

一人の鼻を殺ぎ、一人の耳朶を刎ね、そして一人の片目をつぶす、という迅業を、またたく間に継続させた征十郎の鮮やかな闘いぶりは、流石に、残り八人の用心棒をして、浮足立たせた。

征十郎自身は、なにか余興でもやったように、けろりとしたもので、

「さて――、次は、どなたでござろうか」

と云って、三、四歩出ると、一人の顔をのぞき込むようにして、

「お主など、いかがでござろうか。その右手の指を三本ばかり、切断させて頂くことにいたそうか」

と、からかう余裕を示した。

鉄之助は、浪人者の一人が、背後にまわり込むのを視て、

――さて、こいつを、どう料理するか？

と、いささか冷酷な興味を抱いた。

一瞬――。

浪人者は、身を沈めざまに、無言の気合をほとばしらせて、征十郎の双脚を薙いだ。

とみた刹那、征十郎は、地面から五体をかるがると浮かせて、ぱっと浪人者の脳天へ、乗った。

「ああっ！」

浪人者は、征十郎の巨軀の重さに、堪えかねるように、悲鳴をあげつつ、むなしく、刀を宙に振りまわした。

征十郎は、

「おりゃ、よっ！」

懸声とともに、浪人者の右手を、手くびから、すぱっと、両断した。

征十郎が、ひょいと、地面へ降り立つや、残りの敵は、どっと、後退した。

「果し合いは、そこまでだな」

鉄之助が、声をかけた。

すると、征十郎が、敵がたに向って、

「これで、ひきさがっては、天下の吉原を守護する役目を持ったお主がたの名折れになるのではござるまいか」

と、云った。

鉄之助が、敵がたに代って、こたえた。

「五十嵐氏、女がもう事切れたのだ」

駕籠のたれがあげられ、小田原提灯のあかりの中で、痩せさらばえた遊女の顔は、すでに生命のないものになっていた。

それから、小半刻後――。

鉄之助は、征十郎をともなって、馬道のとある鰻屋の二階にあがっていた。

「お主ほど強い手練者には、生れてはじめて出会うた」
鉄之助は、本心からそう云った。
「拙者が、真剣で、果し合いをしたのは、今宵が、はじめてでござる。……対手がたが、弱すぎたのでござろう」
征十郎は、こたえておいて、茶碗酒を、口にはこんだ。
いかにも、うまそうに飲む。
「失礼だが、貴公は、いくら知行を頂戴されて居る？」
「五十石でござる」
「五十石では……」
「勿論、食える道理がござらぬ。おはずかしい次第でござるが、猪獲りが、一家七人のくらしを、どうにか、立てて居り申す」
「猪を獲って居られる！」
「猪を獲るには、コツがござってな」
征十郎は、そのコツを、くわしく語ってきかせた。
耳を傾けているうちに、鉄之助は、ふっと思いついて、
「貴公は、山田長政という人物について、どう思われる？」
と訊ねた。
「山田長政？」
「左様――、シャム国へおもむき、王侯にまでのし上った山田長政という人物について、貴公のご意見をうかがいたい」
「……」
征十郎は、いささか当惑のていをみせて、がしがしと、頭髪をかいた。ふけが、ぱらぱらと、肩やら膝やらへ、散った。
「貴公ほどの度量と、業前を持った武士が、一万そこそこの小藩の五十石家臣として、あまんじているとは、どうにも、もったいなさすぎる」
鉄之助は、古城進八郎の主謀によって結成された天保倭寇党について、くわしく、語りはじめた。

四

征十郎は、鉄之助が述べたてている間、黙って耳を傾けていた。
八幡船再興！
いかに才能ありあまっていても、驥足を展ばす余地のないこのご時世に、旗本小普請組の青年たちが、徒党を組み、幕府御用船を奪って、これを八幡船にしたてて、海の彼方へ――呂宋へ、安南へ、シャムへ、押し渡ろうという企てであった。
小藩の五十石家臣にとって、これ以上興味のある話はない筈であった。
「……どうだな、五十嵐氏、ひとつ、ほぞをきめて、われわれの壮挙に加わらぬか？」
鉄之助は、さそった。

「まことに、血わき肉おどるお話でござるな」

征十郎は、残り酒をひと息で飲み干してから、

「大事の秘密を、お打ちあけ下されて、まことに忝じけのう存じますが、拙者は、このお誘いを、おことわりいたさねばなりませぬ」

と、こたえた。

「勇気がない、とは云わせぬが……」

「もとより、拙者個人としては、即座に、ご一統に加えて頂きとう存じます。……遺憾乍ら、拙者は、主人持ちの身でござる」

「……」

「これが、ご三家とか、前田家とか島津家とか、大藩なら、拙者も、早速に、脱藩して、浪人となった上で、加えて頂くのでござるが……、わずか一万二千石の小藩では、それが不可能でござる」

「というと？」

「八幡船を興して、日本を脱出したあかつき、ご公儀は、拙者が、それに加わった罪を、主人にも、かぶせられるのではござるまいか。一万二千石をとりつぶす口実として、これは、恰度おあつらえ向きの罪でござる」

「……」

征十郎から、そう云われると、鉄之助も、

——あるいは？

と、思わざるを得なかった。

皮肉なことに、大藩よりも小藩の方が、その台所は、ゆたかな現象を呈しているのであった。

大藩をとりつぶすのは、容易ではない。しかし、小藩をとりつぶすのは、適当な口実があれば、さして世間をさわがすこともなく、やってのけられる。そして、幕府の台所は、かなりうるおうのである。

征十郎の懸念は、正しいようであった。

「惜しい！」

鉄之助は、呻くように云った。

征十郎の方は、至極のんびりとした態度で、ようやくはこばれて来たかばやきに、腹の虫を鳴らした。

「小藩の微禄の家に生れて、育つと、やはりそれだけの器量の人間にしかならぬようでござる。……驚天動地のお話をうかがっても、一向にピンと来ないくせに、こうして、美味の馳走にあずかると、生きている幸せをおぼえるのでござる。頂戴つかまつる」

征十郎は、かばやきに箸をつけた。

鉄之助は、じっと見まもっているうちに、ふっと、ひとつの疑惑をおぼえた。

——この男は、本当に、どこかの小藩の家中なのか？

——もしかすると、閣老の誰かがやとっている隠密ではあるまいか？

にわかに、鉄之助は、緊張した。

もし、そうであったならば、自分は、とんでもない大失敗をしでかしたことになる。
「五十嵐氏！」
「なんでござるか？」
「貴公が、勤番武士とは、思えなくなって来た」
鉄之助は、鋭い語気で、云った。
「……」
征十郎は、鉄之助を、視かえした。
「かりに、貴公が、われら倭寇党をさぐるために、遣わされて来た隠密であったとしたならば……」
鉄之助は、征十郎を、睨んで、
「この身をすてても、貴公を、報告に帰らせるわけには参らぬ！」
と、云った。
征十郎は、かぶりを振った。
「拙者は、ただの勤番者でござる。信じて下されい。……ここでうかがったことは、たとえ肉親であっても、口外つかまつらぬ」
「信じてよろしいな？」
「神明に誓い申す」
鉄之助は、ほっとした。
二人は、鰻屋を出ると、左右にわかれた。

腕を組んで、歩き出してから、鉄之助は、またもや、疑惑におそわれた。
――隠密が、やすやすと、本性をあらわすわけもない。
――あの男、やはり、公儀隠密ではなかったか？
しかし、もうおそいのであった。
――どうともなるようになれ。
鉄之助は、すてばちな気分で、大声をあげて、うたい出した。

臭気ふんぷん、糞小便
政道堕落、汚穢に満つ
地獄、極楽、腹合せ
とかく浮世は、色と酒
その酒、高うて飲まれない
生酔いこの頃、見たことない
抱かず、飲まずじゃ、愉しみない
先を案じちゃ、いのちがない
どうにか、なるには、ちがいない

第二十三話　富　札

一

妙に、往還がさわがしい日であった。

狩野弥太郎は、上野広小路を通り乍ら、

――そうか、今日は、藪入りか。

と、あらためて、あたりへ視線をまわした。

木綿の綿入れを、尻からげにして、小倉の帯にはさみ、千種色の股引、白足袋もま新しく、帯の結び目に扇子をさした商家の丁稚小僧が、主人や番頭の供をしている時とはちがったいきいきした表情で、街中にあふれているのであった。

一年に二日――正月十六日と七月十六日が、丁稚奉公の少年たちの藪入り日なのであった。

弥太郎のような、無為な日々を送っている者の目には、年にただ二日の藪入り日を、どうやって日暮まで、心のままに遊ぼうか、と夢中になっている少年たちの姿が、別の世界のものに映る。

――人間は、なにかしばられているからこそ、愉しみというものが、あじわえるらしい。

弥太郎は、今年の正月も、また、寝てすごした自分をかえりみた。

正月元旦を、のんびりとすごすのは、町家だけで、旗本たちにとって、最も多忙な日なのであった。

どんな小身の旗本でも、役に就いている者は、式服をつけて、登城し、上役の宅へ、年始回りをしなければならなかった。

例えば――。

奉行諸大夫格は大紋、組頭布衣以上の者は布衣、調役のような御目見以上の者は素袍、といういでたちで、家の者たちの挨拶を受け、登城には、熨斗目麻裃姿になり、役所に入ってからは、式服に着かえ、帰宅後の年始回りには、また麻裃を着用しなければならなかった。

さらに、その年始回りの対手がたは、近所にかたまって住んでいる次第ではなかった。北は本郷追分、小石川、白山、西は四谷、青山、南は白金、麻布、東は隅田川むこうの深川、本所に、ばらばらに、ちらばっているのであった。

麻裃、仙台平を鳴らし乍ら、府内東西南北を歩きまわって、玄関先に名札をさし出し、

「年頭のご祝儀を申し上げまする」

という挨拶をくりかえすのは、きわめて難渋な重労働であった。

礼儀三千威儀三百、といわれた形式儀礼の満ちた時世であった。

武士は、一挙手一投足を、それにしばられているといって過言ではなかった。

年頭の儀礼ともなれば、これをかたくまもらなければならぬのは、当然であった。

幕府の役所では、仕事の多い任務に就いている者は、年始回りを欠いてもやむを得ぬ、と不文律がもうけてあったが、それを欠く者は一人もいなかった。

もし、欠礼すると、その次の年あたり、お役御免の沙汰が下るおそれがあったのである。松の内の毎日を、足を棒にして、江戸中を歩きまわることは、若年血気の者でも、くたくたになった。

ただ——。

旗本のうち、小普請組のひねくれ者たちだけが、こうした重労働から、まぬかれた。せいぜい、組頭の家へ年頭の挨拶に行くくらいであった。尤も、なにかの役にありついて、小普請組という泥沼の中から脱出する野心を抱く者は、話が別であった。

狩野弥太郎のような、親族たちからも見すてられている旗本は、ただ、松の内は、寝てすごすよりほかはなかった。

小普請組の中に、人材が埋もれていることをおそれるから、組支配によって、適材を書上げ（推挙）させる、などという時代は、百年も前に過ぎ去っていた。

いかに平常慎み篤く、文武の道をたしなみ、格別の心がけのよさを示していても、何かの役にひき立てられるという幸運は、全くなかったのである。

立身の道がふさがれた者には、寝正月あるのみであった。正月は、遊里をはじめ、一膳飯屋や居酒屋までが、休業していたのであるから……。

二

「狩野ではないか」

うしろから、声をかけられて、弥太郎は、ふりかえった。

同じ小普請組の島中雄之助が、宗十郎頭巾をかぶり、うすよごれた素袷の着流し姿で、立っていた。

弥太郎は、島中雄之助が、三年ばかり前までは、なんとかして、御番入りをしようと、必死になって諸方へ運動していたことを、知っていた。

たしかに、島中雄之助は、秀才であった。

御茶水湯島の聖堂に設けられた昌平坂学問所で、旗本の子弟たちは、元服前後に、むつかしい試験を受けるならわしになっていたが、一度で合格する者は一割もなかった。

島中雄之助は、十三歳の年に、たった一回で合格し、十年に一度現われるか現われぬほどの秀才であろう、と教授連を感嘆せしめたものであった。

弥太郎ら友人も、

「島中を御番入りさせぬのは、ただに支配の怠慢というだけではない。公儀が政道を守ることを放棄した証左のひとつだ」

と、憤慨したものであった。

島中雄之助は、この二年あまりは、友人たちの前にも姿を現わさなかった。屋敷内に蟄居

している様子もなかったが、どんなくらしぶりをしているのか、誰も知らなかった。
「久しぶりだな」
弥太郎は、自身の方から声をかけて来た雄之助を、なつかしいものに見まもった。
「どうしていたのだ？」
「ごらんの通り、乞食同様のその日ぐらしだ」
雄之助は、自嘲の返辞を吐き出した。
弥太郎は、雄之助を、不忍池の畔の水茶屋へともなった。
落間は、丁稚たちで混んでいた。
「この小僧どもにも、夢はあるようだな」
雄之助は、云った。
弥太郎が、丁稚の一人に、
「お前は、どんな夢を持って居る？」
と、訊ねた。
「へえ――」
丁稚は、ちょっと、怯えたように首をすくめた。
「お前たちの年期は、十年だろう？」
「へえ」
「十年目に、手代になり、手代を十年勤めて、番頭か」
「へえ」

「暖簾を分けてもらえる――それが、夢だな？」
「へえ」
「暖簾を分けてもらった時には、お前は、もう五十になって居ろう。それでも、お前は、その夢をすてぬか？」
「自分のお店を持てるのなら、六十になっても……」
「成程、お前たちの方が、われわれより、はるかに意義のある生涯を送っているのかも知れぬ」
藪入りの日、その両親は、夜明けから起きて、伜の好きな料理をつくって、そわそわと待っている場面が、寄席の噺にも出て来る。
この時代の奉公人たちは、年に二日だけ、親の慈愛を受けられるのであった。
尤も、大伝馬町の大丸呉服店とか、上野広小路の松坂屋のような大店では、丁稚はみな主人の故郷からつれて来られた者たちであったので、藪入りのこの日は、番頭がひきつれて、芝居見物をするのが、ならわしになっていた。
いずれにしても、丁稚たちにとって、前夜は、ねむられぬほどの愉しみであった。
弥太郎も雄之助も、少年の頃、そんなわくわくする愉しみなど、一度として、経験したことはなかった。
「狩野――、実は、わしにも、夢がある」
突然、雄之助が、云った。
「お主が――？　どんな夢だ？　御番入りの代りに、なにを望んでいる？」

「ふふふ……、あさましい夢だ」

雄之助は、袂をさぐると、一枚の紙片をとり出してみせた。

「これだ」

それは、富札であった。

「お主が、富くじを――?!」

弥太郎は、唖然として、雄之助を、見まもった。

「可笑しいだろう。このわしが、富札を、せっせと買って居るのだ。……わしは、実力がありさえすれば、御番入りもできるであろうし、奉行にもなれると、思って来た。わしには、奉行職をつとめる実力があると、かたく信じて来た。奉行の座に就けば、これまでの如何なる名奉行よりも、秀れた事績をのこしてみせる、という確信を抱いて来た。……ところが、どれほど躍起になろうとも、わしら小普請の行手には、立身の道は、つけられてはおらぬ、と思い知らされた。……これらの丁稚小僧にさえも、努力次第で、将来一店のあるじになれる、という道がひらけて居る。わしら小普請には、なんの夢もない。努力すればむくいられる、という夢は、わしらには与えられて居らぬのだ。……狩野、あとは、努力せずにみる夢しかわしらにはないではないか」

三

富籤というものが、いつ頃、何者の思案ではじめられたか、あきらかでない。

富くじとして、はっきり行われはじめたのは、元禄頃からであった。

火事や暴風雨などによって、度重なる被害を蒙った江戸の神社寺院が、修復資金をつくるための一手段として、富くじを売り出すようになったのである。

江戸の地図を一覧すれば、判る通り、神社と寺院は、まことにおびただしい数であった。

上野寛永寺、芝増上寺、小石川伝通院などのような将軍家と特別の関係のある名刹をはじめ、庶民にしたしまれている浅草寺など、有名な寺院だけでも、一千以上あった。それらの名刹の末寺を合せれば、三千近い数であった。

神社もまた、一千以上であった。

いかに信仰深い時代とはいえ、これらのおびただしい寺社が、百二、三十万の人口によって、ささえられるのは、むつかしい話であった。江戸には、僧侶だけでも、四万人がくらしていたのである。

江戸の花である火事で焼失した場合、その再建費用は莫大なものとなり、幕府や大名、旗本、大町人らの寄進だけでは、どうにもならなかった。

大変な借金を背負うことになり、そのあとの維持費、生活費の捻出は、ひとかたならぬ苦労であった。

その挙句、考え出されたのが、富くじであった。

ごく安い値段の富札を、一般庶民に売って、その札の中から、当り籤を出して、賞金としたのである。

一等は百両ときめて、庶民の夢をあふった。

盗賊にでもならぬ限り、裏店住いの職人や人足が、一生かかっても、百両の金が蓄えられる可能性のない時代であった。

文字通り一攫千金の夢が叶う唯一の賭であった。

富くじは、たちまち、もの凄い勢いで、流行した。寺社という寺社が、この興行をやった。富くじに熱中したあまり、財産を減らしたり、女房を離縁するなどの家庭騒動を起す弊害もあったので、幕府では、禁止したり、取締ったりしたが、いつの間にか、もと通りにさかんになって、この時代になっていた。

文化文政期に入ると、富くじ興行は、寺社としては、中止できぬ最大の収入源になっていた。

文政の末頃出版された「江戸大富集」によれば、年に百二十回の富くじ興行が、行われている。

すなわち、三日に一度、どこかの寺院、神社で、富突きが行われ、大金をつかんだ庶民が出現した勘定であった。

寺社が一興行に売り出す富札は、一万枚までであった。どういうわけか、九千枚という数が多かった。

富札の値段は、だいたい一枚一朱（一分の四分の一）で、裏店の庶民でも、容易に買えた。大流行して、年中行事ともなると、寺社それぞれが、独特の興行をするようになった。

江戸の三富、と称ばれているのは、谷中の感応寺、目黒の泰叡山、湯島天神の三箇所であった。

一等は百両であった。ほかに、十両、五両、一両と、小さな当りくじがあった。

雄之助が、持っている富札は、谷中の感応寺の売り出したものであった。

そして、その富突きの日が、今日であった。

この正月十六日の感応寺興行が、最も人気があったのは、一等が千両という巨額だったためである。泰叡山と湯島天神は、年初の興行の一等を五百両にしていた。

四

「そうか。お主の夢は、御番入りに代って、富くじになったか」

弥太郎は、そう云って、ふかくうなずいた。

富くじなどというものを、最も軽蔑しそうな島中雄之助が、内職で得た金を、ことごとく富札に、つぎ込んでいる、という。

「それで、お主、一度、大当りしたことがあるのか？」

弥太郎は、訊ねた。

「それが、まだ一度もないのだ」

「一度も――！」

「ははは……、わしという男は、よほど、賭というものに見はなされて居るらしい。この二年の間、わしは、たった一両の当りくじさえも手にしたことがない。もう三十両以上も、買いあさっているにもかかわらず――」

「ひょっとすると、今日、大当りするかも知れぬぞ。わたしには、そんな予感がする」
弥太郎は、云った。
「いや、今日も、はずれるに相違ない。わしの夢は、ついに、夢でおわるはずだ」
「せめて、富くじくらい、大当りをしてもよかろう」
「狩野――、わしは、夢から見はなされた宿運を背負うて居る男だ。だから、わざと、富札を買いつづけて居るのだ」
「わかるような気もするが……、同じみるなら、古城進八郎の抱いているような夢であった方がいい」
弥太郎は、天保倭寇党の話を、雄之助にきかせた。
雄之助は、しかし、すこしも興味をそそられた気色を示さなかった。
「どうだ、お主なら、進八郎の参謀として、腕がふるえるのではあるまいか」
弥太郎は、さそってみた。
「企図したところまでは、あっぱれだが、古城の夢も、わしの夢と同様、実現はすまい」
雄之助は、冷然として、こたえた。
「やってみなければ、わかるまい」
「そうだ、やってみることだ。しかし、やってみても、実現することと、せぬことがある。わしには、わかる」
「断言する理由は――？」
「古城進八郎という男が、問題なのだ」

「……」
「古城には、軍船一隻を動かす力はない」
雄之助は、きっぱりと否定した。
弥太郎は、進八郎を批判した篠田主水之介の言葉を、思い出した。
「海賊となって、異邦へ攻め入るには、奇略縦横の大将の指揮を必要とする。古城進八郎は、大将の器ではない」
主水之介は、そう断定したものであった。
「進八郎に、大将の器量がなくても、われわれ小普請の面々が、団結すれば、可能ではあるまいか」
弥太郎は、云った。
「それは、ちがう。……軍を動かすのは、大将の智略と決断力を必要とする。団結や協議で、異邦の土地に攻め入って、勝てるものではない」
「……」
「狩野、お主自身も、肚のうちでは、そう思っているのではないか？」
「いや、べつに……」
「江戸で生れて、育った者は、やはり、江戸の地面にしがみついて、生きるしかすべはないようだ」
雄之助は、立ち上った。
「これで、失礼する」

「待て――。お主は、これから、感応寺へ行くのだろう？」
「うむ」
「では、わたしも、一緒に行ってみよう」
「……」
「お主が、千両の金持になるかならぬか、見とどけよう」
「決して、当ることはない。たった五両さえも、当るまい」
「誰かが、千両当るのだ。それが、お主でないと、きまっては居らぬ」
弥太郎は、雄之助と、肩をならべて、歩き出した。
黒門町を過ぎようとした時、一人の男が、なにげない様子で、そばへ寄って来た。
町人ていになっていたが、伊賀の刃心であった。
「おつたえいたします」
「なんだ？」
「若年寄遠藤但馬守様のおとりはからいで、古城進八郎殿の吟味無用、と相成りました」
「そうか。それは、よかった。……しかし、どうして、遠藤但馬守が、とりはからってくれたか？」
「桜田優之助殿のおはたらきでありました」
「あの優之助が――?!」
弥太郎は、なかばあきれ、なかばおどろいた。
「……それで、進八郎は、どこへ、身をかくしたか、お主は、知って居るのか？」

「中仙道を、京へむかって、道中されて居るはずです」
――弓香殿を連れてだな。
弥太郎は、微笑した。
――やはり、進八郎は、大将になる男ではなく、弓香殿を女房にして、上方のどこかで、くらすように生れついているのかも知れぬ。
そして、その方がいいように、弥太郎には、思われた。

第二十四話　千両遺言

一

「おい、どこへ行くのだ？」

弥太郎は、島中雄之助が、松平伊豆守の宏壮な下屋敷の長塀に沿うて、善光寺前町の方へ、左折するのに、眉宇をひそめた。

富くじ興行を催す感応寺へ行くには、谷中八軒町を、まっすぐに、通って行けばいいのであった。

善光寺前町へ入ると、根津の方へ出てしまう。

げんに、八軒町の方へは、人の波が流れている。感応寺へ行く群衆なのである。

雄之助は、しかし、弥太郎の不審に、返辞もせずに、善光寺前町へ、大股で歩み入った。

往還の片側へならぶ店は、すべて仏具屋であった。

むかい側は、寺院の塀がつらなっている。本覚寺、上聖寺、妙清寺、信行寺、金林寺、妙伝寺……。

ひっそりとして、ほとんど路上に人影もない。

——どういうのだ？

弥太郎は、やむなく、雄之助の歩くままに、従いて行き乍ら、いぶかっていたが、ふっと、背後に、鋭い視線を感じた。

ふりかえると——。

五人ばかり、地まわりていの男が、横列にならんで、進んで来ていた。いずれも、長脇差をおびている。

隠密らしい男なら、こちらが尾けられている、と受けとるが、やくざに追われるおぼえはないので、弥太郎は、

「おい、うしろの奴ら、お主に用があるのか？」

と、訊ねてみた。

「うむ」

雄之助は、うなずいた。

「どうするのだ？」

弥太郎は、雄之助が、少年の頃から、武芸を蔑視していたのを、知っていた。雄之助は、兵法道場へかよって、竹刀をふりまわす時間を惜しんで、読書していた男なのである。

「……」

雄之助は、黙って、前方へ視線を据えて、歩いている。

——おれに追いはらわせるつもりか？

弥太郎は、考えた。

雄之助に、恩をきせておくのも、わるくない、と思った。

雄之助は、妙伝寺の角を、右へ折れた。つきあたりは、谷中随一の巨刹玉林寺である。

雄之助は、まっすぐに、玉林寺の山門をくぐった。

白砂の境内は、老松を配して、広い。

やくざどもも、踏み込んで来た。

「狩野――」

雄之助は、近づいて来るやくざどもへ、冷たい眼眸を当て乍ら、云った。

「助太刀、無用だ。ただ、わしの差料は、はずかしいが、竹光だ。お主の差料を借用したい」

「お主は、道場稽古をしては居らんはずだが……」

「やむを得ぬ仕儀なのだ」

やくざどもは、二間をへだてて立ちどまると、一人が、口をひらいた。

「島中さん、金を返せねえので、助太刀をたのみなすったか」

「いや、わしは、一人で、たたかう。この友人には、見分役として、立ち合ってもらう」

「いい覚悟だぜ」

やくざどもは、一斉に、長脇差を抜いた。

「待て！」

弥太郎が、一歩出て、

「島中は、借金が返済できぬために、果し合うのか？」

と、問うた。

「そうでさ。……三百七十両、その風体じゃ、逆立ちしたって、返せやしめえ」

「博奕の借か？」

「それなら、すまきにして、大川へたたき込むだけで、かんべんしてくれるんだが……、だましたんでさ、日本橋の長崎屋を――」

長崎屋は、唐物屋として、誰知らぬ者のない有名店であった。長崎に本店を構え、江戸は支店であったが、長崎出島のオランダ商館との取引を一手にひき受けていて、その三棟の倉には、好事家たちがよだれをたらすような珍奇な舶来品が、山とならべてあった。

「長崎屋をだました？」

弥太郎は、雄之助を視た。

「そうでさ、公方様に挨拶に来たオランダ商館の使いの、通辞にやとったら、でたらめな通辞をしやがって、置時計を三箇も、猫ばばして、どこかの大名へ売っぱらってしまいやがったんだ」

「まことか？」

弥太郎は、雄之助に、訊ねた。

「まことだ。その金も、富くじにつぎ込んで、一文のこらず、使いはたした」

雄之助は、こたえた。

二

——島中雄之助ともあろう俊髦が、詐欺漢にまで堕ちたか。

弥太郎は、暗然となった。

「おいっ！　はよう、抜きやがれ！」

やくざどもは、気負い立っていた。

「狩野、差料をかせ」

「みすみす斬られる、と判っているものを……」

「非は、わしにある。やむを得ぬのだ。こういう犬死が、わしには、ふさわしいのだ」

不意に、雄之助は、弥太郎の腰から、その差料を、鞘ごと抜きとるや、自分の方から、やくざどもに向って、だだと奔った。

「野郎っ！」

「来やがれっ！」

「くそっ！」

喧嘩馴れしている五人のやくざは、ぱっと、散るや、たちまち雄之助を包囲した。

抜刀して、鞘をすてた雄之助は、めちゃめちゃに、振りまわしはじめた。

弥太郎の目には、それは、死にいそぎしているものとしか、映らなかった。

とうてい、拱手傍観しているに堪えられなかった。しかし、差料を貸してしまっている。

雄之助は、顔や肩や腕を、すこしずつ、斬られはじめた。

斬られるたびに、その動作は、にぶくなった。

やがて、腰を斬られて、よろめき、片膝を折った。

——なぶり殺しだ！

弥太郎は、もう我慢できなくなって、

「それまでっ！」

と、叫ぶや、とび込んで行き、やくざの一人を、突きとばして、雄之助をかばった。

「邪魔さらすなっ！」

「退きやがれっ！」

血汐をみてたけり狂った野獣のように、やくざどもは、凄い形相になって、ほえた。

「島中は、兵法の稽古をして居らぬ。これだけ、手負わせれば、充分だろう」

「息の根を止めるまでは、引かねえぞ！」

「五人がかりで、なぶり殺して、自慢になるか！」

「うるせえっ！　退けっ！　退かねえとお前さんも、あの世行きになるぜ！」

「やむを得ぬ！」

弥太郎は、雄之助の手から、自分の差料を取ろうとした。しかし、雄之助の十指は、柄に食い入ったまま、関節が石になってしまっていた。

弥太郎は、しかたなく、脇差を抜いた。

「対手になるぞ！」

片手青眼につけて、鋭く視線を配った。
やくざどもは、弥太郎が使い手と看てとって、包囲の輪をひろげた。
いくばくかの時間を置いて、横あいから、一人が、斬りつけて来たが、弥太郎は、払いあげざま、その顔面を一直線に割った。
その迅業で、ひるませておいて、こちらが一気に攻勢の威嚇を示せば、遁走するもの、と弥太郎は、考えた。
脇差なので、こちらの突進を、素早いものにしなければならなかった。
「行くぞ！」
叫びざま、ツツ……と突進した。
はたして、やくざどもは、逃げ腰になった。
と——その時。
一人が、まっしぐらに、雄之助へ向って、突撃した。
「ああっ！」
雄之助の悲鳴で、弥太郎は、——しまった！　と、身をひるがえして、そこへ奔った。
やくざは、雄之助の胸へ、深く突き刺した長脇差を、すてておいて、遁げ出した。
「おのれら！」
弥太郎は、はじめて、激怒した。
やくざどもは、その殺気をあびると、一斉に、踵をまわして、奔り出した。
弥太郎は、雄之助の胸から長脇差を引き抜き、その片袖をちぎって、傷口に当ててやると、

「死ぬな、島中！」
と、はげました。
「……も、もう、いいのだ。……これで、もう、いいのだ」
「よくはない！　犬死は、つまらん！　死ぬな！」
「狩野——」
雄之助は、なぜか、微笑をうかべた。
「もしかすると、わしの富札は、あたるかも、知れぬ」
「……」
「感応寺へ、行って、みて、くれ」
「……」
方丈の前で、この果し合いを目撃していた納所が、三人、いそいで、近づいて来た。
弥太郎は、境内をけがしたことを詫びて、
「ご迷惑ついでに、この怪我人を、手当して、やすませてやって、下さるまいか」
と、たのんだ。
納所たちは、ひき受けた。
「島中、感応寺へ、行って来よう」
「……うむ。た、たのむ」

三

谷中感応寺境内には、数千の群衆が、つめかけていた。

その視線は、殿上の両柱のあいだに据えられた大匣へ、集中されていた。

その匣の中に、九千の原札が、入れてあった。

群衆の懐中に、手にある富札と同じ番号の原札が、やがて、僧侶の一人に、錐で突かれるのであった。

一瞬の後には、自分は、千両の金持になるかも知れぬのだ。九千分の一の可能性のために、群衆は、目を血走らせ、胸をおどらせている。

階下にひきまわした欄が、群衆の波で、めりめりと音たてて、いまにも倒れんばかりであった。

「おうおうっ！　押すな、この野郎っ！」

「なにをっ！　おれァ押しの一手だぞ。おかげで、両国、浅草、上野の水茶屋の女は、なでぎりだあ！」

「嘘をこきやがれ。てめえのおしは、唖のほうだろう。大根河岸で、ござをかかえて、待ってらあ」

「うるせえ。それより、千両当ってたら、てめえ、どうする？」

「どうするって、おめえ、江戸っ子だあ、吉原の散茶を身うけして……、へへ、あたい千金身うけをされて、春の宵寝の新世帯、とくらあ」

弥太郎は、境内の端に佇んで、蜂の巣をつついたような喧騒の光景を、眺めていた。

刻限が来た。

幹事の僧侶が、大匣をさかさまにして、全部の原札を、ぶちまけてみせた。そうしておいて、また、ひろい集めて、もと通り、匣の中へ入れた。

太鼓が、間遠に打ち鳴らされた。

と同時に、七人あまり整列した僧侶たちが、おごそかに、般若経を読みあげはじめた。

襷がけの僧侶が、長い錐を手にして、しずしずと、大匣へ近づくと、喧騒は、頂点に達した。

錐が、たかだかと、挙げられた。

その瞬間——。

喧騒は、ぴたりとおさまって、しわぶきひとつたてられぬ静寂が、感応寺境内を、占めた。

錐は、まっすぐに、大匣の孔の中へ、刺し込まれた。

錐の突端は、一枚の原札を貫いたのである。

——自分の札であってくれ！

群衆全員が、それを、必死に祈った。

錐が、貫いたその原札を、孔から、あげて、勘定奉行所から出張の与力の手に、渡した。

「おお！　神様！　仏様！」

群衆の中から、大声が発しられた。
「南無や八幡！」
「しっ！　しっ！」
固唾をのんだ異様な緊迫した静寂の中で、与力は、声をはりあげた。
「本日の大当り――千両富！　鶴の二百五十七番！」
瞬間――。
地震のようなどよめきが、境内をゆりうごかした。
弥太郎は、懐中から、富札をとり出してみた。
鶴二百五十七番。
当っていた。

四

弥太郎は、急ぎ足に、玉林寺の山門をくぐった時、不吉な予感におそわれた。
――島中は、もう息をひき取っているのではあるまいか？
予感は、あたっていた。
方丈の一室に案内されてみると、島中雄之助の顔には、白布が、かけてあった。
「おそかったか！」
弥太郎の胸は、微かに疼いた。

白布をとりはらってみると、意外に、雄之助の死顔は、安らかであった。
納所の一人が、入って来て、
「手当がゆきとどきませず、申しわけないことをいたしました」
と、詫びた。
「いや、これも、この男の宿運でござろう」
弥太郎は、死顔を瞶め乍ら、
――お主が、予感した通り、千両富が、当ったぞ。……皮肉なことだ。一刻ちがって居れば、お主は、長崎屋へ返済できて、死なずに済んだのだ。
と、話しかけた。
「あの……」
納所が、云った。
「いまわのきわに、ご遺言がございました」
「遺言？」
「はい。……もし、千両が当ったら、駒込片町の権兵衛長屋に行き、小笠原又左衛門という備前浪人の娘千雪という娘に、その半分を渡してやって欲しい。そういうご遺言でございました」
「そうでしたか」
弥太郎は、この玉林寺が、雄之助と同じ宗旨なので、墓地に埋葬をたのみ、永代供養料として、百両をさし出した。

玉林寺は、こころよく、ひき受けてくれた。
弥太郎は、まっすぐに、駒込片町へ、足をはこんだ。
団子坂を越えた時、背後から声をかけた者があった。
駕籠からのぞいた顔は、桜田優之助のものであった。
「弥太郎ぬし、おひさしぶりじゃ。どちらへ行かれる？」
弥太郎は、以前は、優之助の化粧顔を見ただけで、微かな嫌悪感をおぼえたものであったが、いまは、たのもしい味方として、視るようになっていた。
「お主のおかげで、古城が吟味無用となった。忝じけない」
「べつに、お手前に、それを報せたわけでもないのに、どうしてご存じかえ？」
「篠田主水之介殿の手飼いの忍びが、われわれの行状を、つぶさに、見とどけている」
「おお、はずかしや。……油断がなりませぬの」
「お主は、島中雄之助とは、懇意であったろう？」
「懇意ではなかったけど、顔は見知って居りましたぞえ。あのような頭抜けた秀才は、苦手であった。……その島中雄之助が、どうかしましたかえ？」
「やくざに襲われて、一命を落した」
「ほう！」
弥太郎は、仔細を語った。
優之助は、千両が当った、ときくと、目をみはって、首を振った。
「人間というやつは、死に際になると、カンが働くものらしい。雄之助は、千両あたると予言して、亡くなった」
「南無！」
優之助は、合掌してから、
「して、千両をゆずられて、お手前は、どう使いなさる？」
「それを、遺言にしたがって、とどけに行くのだ」
弥太郎は、片手に携げた重い包みを示した。
「やれ、もったいない。いくら、遺言だからといって、右から左へ渡すことはあるまいに――」
「百両も、ふところにするか」
弥太郎は、笑った。
「なんの二百両も渡して、あとは、そっくり――」
優之助は、わがものにするしぐさを示した。
「そうもなるまい」
弥太郎は、歩き出した。
優之助は、柳橋の料亭の名を告げて、祝いの座をもうけておく、と云った。
――島中は、生きていたならば、千両を、どんな使いかたをしたであろうか？
弥太郎は、想像してみた。
――千両を手に入れたのを転機にして、あるいは、学者として生きることにしたかも知れぬ。

いったんは、そう想像してみたが、

——いや、いちど、堕落した者は、もう、泥沼から、匍いあがれはすまい。……やはり、島中は、今日が命日になる宿命を背負うて居ったのだ。

第二十五話　招潮硯

一

江戸八百八町は、どの町にも、裏町新道が、折れ曲って、つらなっていた。いわゆる裏店が、ひしめきあっていたのである。

五軒一長屋、十軒一長屋は、まだいい方で、五十軒一長屋というのがあった。長屋が向いあった路地は狭く、両手をのばせば、とどきそうであった。ひとつの井戸を汲みあい、三つばかりの厠を、共同で用い、ひとすじの溝で、汚水を流していた。

当然、慶事も弔事も、長屋が総出で、やってのけるのであった。しぜん、人情も厚くなるが、個人の自由な孤独のくらしは許されなくなり、行動は、窮屈になった。

どの長屋にも、木戸が設けられ、暮六つには、閉められた。貧乏人のくらしは、朝は早く、夜も早いのであった。

大名旗本屋敷と対蹠的な裏店のくらしが、実は、当時のまことの生態かも知れなかった。裏店の住民は、職人が多かった。鍛冶、大工、左官、鋳物師、桶屋、屋根屋、紺屋など

——。

そのほか、浪人者、托鉢僧、按摩、手相見、野師、露店商人、博奕打ち、渡り奉公の中間、駕籠舁き、そして掏摸……。

狩野弥太郎が、たずねて行った駒込片町の権兵衛長屋は、裏店としては、まず上等な部類に属していたが、それでも、木戸をくぐると、ごったまぜの臭気が、ぷうんと、鼻孔を衝いた。

いたるところに、麦藁でつくった蛇が、ぶらさげてあるのも、うすぎたなく、気味がわるかった。

近くの富士神社が、厄病よけに売り出したしろものであった。おそらく、今年の夏にはやった疫病で、この裏店では、バタバタと死人が出たに相違ない。

弥太郎は、井戸端へ近づいて、赤児を背負うた嬶の一人に、

「小笠原又左衛門という浪人の家は、どこだ？」

と、訊ねた。

「つきあたりの、右の家でございます」

うなずいて、そこへ歩いて行く弥太郎を、嬶たちは、見送って、

「佳い男だよ。あれ、旗本衆だろう」

「おまいさん、目の色が変ったよ。岡場所に出ていた頃、あんな旗本衆に、抱かれたことがあるんだろ？」

「ふふふ……、二十年も、むかしのことさ」

「それだってさ、いいじゃないか。ちゃんと、思い出があるんだからさ。こちとら、十六の時に、亭主に手ごめにされて、駕籠舁きの女房で三十年も、すごしちまってさ、なにひとつ、いい思い出なんざ、ありゃしないやね。……たったいっぺん、中村座で忠臣蔵を観ただけなんだから、なんのために、生きて来たんだか——」

「あたしは、岡場所にいた頃は、たしかに、面白おかしく、その日をすごしたさ。でも、ごらんよ、この裏店に越して来てから、六年のあいだに、三人の亭主に逃げられているじゃないか。どいつもこいつも、ひどい野郎ばかりで、二番目なんざ、一年たまった家賃のかたに、あたしを差配に抱かせようとしやがった。三番目が博奕打ちで、とうとう、あたしまで賭けて、吉原の地まわりに二回も売っちまやがったんだよ。……いまの亭主と来たら、脳味噌は八分で、愚図で、酒をくらうことしか知らないんだからねえ」

弥太郎は、その家の格子戸を、開けた。

かすかに、香のにおいがした。

案内を乞うと、しばらくして、障子がひらかれた。

「そなた、千雪といわれるか？」

「はい」

弥太郎は、両手をつかえた娘の、面高な容貌を眺めて、

——はき溜に鶴だな。

と、思った。

鼻梁と唇のかたちのよさは、無類といえた。肌も白く、項から肩にかけての線に、優しい

気品があった。
ただ、その双眸が、閉じられているのが、気になった。
「わたしは、島中雄之助の朋輩だが、島中にたのまれて、訪ねて参った」
「どうぞ、お上りあそばして――」
招じる動作が、ぎこちなかった。
弥太郎は、対座してから、
「そなた、失礼だが、目が不自由のようだが……」
と、訊ねた。
「はい。五年ばかり前から、わずらいまして、視界がふさがれてしまいました。昨年あたりから、物の輪郭が、おぼろに見わけられる程度にはなりましたが――」
弥太郎は、床の間へ視線を移した。
真新しい位牌が、まつられてあった。香が、その前で、焚かれていたのである。
「その位牌は？」
「父でございます」
「すると、そなた、一人ずまいをされて居る？」
「はい。……長屋のかたがたのおなさけにすがって、すごして居ります」
――鴉やむく鳥が、鶴をまもってくれている、というわけか。

二

弥太郎は、携げて来た包みを、千雪の膝の前へ、押しやった。
「ここに、金子がある。本日の谷中感応寺の富くじで、島中雄之助が買った札が、当った。千両のうち、感応寺へ一割奉納し、また、島中雄之助の埋葬がたを引き受けてくれた玉林寺へ、永代供養料として百両をさし出したので、八百両ある」
「あ、あの……、島中様の埋葬、と申されましたが……？」
「うむ。島中は、不幸なことに、本日、千両当るのを知らずに、一命を落した。その遺言によって、この金子を、そなたに渡しに参った」
「……」
千雪は、俯向いた。膝で重ねた両手に、ぽとりと、泪が一滴落ちるのを、弥太郎は、見た。
「不自由な身の一人ぐらしには、八百両あれば、たすかろう。受け取られるがよい」
弥太郎は、そう云いおいて、腰を上げかけた。
「お願いがございます！」
千雪が、不意に、声を高いものにして、弥太郎を、呼びとめた。
「なにか？」
「貴方様が、島中雄之助様のご朋輩であることだけで、このようなお願いをいたしますのは、まことにあつかましい仕儀でございますが……、他におたのみする御仁も居りませぬゆえ、

何卒おききとどけ下さいませ」

「きこう」

「わたくしの父小笠原又左衛門は、備前池田家におつかえして居りました、江戸定府の御留守居下役でございました」

千雪は、語りはじめた。

池田家当主斉政は、名君とうたわれた始祖光政以来の奨学の気風を、遵奉している人物であったが、自身が学者になることよりも、学問に附随したものを、好む傾向が強かった。殊に、斉政は、古玩の文房具を集めることに、異常なまでの情熱をわかせたのである。

古玩の文房具というのは、支那の古い時代につくられた硯とか墨とか筆とか紙、そして印譜印章のたぐいのことである。

古い支那の硯といえば、端渓、歙州であり、その形も、八卦硯、琴硯、残月硯、風字硯、雲鶴硯、蘇氏硯、乾坤硯、滄海硯、寿山硯、天漢硯など、無数にある。

墨もまた、最良の種類は多い。墨は、唐代に至って大成した。松烟で製する法ができ、南唐に入って、李廷圭という者が麝香を和すことを創意した。これを歙墨と称した。宋代になると、徽宗皇帝などは、最も翰墨のことに長じて、蘇合油烟を墨に和すことを、発明させた。そのあたいは、黄金と同じであった、という。

こうした古硯、古墨は、ほんのわずか日本にもたらされていたので、その値段は、あってなきがごとき高価であった。

千雪の父小笠原又左衛門は、この古玩の文房具を、買い集めるのが、任務であった。

又左衛門自身、いつの間にか、その貴重な骨董に、目ができていた。

二年前のことであった。

又左衛門は、かねて懇意にしていた島中雄之助から、

「端渓水巌の石でつくった招潮硯が、某所にあるが、如何か？」

と、もちかけられて、とびついた。

端渓というのは、広東肇州府の東方にある霊羊峡の内の地名であり、右は江水をのぞみ、左は諸巌を抱き、両岸一帯に硯坑があった。その硯坑の中でも、水巌――すなわち、清泉の底にかくれたところから採った硯石が、最上とされている。

まっ暗闇の洞窟を降りて行き、深淵に至って、一昼夜、水を汲みあげてから、ようやく、石壁の中に、光沢、眼、斑紋の素晴しい部分を見つけて、これを採るわけである。一個の硯石を採るために、八十人の石工が、二月以上もかかった、という例もあった。

日本にも、端渓水巌の硯が、数箇かもたらされていたが、まことの佳硯は、尠かった。

まことの佳硯というのは、眼と斑紋がなければならなかった。眼とは、目のごとき斑点が散った石で、水巌から採ったものの中には、あざやかな輪郭をもった、翠緑の眼が八重にも九重にも層になって、散らばっていた。

島中雄之助は、最良の層暈明媚の活眼をもった水巌石の硯を、見て、思わず、息をのんだ、と又左衛門に、語ったのであった。

「価額が問題じゃが――」

五千両などという高値をふっかけられては、いかに池田家といえども、手が出ぬ、と又左

衛門は、思った。

すると、雄之助は、笑い乍ら、

「持主は、盲で、これが、どれほどの価値ある硯か、知り申さぬ。五百両も出せば、大よろこびいたそう」

と、云ったものである。

又左衛門は、雄之助と同道して、房総の郷士の家へおもむいた。

一瞥したが、成程、見事な佳硯であった。

招潮硯とは、その名称のごとく、潮をまねく意匠を、硯面に、彫ったもので、その硯には、打ち寄せる波に、蟹があそびたわむれている図が、描かれてあった。

背面には、

「質而玄、静而堅、惟其然、竟永年」

と、銘文が刻されてあった。

——これは、数千両のねうちものだ。

又左衛門は、主君の狂喜する顔を、思いうかべて、胸をおどらせたことだった。

五百両では、タダ同然であった。

又左衛門は、招潮硯を持って、江戸へ帰って来た。

ところが——。

その招潮硯は、まっ赤な贋物だったのである。

三

小笠原又左衛門は、かろうじて、切腹をまぬかれて、池田藩から追われた。

又左衛門は、浪人したあと、血眼になって、島中雄之助の行方を、さがしもとめ、ようやく、かくれ家を突きとめて、激しくなじった。

しかし、雄之助は、冷然として、

「それがしも、貴殿同様、目がなかったことで、自らを責めるよりほかはない」

と、突っぱねた。

贋物と承知で、又左衛門をだましたわけではなかった、と弁解されると、又左衛門も、それ以上、罪を追求することができなかった。

心身ともに衰えはてて、又左衛門は、今春逝ったのである。

「お願いと申すのは、この金子を持って、池田藩の上屋敷へ参り、その贋の招潮硯を、お下げ渡し頂きたく存じますゆえ、貴方様にご同道ねがわしゅう存じます」

千雪は、云った。

「いまさら、贋物を、買いもどしたところで、いたしかたがあるまい、と思うが……」

弥太郎は、ばかげた行為だ、と思った。

これだけの金があれば、盲目の娘でも、他人の情にすがって生きないで、すむではないか。

「わたくしは、父の生命までも奪った贋の招潮硯を、手に入れて、位牌の前に、そなえたく

存じます」
「むざむざ、五百両、すてるようなものだと思うが……」
「いえ、わたくしには、無意味なこととは思われませぬ」
千雪の意志は、かたいようであった。
「この金は、島中雄之助が、遺言によって、そなたに返したものゆえ、どう使おうと、そなたの勝手だが……、そなた自身のくらしのために、役立てた方が、雄之助の霊魂もやすまるような気もするが――」
「どうぞ、お願いでございます」
千雪は、両手をつかえて、頭を下げた。
「是非に、というのであれば、やむを得ぬ」
弥太郎は、同道を承知した。

一刻あまりのち――。
弥太郎と千雪は、池田家上屋敷内の、側用人の家の書院に、坐っていた。
側用人は、小笠原又左衛門が、責任を負って切腹しようとした時、言葉をつくして、止めた人物であった。
又左衛門が逝った時も、わざわざ、弔問に来てくれたのであった。
弥太郎から、用向きを述べられ、五百両さし出されると、側用人は、かぶりを振って、
「千雪殿、止めるがよい。贋物を、下げ渡してもらったところで、父上の無念は、はれはせぬ。この五百両は、おのがくらしの費用にあててはどうじゃな？」
と、すすめた。
千雪は、肯かなかった。
「そうか、どうしても、そなたが、贋物を欲しい、というのなら、お留守居に、話してみよう」
側用人は、腰を上げた。
かなりの時間、待たせてから、側用人は、桐の函をかかえて、もどって来た。
「お留守居は、そなたが盲目となっていることをきかれて、三百両でよい、と申された」
桐函に、二百両をそえて、千雪の前に置いた。
千雪は、かすかにわななく手で、桐函の蓋をひらいた。
紫ちりめんに包まれた硯をとり出して、それを披いた。
もとより、千雪には、見えぬ。
千雪は、硯を弥太郎に渡した。
弥太郎も、骨董のたぐいには、目が利かなかった。
波にたわむれる蟹の図は、いかにも、巧妙に思われたし、石面に浮いた眼も美しい、と見受けた。
これが、まことの端渓水巌の、宋代の招潮硯だ、と云われると、
――成程、そうか！
と、うなずくに相違なかった。

弥太郎は、黙って、千雪に、硯をもどした。
千雪を駕籠へのせて、池田家上屋敷を出て、しばらく、往還をひろってから、弥太郎は、ふと、思いついた。
「千雪殿、ちょっと、寄り道をしてもらおう」
「はい。……どちらへ、お行きになります？」
「わたしが、尊敬している旗本布衣の大身をたずねて行く。そなたと同じ盲目だが、その頭脳の鋭く切れることは、旗本八万騎中、比肩する者がない。その御仁に贋物の招潮硯に就いて、相談してみようと思う」
「どんなに立派なお方でも、盲目では……」
「念のためだ」
麹町二番町にある篠田主水之介邸は、再び、静寂にかえっていた。
七十過ぎた用人にみちびかれて、弥太郎と千雪が、かび臭い書院に入ると、いつの間にか、主水之介が廊下に立っていて、
「三人目の女人を、どうせよ、というのかな？」
と、訊ねた。
「あずかって頂きたい、とは申しませぬ」
「どうせよ、というのかな？」
「この女人が持参した品を、お調べ頂きたいのです」
「どんな品だな？」

「端溪水巌の招潮硯――と申しても、贋物であります」
「そうであろうな。本物であれば、五千両以上もする。どうして、そのような贋物を持って居るのだな？」
弥太郎は、事情を説明した。
主水之介は、話をききおわると、微笑して、
「弥太郎、お主は、もしかすれば、本物かも知れぬ、と考えたか？」
「は――。それがしには、硯などを見る目はありませんが、手に把って、はじめて眺めた時、なんとなく、贋物ではないような気がいたしたものですから……、念のため、お調べ頂こうと存じました」
主水之介は、手をたたいた。
伊賀の刃心が、庭さきに、うずくまった。
主水之介は、弥太郎に、桐函を、刃心に渡させた。
「刃心、それを、東満斎に、鑑定してもらって参れ」
「かしこまりました」
刃心は、すぐに、姿を消した。
主水之介は、東満斎が何者か、別に説明しようとはしなかった。
主水之介は、千雪に、名のある医師に、目を診せたか、と訊ね、まだ診せていない、という返辞に、
「良医に、一度、診せるとよい」

と、弥太郎に、云った。
「かしこまりました。千雪殿、希望を持つとよい」
「忝じけのう存じます」
弥太郎は、古城進八郎と弓香が、中仙道を、京へ向って進んでいることを、話題にした。
「また、江戸へ舞いもどらねばよいがな」
主水之介は、笑い乍ら、云った。
「それがしも、舞いもどらぬことを祈って居ります」
刃心が、戻って来たのは、半刻もかからなかった。
桐函を、縁側へ置いて、
「この招潮硯は、ほんものの由にございます」
と、報告した。

第二十六話　化の皮

一

「弥太郎、面白いことになったな」
篠田主水之介は、笑った。
贋物と思われていた招潮硯が、東満斎という人物の鑑定によって、真物であることが、明らかにされたのであった。
島中雄之助は、もとより、この端渓水巌の硯が、真物であるとは、夢にも思わず、池田家御留守居下役の小笠原又左衛門に、世話したに相違ない。つまり、はじめから、一杯食わせる料簡で、売りつけたのである。
そして、その詐欺行為について、つねづね、良心のとがめがあったからこそ、もし千両富が当ったならば、小笠原又左衛門の娘に、五百両を弁償して、せめてもの罪のつぐないにしたいという気持があったのである。
島中雄之助は、又左衛門が自分を恨みつつ逝き、その娘千雪が、不自由な盲目の身ひとつ

を、裏店ですごしているあわれさを、知っていたのである。

皮肉にも――。

又左衛門も雄之助も、他界してしまったあとで、招潮硯は、真物と鑑定されたのである。

狩野弥太郎が、主水之介を訪れたのは、いわば、一種の霊感が働いた、というべきであった。

それにしても、弥太郎も、こうもあっさり、真贋がひっくりかえってしまうと、とまどわざるを得なかった。

主水之介は、千雪に、訊ねた。

「この硯を、贋と断定したのは、池田家の家中の誰か、そなた、存じて居るのか？」

「いえ、その儀については、父から、何もきかされて居りませぬ」

千雪は、二年前、勤めを終えて家へ戻って来た父が、顔面蒼白になっているのを知り、どこか加減がわるいのではあるまいか、と心配した日のことを、思い浮べた。

その宵――。

父は、居間にとじこもってしまい、夕餉の膳部も、しりぞけた。

池田家の側用人が、あわただしく訪れて、千雪から、又左衛門が居間にとじこもったきりだ、ときくと、急いで、入って行った。

その時、父は、切腹の用意をととのえていた。

側用人の言葉をつくした阻止によって、又左衛門は、ようやく、切腹を思いとどまった。

千雪は、池田家から追われて、上屋敷を出て行くまで、父から、事情を一切、きかされなかった。

駒込片町の権兵衛長屋に移ってから、はじめて、

「招潮硯が、贋物であったのだ」

と、きかされたのであった。

父は、しかし、それ以上、くわしいいきさつを、語ろうとはしなかったのである。

ただ、父が懇意にしていた島中雄之助から、誑かされた、ということだけ知らされた。

「何者が、贋物だ、と断定したか、それが問題となります」

弥太郎は、云った。

「ひとつ、お主が、調査してみるか」

「やります」

弥太郎は、うなずいた。

主水之介は、千雪に向って、

「いずれにしても、この招潮硯が、真物となると、五千両以上のねうちがある。蔵前の札差とか、大坂の大商人あたりで、こうした古玩の文房具を集めている好事家になると、一万両でも、即座に出すであろう。……どうするかな、そなたは？」

「……はい」

千雪は、俯向いて、ちょっと考えていたが、

「とりあえず、父の霊前に、お供えしてから、思案することにいたしたく存じます」

「それは、止めるがよい」

「え――？」
「そなたは、家へ戻らぬ方がよい」
「どうしてでございますか？」
「池田家留守居が、そなたに、この招潮硯を下げ渡した、ということは、すぐに、贋物と断定した者の耳に入ろう。……その者は、そなたから、奪い返す肚になるであろう」
「……」
「こちらが、感ぐりすぎかも知れぬが、その者は、真物と知っていて贋物と断定した、と想像できるのだ。なぜ、そうしたか？　弥太郎に調査してもらわねばならぬところだが、推測できるのは、そなたの父小笠原又左衛門が、邪魔なので、これを家中から追いはらう目的であったこと。すなわち、古玩の文房具を集める任務を与えられていたそなたの父を、追いはらっておいて、代って、おのれがその職に就けば、主君をあざむいて、骨董屋どもと結託すれば、私腹がこやせる、と考えたこと。……もうひとつの目的は、贋物と判定しておいて、機会をうかがって、この招潮硯を、おのれに、下げ渡してもらい、高値でどこかへ売ってくれよう、というこんたんを抱いていること。……こう推測すれば、その者にとって、この招潮硯を、そなたに下げ渡されたのは、非常な狼狽事なのだな」
「よくわかりましてございます」
「そなたは、しばらく、当家に身を寄せているがよい。弥太郎が連れてくる女人は、当家であずかる前例ができて居る」

二

主水之介は、用人に命じて、千雪を、別室へ案内させておいて、弥太郎に向い、
「お主の調査は、かなり危険がともなうかも知れぬぞ」
と、云った。
「覚悟いたします」
「あの盲目の娘のためなら、働き甲斐がある、と思うわけだな」
「べつに、そういう気持ではありませんが、乗りかかった船でありますゆえ……。それよりも、それがしには、島中雄之助ともあろう者が、どうして、真物を贋物と看まちがえたか――それが、不審でなりません」
「弘法も筆のあやまり、猿も樹から落ちる――と片づけられないか。あるいは、これには、裏があったかも知れぬ。……まず、贋物と断定した者を、つきとめることだ」
「かしこまりました」
弥太郎は、篠田邸を出た。
腕を組んで歩き乍ら、
――あの硯一箇が、五千両、もしくは一万両ものねうちがある、というのか。
と、首をひねった。
なんとなく、ばかばかしい気がした。

貧しい庶民の生活費から考えると、五千両とか一万両という金は、途方もない額であった。

九尺二間の棟割り長屋の一年間の家賃は、十畳以上が九十文、九畳から六畳までが六十文である。

一千文が、銭一貫文。銭四貫文が、金一両である。

一年百文の家賃は、すなわち、一両の四十分の一にあたる。一両という金を、現代の円に換算してみると、米一石二万円であるから、一両を米一石として、百文は五百円という勘定である。

十畳の借家の家賃が、一年五百円とは、タダと同様である。家主としては、こんな安い家賃では、長屋を維持しかねるが、その安さをおぎなうのは、裏店の店子たちが出す糞尿の代金であった。

江戸っ子は、一尾二両から三両もする初鰹をあらそって喰べる美食家なので、その糞尿は、農家の肥料として、貴重なものとされていた。そこで、江戸八百八町から、近郷の農家は、あらそって、その糞尿を買ったのである。

裏店の家主は、店子の糞尿を売って、数十両をもうけたのである。

それにしても、家賃百文ですら、二年も三年も滞らせるほど、裏店の住民たちのかせぎはすくなかった。

一両小判を、生涯一度だけでも、手にしてみたい、という願いを持ち乍ら、それが叶わずに、逝くのが、大半であった。

一箇の硯が、五千両も一万両ものねうちを持っている、ということは、たしかに、ばかばかしい話に相違なかった。

——ともかく、どういうことになるか、主水之介殿の申されたごとく、これは面白いことになって来た。

弥太郎は、池田家上屋敷内の側用人の家を、再訪した。

「小笠原千雪に下げ渡して頂いた招潮硯について、ご相談いたしたい儀があり、お留守居にお目にかかりたい」

弥太郎は、申し入れた。

「拙者では、相談にならぬ、と申されるか？」

側用人としては、対手が直参旗本なので、鄭重に応待しなければならなかった。

「お留守居に、じかに、折入って——」

弥太郎は、云いはった。

側用人は、自宅の書院に弥太郎を待たせておいて、留守居の屋敷へおもむいて行った。

弥太郎は、腕ぐみをして、待った。

と——。

背後の花頭窓の外に、誰かが、忍び寄る気配を、弥太郎は、感じた。

弥太郎の神経は、修善寺左膳と決闘して以来、先日、公儀隠密たちと修羅場をくりひろげた——この半年間の経験で、充分に鍛えられて、迫り寄る敵に対する備えができていた。

弥太郎が、ぱっと、畳に身を伏せるのと、花頭窓を突き破って、一矢が飛来するのが、同時であった。

次の瞬間、弥太郎は、壁ぎわへ、はね立って、ツツ……と花頭窓へ寄ると、さっとひき開けた。

闇になっていたそこから、すでに、曲者の姿は、消え失せていた。

——たちまちにして、襲って来るとは、よほど気が急いているとみえる。

弥太郎は、苦笑した。

三

側用人は、ほどなく、戻って来た。

「まことに、お気の毒乍ら、お留守居は、大事の御用にて、今夜は、寸暇を惜しみ申すゆえ、いずれ他日、お目にかかりたい、と申して居るのでござるが……」

「それは、いたしかたがありませんな。では、お手前に、おうかがいいたそう」

「あの硯について、何か？」

「小笠原又左衛門氏が、あれを、買い求めて来た際、贋物と断定されたのは、どなたであったか、お手前は、ご存じですか？」

「贋物と断定されたのは、殿でござった」

「なに?!」

弥太郎は、眉宇をひそめた。

「御当主が、贋物と断定なされた？」

「左様でござる。……殿は、あの硯をお手にとられて、しばらく、眺められてから、下げい、と一言仰せられたのでござる。殿は、古玩の文房具に関する限り、鋭い目をお持ちでござる。いつぞやも、乾隆の頃の寿山石という石印のお買い上げを、さる骨董屋が願い出た時、一瞥されただけで、贋だ、としりぞけられたこともあり申した」

「ご当主が、贋物だと断定されたのであれば、やむを得ぬことだが……、その後、あれを、どなたかに、鑑定を依頼されたことはありませんか？」

「いえ、その後は、お留守居が、お預りしていて、どなたにも、見せては居り申さぬ」

池田家当主斉政が、贋物だと断定したのであれば、これは、話が変って来る。

——しかし！

弥太郎は、すごすごひきさがる気持は、なかった。

——おれに、矢を射かけて来た者がいる以上は、招潮硯を、真物（ほんもの）と知っていた奴がいる証左だ。

「お留守居が、あずかって居られた、といわれるが、誰人かが、ひそかに、眺めることができたのではなかろうか、と推測でき申すが……？」

「それは、どういう意味でござろうか？　ご貴殿は、何を申されたいのでござろうか？」

側用人は、けげんな面持になった。

「あの招潮硯は、贋物ではなく、真物であった、ということです」

「えっ?!　そ、それは、まことでござるか？」

「相違なく！」

「な、なんということを！　それでは、小笠原又左衛門は、なんのために、お咎めを蒙って、当藩を退去したことになるのでござろうか」
「ご当主の目がねちがいで、追放に相成り、一命を縮めた、といえる」
「殿が、目がねちがいなど！」
「事実、そうであったのだから、いたしかたがござるまい」
弥太郎は、冷然として、云った。
側用人は、苦渋の面持になって、視線を畳に落した。
「小笠原氏のあと、ご家中で、古玩文房具を集める役目は、どなたがおやりになって居られるのか？」
「べつに、いまは、指名によって、相務めて居る者は、居り申さぬが……」
側用人は、かぶりを振った。
弥太郎は、すっと、腰を上げた。
「では、これで――」
「あ――しばらく、お待ちを」
側用人は、あわてて、招潮硯が真物であったというのが事実ならば、その旨を、お留守居におつたえしなければならぬ、と云い、それまで、待って欲しい、と願った。
しかし、弥太郎は、なぜか、
「その必要は、ござるまい。すでに、あれは、小笠原千雪にお下げ渡しになったものゆえ、ご当家では、かかわり知らぬ品、ということに相なる」

と、云いすてて、さっさと、玄関へ出た。
わざと、矢を射かけて来た曲者のことは、告げなかった。

四

池田家の宏壮な上屋敷の高塀に沿うて、歩き乍ら、弥太郎の神経は、鋭く、前後へ配られていた。
当然、第二の襲撃があるものと、ほぞをきめていた。
しかし――。
矢も槍も刀も、襲いかかっては来なかった。
町家の通りへ出て、
――妙だな。
と、弥太郎は、あらためて、頭をまわして、尾行者のないことをたしかめ、小首をかしげた。
――どうして、襲っては来ぬのか？
その懸念は、一瞬、
――そうか！
と、ひとつの合点に変った。
――そうか。判った。そういうわけだったのか。

はっきりと、視通した弥太郎は、にやりとして、行先を転じた。
千雪が待つ篠田邸へ、ひきかえすのを、止めたのである。
小半刻後、弥太郎が、入って行ったのは、駒込片町の権兵衛長屋であった。
千雪の家へ近づいて行こうとすると、不意に、一人の職人が前をふさいだ。
「旦那！　冗談じゃありませんぜ。千雪様を、どこへ、かどわかしなすった？」
肩をいからせて、迫った。
忽ち、前後へ、険しい権幕の住民たちが、迫って来た。
「人ぎきのわるいことを云ってくれるな。かどわかしたりなどはせん」
「じゃ、どうして、一人でやって来なすった？　千雪様を、どこへ、とじこめなすったんだ？」
「千雪は、さるところへ、預けて来た」
「余計なことをしてもらいたくはねえ。千雪様は、この裏店の天女ですぜ。勝手にどこかへ、つれて行かれちゃ、たまらねえや。……けえしておくんなさい」
「明日になれば、つれて来る」
「嘘をついたって、だまされねえ」
「嘘をついては、居らん。……今夜、つれてもどったら、騒動にまき込まれて、身に危険が及ぶおそれがあるからだ。……そうだ、お前らも、しばらく、家にすっ込んでいてもらおう。まきぞえくらって、怪我をしても、治療代はやらぬぞ」
「いってえ、なにがおっぱじまるってえんで――？」

「待っていれば、やがて、判る」
弥太郎は、家の中に入った。
四半刻も経った頃合、路地に、数人が忍び寄る気配を、弥太郎は、さとった。
――さあ来たぞ！
弥太郎は、小笠原又左衛門の位牌を背負うて、端座した。
格子戸をひき開けて、なだれ込んで来たのは、いずれも、肩のとがった、無精髭（ぶしょうひげ）だらけの浪人者であった。
弥太郎は、冷やかに、眺めて、
「お主らの目当は、せいぜい二朱だろう。二朱で、おのれの生命を落す場合もある、と考えなかったか！」
と、あびせた。
浪人者たちは、黙って、抜刀した。
弥太郎は、平然たるもので、戸口の外に立つ者へ、呼びかけた。
「浪人衆をやとって、ひきつれて来た御仁、前へ出てもらおう」
しかし、その者は、動かなかった。
「おい！」
弥太郎は、すっくと立つと、浪人者たちを無視して、窓ぎわへ寄り、
「池田家側用人！　すこし、うろたえすぎるぜ。てめえ、一人、善人面をして、小笠原又左衛門の切腹をさしとめてみたり、千雪に親切ごかしのにせの親身ぶりを示してみたり――ち

っとばかり、芝居のやりすぎだったな。……殿が、贋物と断定された、と。わらわせるな。贋物と断定したのは、てめえだったのだ。殿の方は、なにも知らなかったのだ。……化(ば)けの皮がはがれて、尻尾を出したのは、おれに、矢を射かけて来たからだ。それにしても、てめえの欲の深さには、あきれた。あの硯を千雪が下げ渡して欲しい、と申し出ると、てめえは、金欲しさに、さっさと渡してくれたぜ。あとで、とりかえす、という肚があったからだ。五百両出したのを、二百両かえして寄越したところは、手がこんでいたな。おかげで、こちらは、まんまと、だまされた。……おれが、一人で、乗り込んで行き、硯の件で、留守居に面談したい、と申し込むと、てめえは、内心あわてた。あわてて、矢を射かけて来て、尻尾を出した。……いずれにしても、狐狸のたぐいは、いずれは、化の皮が剝がれるものだ。……浪人衆、じたばたさわぐな！　このおれを、平山道場の竜虎の一人狩野弥太郎と知っての上で、かかって来たいなら、来い。一太刀ずつで、あの世へ送ってくれる。……生命が惜しいならおとなしくそこを空けることだ。おれが、狸いっぴき、どう料理するか、見せてやる！」

第二十七話　姦夫姦婦

一

「旗本とは、いったい、なんなのだ？」

御家人(ごけにん)守屋清三郎は、数冊の書物を、几の上にひらいて、呟いていた。

幕府の法令では、禄高一万石以上を大名ときめ、その知行地を領分と称したのに対して、一万石に足りない禄高を持つ直参の武家を旗本と呼び、その知行地を知行所と称していた。

八千石でも、百石の微禄でも、旗本は旗本である。

旗本という名称は、大将が本陣のまわりに旗を立て、その旗の下に護衛の士をはべらせたことから、起っている。

戦国の時代には、すべての大名は、旗本を持っていた。徳川期に入って、旗本という名称は、将軍家直参だけに限られ、諸大名は、遠慮して、馬廻りという名称にかえた。

旗本と御家人は、本来、同じ身分である。御家人という名称は、鎌倉時代に起っている。源頼朝に臣従した者は、執権北条氏以下、すべての者が、御家人とよばれた。その御家人の

家来を、家の子郎党といったのである。

いまは――。

旗本は、将軍家にじかに拝謁できる御目見以上を総称し、御家人は、御目見以下ということになっている。

したがって、御家人は、旗本より身分がひくいというのが、常識なのだ。

たしかに――。

二百石以上の御家人は、一人もいない。

「ばかげている。いったい、なんのために、わしは、御家人になど、されてしまったのか」

守屋清三郎は、吐き出した。

渠は、もともと武士ではなかった。町人の伜であった。

蔵前の札差和泉屋善兵衛の次男であった。父親が、御家人守屋清左衛門に、一千両を贈って、この次男を、養子相続させて、御家人の分限を買い取ったのである。

この風習は、宝暦頃からはじまったものであった。偽籍の悪習であり、これは旗本御家人の窮迫から生れたもので、もし露見すれば、評定所の裁きを受けて、死罪になるおそれがあった。

しかし、幕府では、見て見ぬふりをしたのである。旗本御家人の窮迫を救う一手であったからである。

「わしが、なまじ、餓鬼の頃に、町道場へかよって、竹刀振りが、少々上手であったばかりに――」

守屋清三郎は、父親から御家人にされて以来、何もすることがなかった。

ただ、無為に、その日その日をすごしただけであった。他の御家人とちがって、実家の和泉屋から、毎月生活費がとどけられているので、台所はゆたかであった。

二十三歳の清三郎にとって、何もせずに毎日をすごすことは、苦痛であった。

実際、旗本小普請、御家人ともなると、全くすることはないのだ。してはならない法度があるのだ。こんなばかげた話はないのであるが、どうにもならないのである。

町人の伜である清三郎は、何もしてはならないという奇妙な武家法度が、次第に、腹が立って来ていた。

「どうして、働かせないのだ。小普請や御家人が、商売しては、どうしていかぬのだ。蕎麦屋をひらいたり、呉服商になるのは、体面にかかわるのだろうが、武士として、はずかしくない仕事は、いくらでもあるではないか。新刀を打ちあげることもいいではないか。兵法道場をひらくのも、面白い。医術を学んで、庶民を診てやるのも、世の為になることだ。各家の蔵書を集めて、これをひろく、公開して、読書料を取ったとて、なんのさしつかえがあろう。その他、武士として、体面をけがさぬ仕事は、さがせば、山ほどあるのだ。なぜ、公儀は、許可しないのか。黙許でもよい。……花をつくって、売っただけで、追放になった者が、あるなどとは、ばかげて居る」

清三郎は、近頃では、こうして、独語する癖がついていた。

廊下に、跫音がした。

「小父上――」

守屋家本家の子息主税の声が、した。

清三郎が株を買ったのは、守屋家分家で、二百石の知行であったが、本家の守屋家は、小普請組支配で、二千五百石の大身であった。

守屋家本家は、当主頼母が、二年前に逝き、一人息子の主税が、継いでいた。今年十六歳であった。

二

部屋に入って来た守屋主税の顔面は、死人のように蒼白であった。

清三郎は、眉宇をひそめて、

「どうされたのだ？」

と、訊ねた。

「母と用人を、殺し申した」

主税は、肩を喘がせてから、その言葉を、口から押し出した。

「なに?!」

清三郎は、愕然となって、主税を見まもった。

「小父上、た、たすけて下され！」

主税は、畳に、両手をついて、哭き出した。

「落着かれい。……事情を、うかがおう」

主税は、しばらく、その姿勢で、喘いでいてから、ようやく、顔をあげて、語りはじめた。

今朝がた——夜が明けて、ほどなくの頃あいであった。

主税は、にわかの腹痛におそわれて、厠に入ったが、容易に、おさまりそうもなかった。

母親の真佐に、薬をもらおうと思って、その居間に、近づいた。

すると——。

居間から、奇妙な声音が、もれて来た。

未経験の主税の耳には、それは、ただ、奇妙な声音としか、きこえなかった。

——どうしたのであろう？

不審に思いつつ、障子に手をかけた瞬間、

「ああ……もう、死んでも、いい！……そなたに、なにも、かも、あげた！」

喘ぎつつ、口走る母親のきれぎれな言葉が、もれ出て来た。

いかに、おくての主税も、その居間の中で、何が起っているか、判断がついた。

主税は、全身が、かっと熱くなった。口腔内が、かわき、次に、顫えがおそって来た。

男の声は、きこえなかった。

母親のみだらな、うわ言のような言葉が、ひびいて来るばかりであった。

主税は、必死の思いで、障子戸を、すこしひき開けてみた。

緋色が、敷具の上に散っていた。

その長襦袢から、むき出された腕と、下肢が、のしかかった男の五体に、まといついていた。

男の顔は、胸の隆起に吸いつき、その双手は、臀部をかかえていた。
ともに、もの狂おしく、うごめき合っていた。
主税は、生れてはじめて、男女の交合を、目撃させられたのであった。
男女の交合が、こんなに凄じく、あさましいものとは、夢にだに知らなかった。
凝視するうちに、主税は、胸の動悸がおさまり、母親と男に対する憎悪感だけが、心にのこった。
——父上の三年忌もおわらぬというに！
主税は、忍び足で、自分の居室へもどって来た。
長押に架けられた伝家の宝槍を、とりおろすと、二、三度、しごきをくれてから、再び、母の居間へ、ひきかえした。
その時、主税の心中には、
——自分は、三河譜代の名門守屋家の当主だ！
という矜持がみなぎっていた。
その寝牀では、真佐と男は、まだ抱き合っていた。男は、用人の月森三左衛門であった。
用人といっても、その父親から継いでいて、まだ二十八歳の若さであった。
真佐は、三十四歳であった。
主税は、障子を、すっと開いた。
真佐の顔が、こちらを向き、驚愕の色を、あふらせたのを、みとめた——次の瞬間、主税は、穂先の狙いをつけて、

「えいっ！」
と、突きくれた。
月森三左衛門の背中を、狙ったのであったが、三左衛門がはね起きたので、穂先は、真佐の咽喉を、貫いた。
ひき抜こうとしたが、真佐の双手が、けら首をつかんではなさないので、それが叶わず、主税は、槍をすてると、脇差を抜いた。
どうして、こんなに冷静であるのか、ふしぎなくらいであった。
主税は、脇差を握りしめて、じりじりと、用人に肉薄した。
三左衛門は、両腕をひろげ、うしろの壁へ、掌をべったりと吸いつけ乍ら、恐怖の色を、顔いちめんに滲ませていた。
なぜか、許しを乞おうとしなかった。
主税は、叫びとともに、三左衛門の鳩尾へ、鍔も通れと、突き刺した。
「あ、あ、あ……」
三左衛門は、口をいっぱいにひらいて、悲鳴を発した。
切先は、壁まで刺したらしく、三左衛門は、そのままの姿勢で、立っていた。
二人を成敗したあとに、主税は、激しい眩暈におそわれ、その場へ、どさりと坐り込んでしまった。
家中が、騒然とならなかったのは、主税を育ててくれた乳母が、この光景を最初に発見したからであった。

乳母は、聡明な女性であった。母親の真佐などとは、比べものにならなかった。主税が、しっかりした少年に育ったのは、乳母のおかげであった。

乳母は、三十余年間も、守屋家に奉公している忠実な家僕を、そっと呼びつけて、冷静に、この処置をとったのであった。

したがって、他の奉公人は、すこしも、この惨事を気づかなかったのである。

三

一部始終をききおわった守屋清三郎は、腕組みして、

「お許に、あの乳母がついていたことは、なによりのことでしたな」

と、云った。

「はい――」

主税は、うなずいた。

「用人の死体のしまつの方は、どうされた？」

「忠平と申す下僕が、こっそりとかついで、裏庭へ出て、木蔭へ、すて申した」

用人月森三左衛門が、夜明けがた、そっと、亡き主人の居室に忍び込んで、金品を盗み取ろうとして、未亡人真佐が、これを発見した。三左衛門は、真佐を殺害して、遁走しようとした。そこへ、主税が、馳せつけて、その胸を刺して、母親の仇を討った。

乳母は、そういう筋書を思案したのであった。

おそらく、いま頃は、奉公人どもは、そう告げられて、小普請組総支配まで、届け出られているに相違なかった。

「ともかく、事件は、落着し、お許は、母御の仇を討ったのであれば、べつに、案じることはござるまい」

清三郎は、なぐさめた。

「いえ、表面上の糊塗は成っても、身共の良心の咎めは、いよいよ、痛み申す。その儀につき、ご相談に上ったのです」

主税は、必死の面持で、云った。

「やむを得ぬ。お許が、これからさき、長いあいだ、無慚な光景を、思い浮べて、心を悩まされることになろうな」

「堪えがたいことです」

「と申して、どうすればよい、という思案も、思いつかれまい」

「三年か五年、どこかの禅刹に入って、結跏趺坐の修業を積んでみては、と存じ……」

「無駄でござろうな」

清三郎は、冷やかに、云った。

「無駄ではないと存ずるが……」

「そうやって、人間をつくってみたところで、なににになろうか」

「……」

「お許は、生涯、小普請組支配という無役を送るしかないのですよ。いずれは、柳営内で、

奉行とか目付のような要職に就く希望があるなら、人間をつくる必要もござろうが、身を慎しみ、法度を守ってくらしても、放埒無頼のその日を送っても、どちらでも、同じことというのであれば、べつに、懺悔によって、心を洗い、精神をきたえてみたところで、なんの役にも立ちますまい」

「し、しかし――」

主税は、清三郎の言葉を冷淡なものと受けとって、不服の表情になった。

「尤も、お許が、どうしても、禅坊主のまねがしたい、と申されるのであれば、べつに、止めるものではござらぬが……」

「……」

主税は、沈黙した。

「ともあれ、主人たるお許が、騒動をあとにして、家をあけられたのは、まずい。……それがしが、同道つかまつる」

清三郎は、立ち上った。

守屋家本家までは、かなりの道程であったが、清三郎と主税は、ほとんど会話を交さずに、黙々として、歩いた。

屋敷の前へ来て、二人は、裏門へまわった。

凶事があった場合、忌あけまで、表門はかたく閉じられるのが、武家のならわしであった。恰度――。

二人が、裏門へ寄った時、そこから、白布をかけた棺が、かつぎ出されるところであった。

月森三左衛門の遺骸であった。

清三郎は、主税のこめかみが、ぴくぴくっと、痙攣するのをみとめた。

棺をかついでいるのは、やとった人夫であったが、そのあとに、痩せた浪人者が、つき添うていた。

三左衛門に、面差が似ていたので、弟であることがすぐ判った。

無精髭をはやし、いかにも尾羽打ち枯らしたていであった。

主税は、三左衛門には、勘次郎という無頼者の弟がいることをきいていたが、まだ会ったことがなかった。

これが、勘次郎という弟に相違ない。

ふところ手で、棺のあとに従って、裏門を出て来た勘次郎は、ふと、そこに、主税が立っているのを、見出すと、ふところから、双手を抜き出した。

「ご当主主税殿でありますな？」

たしかめてから、急に、双眸に、険悪な光を加えた。

「それがし、三左衛門の実弟勘次郎と申す。……兄が、殺害されて、黙って、ひきさがって居るわけには参らぬ。……ここでお会いしたのが、もっけのさいわい、仇討ちをさせて頂く」

そう云いはなつや、すっと、一歩退って、草履を脱ぎすてた。

「待った！」

清三郎は、手を挙げて、制した。

「用人月森三左衛門は、亡き主人の居室から、金品を盗みとろうとして、成敗された不埒者。

あろうことか、奥方を殺害して遁走しようとして、この若い当主に成敗されたのではないか。

……いかに、実弟といえども、仇討ちよばわりは、条理に合わぬ！」

その言葉をきくと、勘次郎は、急に、ふてぶてしく、せせら嗤った。

「そっちが、体裁をつくろっているのだから、こっちも、一応、恰好をつけてみただけのことよ。……兄貴が、金品を盗もうとして、その元服したばかりの若さんに、成敗された、と。しゃらくせえごまかしは、止してもらおうじゃねえか。……二月前に、おれは、兄貴に、会っているんだぜ。その時、兄貴の奴、いやに、ふところが、あたたかそうだから、カマをかけてみたら、あっさり白状しちまったのよ。奥方様が、もう無我夢中に、血道をあげて、兄貴の云いなりになっている、とね。……つまり、それの現場を、若さんが見つけて、かっとなり、姦夫姦婦、許しがたい、と成敗した、という筋書と、読めたね。……どうだね、この推量は、ぴたり図星だろう」

「……」

清三郎も主税も、黙っていた。

「返辞のねえところは、当っていた証拠だな。……なに、おふた方、おれは、仇討ちなんぞの料簡は、毛頭みじん、ありやしねえ。ものは相談さ。そちら様は、体裁をととのえなけりゃならねえのだから、どうでも、兄貴を盗人にしたてる必要がある。こちとらは、目下、オケラのぴいぴいだ。話し合いの余地が、充分あろうというものではないかね。……え、どうだね、おふた方？」

勘次郎は、声をひそめると、指を三本つき出した。

「三百両――かけ値のねえところで、手を打とうじゃねえか。どうです？　安いものだ。金輪際、あとでまた、みじめったらしく、お伺いつかまつるような、いやしいまねは、しねえと、金打してもいいぜ」

「信用できぬな。金づるができた、と北叟笑んでいるところだろう」

「いいや、あこぎなことは、性分に合わぬ。三百両で手を打って、以後は、往来で会っても、知らぬ顔をする、と神明に誓うぜ」

「まことだな？」

「痩せても枯れても、武士だぜ。二言はない」

「そうか、よかろう」

清三郎は、うなずいた。

次の瞬間――。

清三郎は、凄じい抜きつけの一撃を、勘次郎へ送りつけた。

血飛沫が、宙に撒かれた。

「ち、ちくしょうっ！　だまし討ちを、し、しやがったな」

勘次郎は、刀を抜いたが、構える力を失っていた。

清三郎は、一歩踏み込むと、もう一撃を、脳天からあびせかけた。

「ぎゃあっ！」

勘次郎は、絶鳴をのこして、塀へもたれかかり、そのまま、ずるずると、崩れ落ちた。

清三郎は、刀身をぬぐって、鞘に納めると、人夫どもへ、一両ずつ呉れてやり、

「他言無用だ。もし、このことを喋るようなことがあれば、どこまで遁げても、さがし出して、討ちすてるぞ！」

と、云った。

人夫どもは、土下座して、地面に額をこすりつけた。

「兄の棺に、弟も一緒に入れてやって、葬るがよい」

「へ、へい」

清三郎は、全身をこわばらせている主税をうながして、裏門をくぐった。

「兄は盗人で、弟はたかりであった。仲よく、連れ立って三途の川を渡ればよいのだ」

第二十八話　少年純情

一

「このあたしに、守屋家本家の不始末の立会人になれ、というのかえ？」

桜田優之助は、けげんそうに、守屋清三郎を、視かえした。

ここは、深川八幡前の小料理屋の二階であった。

優之助は、五日前から流連て、流石の美貌も、艶が失せて、眸子もにごり、挙措動作もだらしない倦怠ぶりをあらわにしていた。

守屋清三郎は、この二日間、足を棒にして、優之助をさがしまわり、ようやく、この小料理屋にいることをつきとめたのであった。

桜田優之助は、守屋家本家とは、遠縁の間柄であった。

流連のために、守屋家本家で起った惨事は、すこしも知らなかった。

清三郎から、守屋主税が、その母真佐と用人月森三左衛門が密通している現場を目撃して、これを成敗した、という騒動をきかされても、優之助は、べつに驚愕の色も示さず、ただ、

かるくうなずいたばかりであった。

主税の乳母の機転で、月森三左衛門が盗心を起し、これを真佐が見咎めて、殺され、主税の手で仇討ちがなされた、ととりつくろったところまでは、よかったが、三左衛門の遺骸を裏門からかつぎ出した時、その実弟勘次郎が立ちはだかり、真相を看破ったと脅迫をして来たので、清三郎が、気早やに、これを斬りすてたのが、失敗であった。

目撃者がいたのである。

かなりはなれた場所に、勘次郎の情婦が、物蔭から、視ていた。

両国広小路の水茶屋の女で、おまんといった。

これが、店へ馳せ戻って、しゃべり散らしたのである。

小普請組総支配支倉紋十郎より、守屋主税ならびに守屋清三郎の二人に、出頭するよう命令が来たのは、どうやら、おまんのおしゃべりのためと思われるのであった。

主税と清三郎は、立会人同道の上で、総支配の裁きを受けなければならなかった。

「あたしのような男が、立会人になるのは、いちばん、柄に合わぬわえ。狩野弥太郎あたりを、たのんでみては、どうであろう？」

優之助は、云った。

小普請組総支配支倉紋十郎は、全く融通のきかぬ、一年中苦虫を嚙みつぶした顔つきをしている人物であった。優之助のような男とは、およそ反が合わぬのである。

「何卒、曲げてご承諾のほどを――」

清三郎は、かさねて、頭を下げた。

薄化粧をしたり、緋の長襦袢をまとったり、女言葉をつかったりしているが、意外にも、優之助の性根が、はがねのごとく強いことを、清三郎は、知っていたのである。

「しかたがない。立会人になるとしようかえ」

優之助は、しぶしぶ引きうけてから、

「但し、こうした場合の立会人は、咎めの条々を、ただ黙って、耳に入れておくだけで、弁護は、許されて居らぬ、ときいて居る。……それだけの役目なら、あたしであろうと、他の誰であろうと、一向にかまわぬことだが――」

と、云った。

「慣例を破って、貴方様に、弁護して頂きたく存じます」

清三郎は、たのんだ。

「さあ、それが、ゆるされるかどうか……」

優之助は、ゆらりと立ち上ると、

「あたしは、ひと足さきに、総支配の屋敷へ、参ろう。お手前と主税殿は、半刻ばかりおくれて、罷り越されるがよろしかろう」

と、指示した。

立会い最中に、弁護することは、総支配の支倉紋十郎を、憤らせる結果をまねくおそれがあるので、先に単独で訪れて、あらかじめ弁護しておくつもりに相違ない。

清三郎は、優之助の肚裡を、そう読みとって、感謝した。

「忝じけのう存じます」

双手を畳につかえて、平伏したが、頭を上げた時、優之助の姿は、すでに、そこにはなかった。

二

優之助が、小普請組総支配の屋敷の書院に坐った時、その姿は、紋服にかわっていた。

支倉紋十郎は、守屋主税の立会人として、桜田優之助がやって来た、ときくと、舌打ちして、

「あやつが！」

と、吐き出した。

支倉紋十郎にとって、優之助は、旗本八万騎の中で最も嫌悪すべき存在であった。

歌舞伎の女形か、湯島の陰間のような身装をして、ぐだらぐだらと市井を遊び呆けている桜田優之助を、できることなら、小普請組から、追放して、甲府流しにしてしまいたかったのである。

あいにくと、優之助は、無頼の行状を重ねているにも拘らず、総支配に尻尾をつかませなかった。

ひとつでも、証拠をつかめば、支倉紋十郎は、直ちに、評定所へ進言する肚でいた。

唾棄すべき、旗本の面よごしの桜田優之助が、立会人としてやって来たことは、総支配の顔面を、いよいよ、苦虫を噛みつぶしたものにした。

書院へ入って来た紋十郎は、しかし、優之助を一瞥して、

――おや？

と、思った。

紋服に威儀を正した優之助は、その美貌をきびしくひきしまったものにして、旗本大身の風格さえ示していたのである。

紋十郎の知っている女形か陰間のような、ふやけた風情は、みじんもなかった。

優之助は、紋十郎が、座に就くと、鄭重に一礼して、

「総支配のお役目繁多の折柄、守屋主税がしでかした不始末聴聞の儀をお煩わし、恐縮至極に存じます」

と、挨拶した。

語気も凛乎と張っていたし、態度も折目正しかった。

紋十郎は、いよいよ、面くらった。

しかし、にがりきった表情は、そのままにして、

「其許、立会人ならば、何故、守屋主税に同道せぬのかな？」

と、訊ねた。

「拙者が、ひと足さきに参上いたしましたのは、世間の取沙汰と申すものは、あまり信ずるに足らぬ、ということを申し上げたく――」

「わしは、世間の取沙汰によって、守屋主税を呼んだのではない」

「勿論、その通りと存じます。主税が、母親を殺した用人を成敗した、というのは、体裁を

とりつくろった虚構で、実は、母親と用人が密通しているのを目撃して、両人を殺したのだ、といった噂など、お手前様が露いささかも、信じては居られぬことは、それがしも、信頼申し上げて居ります」

優之助は、ぬけぬけと云った。

先手を打たれた紋十郎は、優之助が何故に、かくさなければならぬ真相を、平然として口にするのか、その肚裡を読みとりかねた。

「しかし、世間の取沙汰というものは、時と場合によっては、真実をつたえて居る、と思わぬか？」

紋十郎は、皮肉な目つきと口調で、云った。

「左様です。それがしも、そう思います」

優之助は、素直に、紋十郎の言葉をみとめた。

「といたせば、このたび守屋家の悲惨な出来事も、あるいは、調査してみれば、市井の噂通りかも知れぬ」

紋十郎は、優之助を鋭く凝視し乍ら、云った。

「すると、総支配殿には、世間の取沙汰を、耳にされて、守屋主税を糾問することにした、といわれるのでござろうか？」

「いや、そうではない。もとより、総支配の役務にあるこの身が、市井の噂などを信じる道理はない。ただ、守屋主税は、用人を討ち果しておいて、分家の守屋清三郎の許へ、おもむいて居る。正々堂々の手討ちならば、狼狽して、分家へ奔って行く必要はないように思われ

る。また、守屋清三郎は、主税と一緒に、本家へやって来て、その裏門前にて、用人月森三左衛門の実弟勘次郎を、斬りすてて居るが、なにが理由で、軽慮の行動に出たか、これも、疑問とせねばならぬ。……一応、当人らの口から、聴取するのが、総支配の役目であろうと存じて、呼んだ」

「ご尤もの仰せです。……ところで、念のために、立会人として、おうかがいしておきたい儀がありますが、よろしゅうござるか？」

「なんなりと――」

「もし、守屋主税が、生母を成敗いたしたのが、真相といたせば、そのお裁きは、どのような処置と相成るか、うけたまわりたく存じます」

「……」

紋十郎は、すぐには、返辞をしなかった。

「半地減封と相成るか、あるいは、改易。場合によっては、遠島と相成りますか？」

「……」

「寛大のご処置でも、甲府勝手は、まぬがれますまい」

「まずの――」

紋十郎は、うなずいてみせた。

「もし、切腹、というようなお咎めを蒙るようなことに相成れば、十六歳の若者としては、あまりにも可哀そうでありますゆえ、何卒寛大なおとりはからいの程を、お願いつかまつります」

「立会人として、その願いは、立場をわきまえぬ、出過ぎた態度であろう」
紋十郎は、きめつけた。
すると、優之助は、ふっと、微笑した。
紋十郎は、むかっとなった。
「なにが、可笑しい？」

三

優之助は、紋十郎の嫌悪の色をこめた視線を、平然として、受けとめた。
「総支配殿は、たしか、前身を、尾州藩馬廻り役、小松崎主水と申されましたな？」
「……む！」
紋十郎は、口をへの字に、ひきむすんだ。
「拙者が、うかがったところでは、小松崎主水と申された二十歳の頃、亡父の敵を、首尾よく討って、その手柄によって、ご当家――伯父上の支倉紋十郎殿の養子になり、その名を継がれた由」
「……」
「亡父の敵討ちをなされた時のことですが、敵は、一人の女人を連れていた、という噂がありました。その女人は、実は、お手前様――小松崎主水殿の姉上であった、とか。つまり、敵何某は、主水殿の姉上と恋仲になり、夫婦の許しを乞うた際、お父上が烈火の怒りを示され、成敗してくれると、抜刀されたので、やむなく、手向い、あやまって、殺害に及んだ。いわば、これは、敵何某としては、余儀なき防禦であった。……お手前様の方は、父君を殺害されれば、敵討ちをしなければならなかったのは、当然の仕儀でありました。お手前様は、二年の後、江戸にて、首尾よく、敵を討つことができた。その際、目撃の者らの話では、つき添うた女人をも、容赦なく斬られた由。実姉にも拘らず、みじんも許す心なく、斬られたのは、よくよく武士道を吟味するのに性情がふさわしい御仁である、と当時の世間の取沙汰であったとか……。もとより、拙者は、二十年も前の世間の取沙汰を、耳にしただけのことで、その真相がいかなるものであったか、存じませぬ。お手前様の口から、おきかせ頂ければ、この後のおのが身すぎの教訓といたしたい、と考えて居ります」

「……」
「お手前様は、亡父の敵につれ添うた姉上を、許しがたく、斬りすてられたが、これが咎めになるどころか、かえって、伯父上の養子になる幸運をひろわれて、いまは、小普請組総支配に成られて居ります。これを前例とすれば、守屋主税は、たとえ、実母を斬ったとしても、お咎めを蒙る不運には遭う筈がない――と判断しても、べつに不都合ではあるまい、と存じます」
支倉紋十郎としては、二十年前の自分の為した行動を、まだ二十四歳にしかならぬ桜田優之助が、知って居ろうとは、夢にも考えていなかったところである。
実姉を、容赦なく斬ったのは、事実であった。そして、そのことは、歳月が経つにつれて、深い後悔となった。

敵討ちをしたのは、十八歳の時であったから、血気のはやるにまかせて、実姉をも、刃の下に俯伏させたのであった。

二十歳を過ぎ、三十歳を迎える頃になると、

——自分は、なんという冷酷な所業に及んだものであろうか？

と、悔いがつきまとうようになったのである。

その後悔を、他人に知られたくない故に、紋十郎の言辞態度は、法度をかたく守るきびしいものになった、といえる。

紋十郎は、桜田優之助から、完全に、虚を衝かれた。

への字にひきむすばれた紋十郎の口は、容易に開くけはいもなかった。

優之助は、微笑して、

「程なく、主税と清三郎が参上いたしますが、よろしく、寛大のご処置の程を——」

と、頭を下げた。

主税と清三郎は、しかし、それから、半刻待っても、姿を現わさなかった。

優之助は、待ちくたびれて、しだいに腹が立って来た。

——わしが、こんなに努力して、総支配を、ぐうの音も出ぬように抑えつけているのに、なにを愚図ついて居るのやら。……こういう場合は、間髪を入れぬ呼吸が、大切なのだ。時間おくれになって、総支配が、元の態度をとりもどしてしまったら、もはや、どうにもならぬわえ。

優之助は、内心、紋十郎が総支配の役目柄をさとるのを、おそれざるを得なかった。

四

さらに、半刻が過ぎて、ようやく、守屋清三郎が、総支配屋敷の玄関に立った。

その顔面から、血の気が失せていた。

その旨を取次がれて、優之助は、書院からあわただしく、玄関へ出て来た。

「おそい！」

優之助に叱咤されて、清三郎は、ふかく頭を下げた。

「主税の姿が、屋敷から消えたのでござる。八方、手をつくして、さがしましたが、見当りませぬ！」

「ばかな奴！」

優之助は、舌打ちした。

「あるいは、知行所へ趨ったかとも想像されますので、二人ばかり馬で駆けさせましたが……」

その言葉をきいているうちに、優之助は、はっと、一種の霊感が働いた。

「菩提寺は？」

優之助は、清三郎を、瞶めて、問うた。

「菩提寺？」

「亡父の墓前を、さがしては居るまい」

「あっ！」
清三郎は、血相を変えた。
優之助は、あとから玄関へ出て来た紋十郎に、
「どうやら、主税は、お手前様のお調べを受けるまでもなく、自身で裁いたらしゅう思われます」
と、告げた。
流石に、紋十郎も、はっとなって、
「まことか？」
「多分――十中の九まで、相違ありますまい」
優之助と清三郎は、守屋家の菩提寺へ、いそぐことになった。
菩提寺は、青山にあった。
ようやく、山門に至って、それをくぐり乍ら、優之助は、
「十六歳か。わしも、十六歳の頃は、思念が、ひと筋であったわえ」
と、呟いた。
清三郎は、
「自分も、町道場で、無我夢中で、稽古をして居りました」
と、云った。
広い境内を横切る二人は、期せずして、よく晴れた空を仰いだ。
あまりにも、良い日和であった。

こんな良い日和に、死ぬ覚悟をきめるなど、十六歳の、まだ女の肌も知らぬ、思念ひと筋の若者でなければ、できぬことであった。
墓地に入って、清三郎は、ぱっと奔った。
優之助は、わざと、ゆっくりと歩いた。
「ああっ！　やっぱり！」
清三郎の叫びが、つらぬいた。
守屋主税は、白装束になり、作法通りに、見事に、父の墓碑の前で、屠腹して、俯伏していた。
優之助は、かなり遠い距離から、その光景を眺めた。
それから、そっと踵をまわした。
あとのことは、清三郎にまかせることにした。自分の役割は終ったのである。
優之助が、深川八幡前のその小料理屋へ、再び現われたのは、夕餉刻であった。
内儀が、びっくりして、
「お殿様、また、流連なさるおつもりですか？」
と、目をみはった。
「いかぬかえ？」
「い、いえ……、てまえどもは、半年が一年、流連て下さいましても、一向に、さしつかえございませんが……、お屋敷で、ご心配なさいませんか？」
「心配してくれる母親も、女房も、持っては居らぬぞえ」

「そう仰言いましても……」
「用人はじめ、使傭人どもは、わしのことなど、塵っけほども、懸念しては居らぬわさ。……わしは、生きている以上、今日を愉しむことにして居る。明日のことなど、知らぬ」
優之助は、さっさと階段をのぼった。
内儀は、自分の代りに、十六歳になる養女のきみを、優之助の座敷に、寄越した。
優之助は、きみの手を把った。
「そなた、わしに惚れてくれぬか？」
「……」
きみは、はずかしそうに、顔を伏せた。
「どうしても、惚れてもらわねばならぬ」
「あの……、どうしてでございますか？」
「わしは、近いうちに、この世を去らねばならぬ」
「え？」
「わしは一人で死ぬのは、ごめんだ。ひとつ、派手に、心中沙汰を起したい。……そなた、わしに惚れて、心中してくれぬかえ」
きみは、優之助をじっと見かえしていたが、
「あい」
と、合点してみせた。
——十六という年齢は、死ぬことがすこしもおそろしくないとみえる。

優之助は、きみを突きはなして、ごろりと仰臥すると、後頭で手を組んだ。
「きみ、降りて、おふくろに相談するがよい。わしが心中してくれ、とたのんで居るが、どうしたらよかろう、とな」

第二十九話　黄金報告

一

甲州街道は、上の諏訪で、中仙道と合する。

諏訪因幡守三万石城下である。

須波乃湖に面している。湖は、周十一里余、亘三里あまり。

季節は、玄冬で、すでに、いちめん尺寸の透間もなく、氷が張っていた。

古城進八郎は、弓香を連れて、この湖畔の旅籠に、三日ばかり泊っていた。

出窓に、腰かけて、湖面へ投ずる進八郎の視線には、大きな材木を、曳いている人の姿が、多く見わけられた。

氷上にうずくまっているのは、氷に孔をあけて、網を入れている漁師であろう。いずれも、長い竿を立てているが、もし落ちた時、この竿にすがって、匍いあがる智慧であったろう。

「弓香――」

進八郎は、部屋の火鉢のわきで、道中着のつくろいものをしている伴侶を呼んだ。

「はい――」

弓香は、顔をあげた。

進八郎は、女のふしぎな性を、その容姿に視ている。逃亡の旅であった。良人と子供をすてて、あてどない道中を、つづけているのであった。にも拘らず、弓香は、江戸で隣家にいた頃よりも、肌理がこまかくなり、頬や耳朶が、処女のように、ういういしいまでのうすくれないの艶やかさを呈しているのであった。

声音も甘いひびきをおび、物腰に仇めいた色香がただようていた。

「須波乃湖の御渡りというのを、弓香は知っているか？」

「いいえ、存じませぬ」

「道中図絵で、読んだことがある」

「道中図絵」には、こう記してある。

『須波乃湖には、七不思議ということあり。御渡り、八栄鈴、御作田、浮島、根入杉、御射山、湯口清濁などなり。御渡りとは、信濃は、日本にて最も地高くして、寒気深き国なるゆえ、諏訪の湖の上に、冬はじめて氷張りて、第三日、もし薄ければ、第四、第五日目に、上の諏訪より、下の諏訪の方に、横幅五尺ばかり、巨いなる木石の通りたるごとく、氷の上にあと付きて見ゆる。これ例年必ずあり。これを御渡りという。奇怪のことあり』

奇怪でもなんでもなく、諏訪湖は、十一里四方、岸辺まで、びっしりと、氷鏡となって張りつめるために、表面張力によって、亀裂が生ずるだけのことであった。

この御渡りを待って、諏訪の人々は、氷上を渉りはじめるのであった。

「ひとつ、湯に入って来ようか」

諏訪城下は、いたるところ湯が出る。井戸を掘れば、必ず湯が噴出するところであった。

しかし、藩の方針で、旅籠には、内湯を設けさせず、街道沿いに、温泉を幾箇所かつくらせていた。

旅籠の大半は、紅白粉に粧うたうかれ女たちを擁していて、旅人は、この女たちを案内させて、浴屋に行き、口をひらかせて、ゆあみするのであった。

進八郎が、旅籠を出ると、肌を刺すきびしい寒気が、身をつつんだ。現代でいえば、零下二十度ぐらいあったろう。

空は、碧落がひろがり、雲片をとどめていなかった。

富嶽が、湖の彼方に、すっきりと、截りぬいたようにそびえていた。

進八郎が、駆け込んだ角間町の浴屋が、最も規模が大きかった。

湯銭をはらって、進八郎は、黒羽二重を脱ぎすてた。

——痩せたな。

おのが五体を眺めて、呟いた。

ここまでの道中、一夜として、弓香を愛撫しないことはなかったのである。

弓香が、交合の悦楽を知るには、さして日数を必要としなかった。

弓香が呻き、もだえ、殆ど失神せんばかりの悦楽の頂上をきわめるのを眺めると、進八郎は、そのことに、長い時間を費さないわけにいかなかったのである。

胸の肉が落ち、肋が出ていた。

——やむを得ぬ仕儀か。

進八郎は、浴室に入った。

二

浴室は、濛々たる湯煙がこもって、数尺さきが、見さだめがたかった。

湯は、岩と岩を組みあわせた中から、こんこんと湧きあがって、板敷きに流れ出ていた。

しずかに、頸根まで沈んで、進八郎は、目蓋を閉じた。

こうしたひととき、進八郎ならずとも、のびやかな無心の境地に入る。

昨日のことも、明日のことも、忘れて、湯につかっている愉しさに、心が解き放たれる。

と——。

すぐ近くで、湯音がした。

誰か、先客がいたのである。

「旦那——」

声をかけて来た。旅商人であろう。

「うむ」

「旦那は、古城進八郎と仰言る御仁でございますね」

そう云われて、進八郎は、にわかに、五体を緊張させた。

この上の諏訪までの道中――甲州街道で、たった一度も、追手に襲われなかった進八郎であったが、これは、むしろ当人として、合点しがたいことであった。

当然、どこかで、刺客の攻撃を受けて、しかるべきであった。

内藤新宿はずれの郷士の家で、襲撃して来た公儀隠密たちが、追跡して来ない筈はなかった。

その郷士の家の土蔵は、壁が二重になって居り、壁と壁の間に、人がかくれることのできる隙間が、設けてあった。そのおかげで、進八郎と弓香は、斬殺されることからまぬがれたのであった。

公儀隠密たちは、二人が、土蔵から脱出して、何処かへ遁走したものと思い、追跡して行ったのである。

かれらが、そのまま、探索をあきらめて、むなしく、江戸へひきあげる道理がなかった。

――どうして、現われないのか？

府中から小仏へ、小仏峠を越えて大月へ、笹子峠を経て甲府に至り、釜無川に沿うて、道を急ぐ道中の間、進八郎は、かれらが出現しないのが、むしろふしぎでならなかったのである。

――もしかすれば、あの伊賀の刃心という、篠田主水之介の手飼いの忍びが、巧みに、誘導して、隠密連を、東海道へ、奔らせてくれたのかも知れぬ。

そう考えたのは、この上の諏訪の旅籠に入ってからであった。

突如として――、

温泉浴室の中で、湯煙のむこうから、顔も見わけられぬのに、こちらの名前を、ぴたりと当ててみせる曲者が、現われたのである。

「おれは、古城進八郎だが、お主は、何者だ？」

「へえ……」

男は、すぐには、返辞をしなかった。

「何者だ？」

「へえ、ケチな野郎なんで、へい――」

「道中、われわれのあとを尾けて来たな？」

「いえ、尾けたのじゃ、ねえんで……、つまり、あとを追いかけて参ったので、へい」

「貴様、公儀庭番衆の手先か？」

「とんでもねえ！」

男は、急に、湯をみだして、動くと、すこしずつ、近づいて来た。

「公儀庭番衆の手先でなければ、なんだ？」

「気ぜわしゅう、おたずねなさる」

「敵か味方か、と問うて居るのだ」

「敵でも味方でも、ありませんや」

「では、どうして、おれの姓名を存じて居る？」

「そこは、蛇の道は蛇で――へい」

「ごまかすな！」

進八郎は、叱咤した。

おぼろに見わけられる湯煙の中で、男は、顔まで沈んだ。

じっと、見すかしていた進八郎は、不意に、直感が働いた。

「わかったぞ、お前の正体が――」

「おわかりでございますか？」

「盗賊だな、お前は――」

「あたらずといえども、遠からず、ってえところでござんす。……あっしは、浅草奥山を縄張りとする巾着切なんで、へい。庄吉、と申しやす。……おことわりしておきやすが、旦那、盗賊だなんぞ、人ぎきのわるい。巾着切は、たしかに、人様のふところを狙いやすが、これは職人の腕と同じでござんしてね。夜働きや斬取りと一緒にしねえでおくんなさい」

「庄吉、と申したが、むささび吉五郎と懇意なのだな？」

「そうなんで……。実は、吉っつぁんから、それとなく、道中を守護してくれ、とたのまれやしてね」

「道みち、ごまの蠅を働き乍らか」

「冗談じゃありませんや。あっしは、痩せても枯れても、江戸っ子でさあ。すりをやるのは、御府内だけで、旅に出たら金輪際、人様の財布なんざ、目もくれません」

「吉五郎の奴、すりに道中守護をたのんでくれたとは、妙な気のきかせ様をしたものだな」

「旦那は、ご公儀のお庭番の強え人々に、追われていなさるんでござんしょう？」

「うむ」

「隠密か、ただのおさむらい衆か、これをかぎわけるのは、只の旅人じゃ、やれませんや。こっちは、目も鼻も、人一倍敏感にできて居りますんでね。そいで、吉五郎が、名ざしで、たのんで来たのだと思いやす」

その折、浴客が三人ばかり、入って来たので、二人の会話は、中断した。

三

浴屋を出てから、肩をならべて歩き出した時、奥山の庄吉が、云った。

「旦那、もうそろそろ、あの旅籠をおひきあげなすったら、如何なもので――？」

「不都合があるのか？」

「どうも、あっしの神経に、ぴりりっと、ふれて来やがる虚無僧が一人、先程、泊りやした。もしかすれば、あるいは、――と疑いたくなりやす」

「お前は、どこに泊って居る？」

「あっしは、ちょいと、妙なところに、ころがり込んで居りやしてね。上諏訪神社の神宮寺の庫裡なんでさ」

「ふむ」

「神社の禰宜さんが、三年前、江戸へ出て来て、浅草見物した時、あっしの仲間が、ちょいとね、ふところを頂戴したのを、あっしが、罰あたりめ、職柄と人柄をみて仕事をしろ、ときめつけて、財布をお返ししてあげたのが縁で――へい」

「成程な――」
「旦那、どうか、神宮寺の庫裡の方へ、お移り頂きとう存じます」
「よいのか？」
「ええ、それァもう――」
「移ろう」
進八郎は、旅籠にもどると、弓香にその旨を告げて、神宮寺の庫裡に、世話になることにした。
上諏訪神宮寺は、大層広大な規模を持っていた。
石段をのぼって二王門をくぐると、広い境内がひらけ、そこからさらに、左方の勾配険しい石段をのぼって、金堂の境内に至る。
五重塔も、立派なものであった。
金堂は、そのむこうに、大屋根をそびえさせていた。
庫裡は、金堂と松の木立をへだてて、あった。
進八郎が弓香をうしろにしたがえて、玄関に立つと、すぐに、庄吉が、出て来て、
「へい、もう、お話はしてございます」
こちらへ、とみちびいた。
進八郎と弓香が、座に就くと、庄吉は、
「あとを尾けて来た者は、居りませんでしたか？」
と、たしかめ、

「ここなら、ごゆっくりと、ご逗留なさることができやす。失礼でござんすが、さきをお急ぎになる旅じゃござんせんからね」
と、云った。
「お前のような目はしのきいた護衛者も、ついていてくれることだし、か」
進八郎は、笑った。
「旦那――」
庄吉は、急に、ひきしまった表情になると、
「ひと仕事おやりになるためにも、この神宮寺には、しばらく、逗留なすった方が、よろしいので――へい」
と、にやりとしてみせた。
「なんだ、というのだ？」
庄吉は、ちらと、弓香をぬすみ視た。
進八郎は、気づいて、
「そなた、むこうの座敷を借りて居れ」
と、命じた。
弓香が、しりぞくと、庄吉は、膝を進めて来た。
「旦那、あっしは、吉五郎から、打明けられて居りやす」
「……」
「佐渡から送られて来る御用金の一件でございます」

「――む！」

「いえ、吉五郎は、かるがるしゅう、仲間なら、誰にでも、しゃべるような男じゃございません。……あっしを、旦那がたの護衛役にするについて、打明けてくれたのでございます」

「……」

「吉五郎の話では、旦那は、御用金を横奪りするには、どの街道をやって来るか、つきとめなければならぬ、と仰言ったそうで……。御用金がはこばれて来ると、勘定奉行所から、朱引外（郊外）まで、出迎えがされる。つまり、甲州街道をやって来るならば、府中あたりまで出迎えることになる。吉五郎は、そうおこたえして、府中から、内藤新宿までの間に、襲えばよい、と申し上げたそうでございますが、あいにくと、旦那ご自身のおん身が、あぶなくなって、高飛びを――いや、つまり、江戸から逃散（ちょうさん）、てえ次第におなりになったので、この計略は、おじゃんになっちまったんでござんすねえ。……ところが、神様、仏様は、旦那をお見すてじゃござんせんでした」

「……？」

進八郎は、じっと、庄吉を見まもった。

「旦那！」

庄吉は、もうひと膝のり出した。

「運がついていなさる。今年は、御用金は、甲州街道を通りやす。こいつは、たしかでござんす。……つまり、御用船が、直江津に着いたのでさあ。高田、野尻湖、善光寺、屋代、青柳、岡田、塩尻峠を越えて、この諏訪から、甲州街道に入ることに、きまったことが、実は、昨日、はっきりと判りやした」

四

というのは――。

昨日、藩庁から、この神社に通報があり、神社ならびに神宮寺に寄宿している者は、何人であろうとも、明後日うちに、立ち退かせてもらいたい、と命令して来たのである。

庄吉が、禰宜に、その理由をきくと、

「御用金のご一行が、当社へ、お泊りなさるのだ」

という返辞であった。

御用金はこびだけに、本陣はわざとさけて、神社とか寺院を、宿泊所にえらぶならわしになっていたのである。

「そうか！」

進八郎は、大きくうなずいた。

「御用金は、数日後に、ここで、一夜をあかすのか！」

「ね、こいつは、全く、おあつらえ向きの――盆と正月が、一緒になって、むこうから、やって来てくれた、というわけでさあ」

庄吉は、にやにやしてみせた。

「しかし、ちょっと待て」

進八郎は、腕を組んだ。
「御用金一行は、すくなくとも、三十人を下るまい。……こちらは、たった二人だぞ」
「二人だから、呼吸が合って、やりいいんでさあ」
「二人で、どうやって、襲うのだ？　わしには、三十人もの幕臣を斬る腕前はないぞ」
進八郎は、云った。
「なあに、人を斬って、金を奪うのは、下の下でさ。……人騒がせをせずに、こっそりと、誰知らぬ間に、金を頂戴する。これが、つまり、名人芸たる所以でござんす」
「そんな巧妙な手段がある、というのか？」
「ここを――」庄吉は、自分の頭を、人差指で、つついて、「働かせて頂きてえもので――」
と、云った。
「どうする？」
「明後日まで、たっぷり時間がござんす。……とっくりと、思案しようじゃござんせんか」
庄吉は、ぽんと、胸を叩いてみせた。
夕餉の席では、庄吉は相伴せず、進八郎と弓香だけが、さし向った。
弓香は、進八郎が、黙り込んで、箸を動かしているのが、気になって、
「どうかなさいましたか？」
と、訊ねた。
「べつに、どうもせぬ」
こたえたが、進八郎は、急に、肚をきめると、

「弓香――」
「はい」
「わしが、天下の大泥棒になったら、そなた、わしを嫌悪するかな？」
「なにを仰言います？」
「ざれ言を云って居るのではない。真剣なのだ、わしは――」
「どういうことでございましょう？」
「ざっと、百万両の黄金が、数日後に、ここへ、はこばれて来る」
「えっ？」
「わしが、この莫大な金を、横奪りしようというわけだ」
「ま、まことでございますか？」
「やる！……しかし、やりそこなえば、生命はない。そなたまでも、まき添えにしてしまう。そなたは、明後日、わしと別れて、木曾あたりまで、行って、わしを待っているがよかろうな」
「いやです。そんなこと――、貴方様と別れるなんて……、そんな、片刻も、はなれませぬ！」
弓香は、激しくかぶりを振った。
「わしは、失敗せぬ。必ず、成功してみせる。わしを信じて居れ」
進八郎は、力強い語気で、云いきかせた。

第三十話　盗賊びらき

一

公儀御用金送りの一行が、上諏訪神社へ到着したのは、それから三日後であった。

ここで、佐渡の金銀山について、すこしばかり、ふれておこう。

佐渡国から、金が出る、という話は、「今昔物語」にも、「宇治拾遺物語」にも、出て来る。平安朝の頃、すでに、能登国の鉄（くろがね）掘りが、佐渡に渡って、金を採っていた模様である。

その頃は、おそらく、山から流れ落ちた砂金を採ったものであろう。

金あるいは銀が、人間にとって、最も価値あるものとなったのは、わが国では、足利時代になってからである。そして、天正頃から、金銀山の開発が、めざましくなった。

当時、名のある金銀山といえば――。

石見（いわみ）国大森銀山、但馬国生野銀山、佐渡国西三川、鶴子銀山、越後国上田銀山、相俟金山、越中国松倉、河原波、吉野、亀谷、下田などの諸山、岩代国軽井沢銀山、黒森金山、駿河国梅ヶ島、富士金山、伊豆土肥金山、甲斐信濃国黒川山、保村、西八代、川上などの金山、摂

津国多田銀山、倉谷銀山、能登国宝達金山、飛驒国和佐保、茂住銀山、美濃国畑佐銀山、出羽国院内、阿仁、荒川、大葛の諸山、陸中国白根金山。

佐渡はまだ、日本一の金産出の土地ではなかった。

相川山すなわち佐渡金銀山が発見されたのは、慶長に入ってからであった。

相川山に隣りあわせた、真野湾にのぞむ沢根にある鶴子から、銀が産出されていたが、あまり多量ではなかった。

慶長六年――。

鶴子銀山の山師三浦次兵衛、渡辺儀兵衛、同弥次右衛門の三人は、かねてから、鶴子の北方にある山のたたずまいが、その樹木の茂り様、岩石の重なり様から、いかにも、

「金銀の鉱（あら）あるべき備え」

と、看てとっていた。

そこで、その年の夏、三人は、探査をすることになった。

まず、鶴子を越えて、羽田村に出て、浜辺づたいに鮎川（現在の濁川）の川口に辿りついた。当時の鮎川は、相当な河域をひろげていた。

三人の山師は、その河域で、水底にある含金銀石英を発見して、自信を得た。

川沿いに登って行ったが、相川山の密林は、人跡を拒否して、深かった。

渓谷をまっすぐに登ることは不可能であったので、三人は、沢に従って、迂回し、やがて、木立の間に見える断崖に、茶褐色に焼けた一大露頭を、発見した。

岩を攀（よ）じのぼって、辿りついてみると、かれらがいまだ見たこともない立派な金銀鉱が、

そこにあった。

これが、のちに、「父の割戸」と称ばれる地点であって、佐渡の金銀山は、本格的に開発された。

秀吉も、金銀を、大坂城にたくわえることに、大いに努力したが、家康もまた、佐渡はじめ石見、但馬、伊豆などの主要金山を、直領として、金蔵に、小判を積むことに熱中した。

家康が、秀吉の遺孤秀頼を滅ぼしたのは、大坂城内にたくわえてある金銀を、奪う目的であった、といわれる。

大坂城が燃え落ちたのち、家康が、奪った金銀は、荷駄三百頭分であった、という。

諸国の金銀山の生産も増大していた。

「慶長見聞集」によれば――、

『当君の御時代には、諸国に金銀山出来、金銀の運上を、牛車に引きならべ、馬につけならべ、毎日おこたらず。就中佐渡島は、金銀を以って突き立てたる宝の山なり。その金銀を、一箱に十二貫目入れ合せて、百箱を五十駄積みの船に積み、毎年五艘十艘ずつ、よき風波に乗って、佐渡島より越後の湊に着岸す』

と、記されてある。

家康は、呂宋総督と交渉して、鉱山技師を招いて、さらに、金銀の生産を増そうとした。

この交渉は、呂宋総督の提出して来た条件と折合わず、ととのわなかったが、家康が、いかに鉱山の開発に熱意を持っていたかを、示している。

二

佐渡の金銀山が、毎年どれくらいの産額をみせたか――そのことは、徳川幕府によって厳重に秘密にされて、記録としてのこされていない。

推定によれば――。

寛永元年から同七年までの日本全土から掘り出された金は、一年平均百九十二貫余であったが、そのほぼ半分は、佐渡からの産出であったらしい。

とすれば、佐渡は、百貫前後の金を、幕府へ与えていたことになる。

莫大な額である。

慶長元和の頃は、佐渡の金銀だけでも、幕府財政を支えることができた模様である。

それが証拠に、それまでは百姓家五、六軒しかない寒村にすぎなかった相川が、慶長六年をさかいにして、忽ち、人口がふくれあがり、二十年も経たぬうちに、巨きな市街となっている。

元和に入った頃は、鉱山かせぎの者の住居で、上通りの台地は、全く余地がなくなり、あらたにやって来た者たちは、吉野造りという、谷間に大木をさし渡して、その上に小屋を建てて、住んだ。下町も、また羽田以南の泥地を干し、海をうずめて、町家がたちならび、殊に、京町から新五郎町までは、三階造りが多く、雨降りにも、往来の者は、庇の内を通行できた。

佐渡へ佐渡へと、草木もなびく、といっても誇張ではなく、日本全土から、食いつめた者が、流れ渡って、集ったのである。

その繁昌ぶりは、京、江戸をしのぎ、遊女屋は、小六町、上相川柄杓町を合せて三十余軒、一軒に三、四十人を抱えていたので、総数千二百余人をかぞえた、という。

写本「水金廓物語」に伝えられるところによると——。

織田信長の息女松姫が、本能寺の変の後、侍臣侍女らと遁れて熊野に入り、比丘尼となって、清音尼と称えた。その後、諸国を漂泊した果てに、天正十七年、佐渡に渡り、相川山の開発された慶長六年、相川に住みついた。

その庵には、清音尼を慕う女どもが、集い来って、三十七人にもなり、庵がつぎつぎと建て増された。

やがて、生計に苦しんだ比丘尼たちは、相川が繁昌するにつれて、つい、こっそりと、媚を売り、情をひさぐようになった。

まことしやかに伝えられているこの逸話も、相川の繁昌ぶりを語っている。

しかし、佐渡の金銀山の生産は、元和寛永年間を、ピークとして、しだいに、衰微した。

火災、洪水、そして擾乱が相次いだからである。

そして、採掘技術がすこしも進歩しないため、穿子がいたずらに難儀するばかりで、生産は激減してしまった。

慶長六年以来、採掘用具は、依然として、原始的な鑿と鎚であった。

採掘が進むにつれて、坑内の条件が悪化するのはあたりまえのことであったが、それを克

服する技術の進歩はなかった。通気と排水については、なさけない対策しかなかった。

通気に関しては、通気坑道を掘鑿、排水に関しては、すぽん樋、水上輪などの使用、という対策がなされただけである。

したがって、原始的な人力による水替作業をつづけるために、江戸無法者を送りつけて来て、強制苦役に就かせるという、きわめて陰惨な手段がとられた。

もともと、佐渡は、流人の島であった。

その暗い歴史を有った佐渡に、金山水替人足として、無法者や囚人があてられたことは、庶民の印象を、さらに、暗いものにした。

すでに——。

十一代将軍家斉の、文化文政の江戸文化爛熟期を経て、金銀山の経費を極度に削減されたこの天保期に入ると、佐渡の金銀の生産は、最悪の状態に陥ちていた。

皮肉なことに——。

それゆえにこそ、御用金として、佐渡から江戸へ送られて来る金と銀は、幕府にとって、早天の慈雨になっていた。

さて——。

御用金が、江戸へ送られる道中は、宰領の役人が生命を縮める一大事であった。

十年あまり前までは、毎年五、六月、最も良い天候の頃がえらばれ、難船することを第一に警戒したものであった。

いまでは、不逞の輩の襲撃をおそれて、必ずしも、良い天候の頃だけをえらばず、極秘裡に、何月ときめずに、送られるようになっていた。

役人は、山方役から一人、町方役もしくは地方役から一人、計二人がつき添い、万が一、盗難に遭ったり、船が沈没したりすれば切腹しなければならなかった。そのかわり、ぶじに江戸へ送ることができれば、一年間は、江戸で遊ぶことをみとめられていた。

金と銀は、箱詰にされて、厳重に封印された。佐渡奉行所は、この金銀に、その一年間の帳簿（経費はいかほど、採鉱高はどれくらい、といった会計検査兼予算決算書）を添えた。帳簿だけで、馬一駄分あった。

相川から小木まで、越後出雲崎から沿道の町村には、宿役人宛に先触れが出て、伝馬と人足が徴発してあった。

大名の領地では、家老格の士が、この一行を出迎え、見送った。天領では、代官自身が、身をはこんで、無事通過をたしかめた。

泊り泊りの本陣では、厳重に、蔵に入れてその土地の役人と人足が多勢、その周囲を守って、不寝番をつとめた。

蔵のない宿泊所では、人足が、建物のまわりを取りまいて、終夜篝火を焚いて、ものものしく、警戒した。

信州善光寺では、本陣ではなく、善光寺本堂の、開帳以外には開かれぬ如来の扉内で、金銀は、一夜を明した。

今年――。

佐渡から、江戸へ送られる金銀は、純金、正銀、灰吹銀あわせて、三十八箱、五十七頭の馬の背中に、積まれていた。

相川出発が、正月三日。

一行は、陸路小木に出て、まず木崎神社で渡海安全の祈禱をあげ、船手組の本船で島をはなれた。

島をはなれるまでに、七日かかっていた。

大切な金銀をはこぶのであるから、海上でまちがいがあってはならず、良好の日和をえらんだのである。出港して、ちょっと雲が出たとか、風が変った、とみるや、すぐさま漕ぎ戻った。それが五、六回もくりかえされて、本船は、ようやく、七日後に、出帆して、ぶじに、出雲崎に到着していた。

三

その宵――。

古城進八郎と弓香は、上諏訪神社の神宮寺を出て、下諏訪から三里はなれた塩尻峠の麓にある小さな旅籠に移っていた。

奥山の庄吉が、さがしてくれた宿舎であった。

旅籠といっても、耳の遠い老婆と十三、四歳の孫娘が住んでいるだけで、懇意の旅人しか泊めていなかった。

進八郎と弓香が、泊った時、他に客はいなかった。
囲炉裏端で、進八郎と弓香は、夕餉の膳に就いていた。
進八郎は、弓香の細い白い項に目を置いて、
「そなた、子供のことを、思い出さぬか？」
と、訊ねた。
「……」
弓香は、わが子の俤を、まぶたの裏に描いていた矢先だったので、進八郎に、云い当てられて狼狽した。
「逢いたい、という願いが、胸を責めているのではないのか？」
「逢いたくない、と申せば、嘘になります。でも、江戸はもう、わたくしにとって、別の世界になりました。二度と再び、戻ることのない遠方に、はなれてしまいました」
「女は、母親であることを、容易に放棄できぬもの、ときいて居ったが……、そなたは、強いところがあるな」
「貴方が、わたくしを強い女に、して下さいました」
弓香は、微笑してみせた。
「女子は、恋のためなら、子供も家も、すててしまうことができるのだな」
「わたくしの生命も、貴方にさしあげて居ります」
弓香は、想いをこめて、進八郎を見つめた。
その折——。

奥山の庄吉が、戸口に姿を現わした。
「旦那——」
庄吉は上って来ると、
「来ましたぜ」
と、告げた。
「うむ」
「お宝は、神社の宝物殿の中でさ。諏訪因幡守のご家中が五人ご出役、それに人足が三十人、ご一行に加わって、宝物殿のまわりを、不寝番を相勤めて、厳重警戒というあんばいでさ」
「こちらは、たった二人か」
「やり甲斐、生甲斐、これが男の甲斐性というやつでさ」
どうやって、御用金を盗み出すか、その手筈は、すでになされていた。
「では、行こうか」
進八郎は、腰を上げた。
「あの……」
弓香が、必死の眼眸を、すがらせた。
「わたくしに、お手つだいできることがあれば——」
「女手は、不要だ」
進八郎は、わざと冷やかに云いすてた。

弓香は、土間に降りた二人に、頭を下げた。
「吉左右をお待ち申して居ります」
口のうちで、ひくく、云った。

四

このたびの御用金送りの宰領役人は、山方役松崎藤助と地方役水森弥七であった。これに、江戸から出張していた勘定奉行所の与力四人に、同心七人、小者二十二人が、つき添うていた。
松崎と水森は、宝物殿わきに、特別に設けられた小屋で、大火鉢をへだててさしむかっていた。
「あと七日か」
年配の松崎が、云った。
「いや、八日です」
若い水森が、訂正した。
「いずれにしても、しんどい。このお役目は、生命が縮まる」
「松崎さんは、このお役目は、こんどで、幾度目になりますか？」
「四度じゃが……、馴れるということがない」
「しかし、出府すれば、慰労は、大したものだときき及びますが――」

「うむ。今日は芝居、明日はお能、とお招きにあずかる。若年寄様にも、勘定奉行様にも、お目通りを許された。……江戸の有名な絵師の描いた掛物も、頂戴したが、過ぎてしまうと、有難いことと思うが、こうして道中して居ると、やはり、五十の坂を越えてからつとめるお役目ではないのう」
「わたくしは、生れてはじめての大役で、男として生れて来たよろこびをおぼえて居ります」
「そうであろうな。わしも、はじめてつとめた時は、そう――お主より、三つも若かったかな。三日も四日もねむらずとも、平気であった」
松崎は、この大役を終えて佐渡へ帰ったら、隠居願いを出すつもりであった。
伜三人居り、長男は十九歳になっていた。山方役をゆずってもいいのであった。
「お邪魔つかまつる」
禰宜が、朱塗りの酒樽を携げて入って来た。
「夜は、底冷えいたします。一献おくみ下され」
大火鉢の縁に、置いた。
「忝じけのうござる。頂戴つかまつる」
松崎と水森は、なにも疑わずに、礼を云った。
禰宜は、二言三言交してから、すぐに小屋を出た。奥山の庄吉が、化けた禰宜であった。
勘定奉行所の与力や同心は、神官の屋敷にいたが、これは、諏訪家からの使者と称して、進八郎が、ねぎらい酒を持って行っていた。

庄吉は、小屋を出るやいなや、身ごなし軽く、その屋根へとび、そこから老杉（ろうさん）の幹にとりついて、するするとのぼって行った。

その老杉と宝物殿の間は、二間余りの空間があった。

宝物殿の周囲には、篝火があかあかと燃えあがっていた。

篝火で暖をとっているのは、諏訪家から出張している役人と、佐渡からやって来た人足半数であった。

雪片が、ちらちらと舞い落ちて来ていた。

「寒い！」

篝火だけでは、どうにもならず、しきりに足踏みしたり、双手をおのが胸に打ちつけたりし乍ら、はやく交替の時間が来ないものか、と思っている。

空を仰ぐ者など一人もいなかった。

老杉の梢から、一条の細引が投げられ、その尖端の鈎が、宝物殿の屋根の大棟の鯱（しゃち）にひっかかったが、誰も気づかなかった。

庄吉は、すばやく、その細引をつたって、屋根へ、移った。

細引は、二条（ふたすじ）にされた。

その時、もうひとつの黒影が、老杉の幹をするすると、のぼって行った。

やがて、老杉の梢から、幾箇かの荷が、屋根へ送られた。

それは、庄吉が用意した鉄の塊（かたまり）であった。三日前に、その梢へ、吊りあげて、かくしておいたのである。

雪片は、にわかに激しく舞いはじめた。進八郎と庄吉の仕事に荷担するかのように——。

庄吉の次の仕事は、鉄の塊と金銀を、入れかえることであった。

屋根は、すでに、破ってあり、殿内へ忍び降りるしかけもつくってあったのである。

第三十一話　氷　湖

一

夜がしらじらと明けた頃合——。

弓香は、そっと、旅籠を出た。

ほとんど昨夜は、一睡もしていなかった。

進八郎も庄吉も、ついに、帰っては来なかった。

弓香は、旅籠の老婆に、この塩尻にある阿礼神社は、武運長久を祈る生土神ときいて、祈願をこめることにしたのであった。

地も空も、すべてが凍てついている寒気のきびしい静寂が、弓香の歩む道を占めていた。

鳥居をくぐった弓香は、さして広くない境内に、すでに、三、四人の参詣人がいるのをみとめた。

拝殿の前にぬかずいて、長い祈願をこめた。

手足が感覚のなくなる冷たさに、われにかえって、立ち上って、ひきかえそうとした折であった。

浪人ていの男が一人、石燈籠わきに佇立して、じっと、こちらを視ていた。

黒羽二重も袴も、色あせて、いかにも旅塵によごれはてているようであった。

朱鞘の大小を落し差して、ふところ手であった。無精髭をはやし、頭髪もぼさぼさであった。

弓香が、顔を伏せて、足どりを早いものにしようとすると、

「卒爾乍ら——」

浪人者が、声をかけて来た。

「はい。……なにか——？」

「貴女を、大和田甚内殿のご家内と、お見受けした」

弓香は、ぎょっとなって、全身をかたくした。

浪人者は、ゆっくりと近づいて来た。

「べつに、拙者は、貴女をつれ戻しに来たのでも、古城進八郎を討ち果しに、あとを追って来た者でもない。……行きずりの素浪人と受けとって頂いてよい。荒木元七郎と申す」

「……」

「路銀が尽きたため、この神社の拝殿に、宿を借りたのです。……拙者は、貴女を、娘時代にお見かけして居る。その頃、拙者も、小普請組であった」

「あの……、いそぎますゆえ、これにて、失礼を——」

「拙者は、古城進八郎とも、顔見知りゆえ、逢いたいものです。ご案内ねがえまいか？」

「進八郎様は、用向きのため、昨日より、他出されて居ります」
「昨日から……？」
荒木元七郎は、眉宇をひそめた。
「それは、まことですな？」
「はい」
「どこへおもむいたか、ご存じですか？」
「いえ――、存じませぬ」
「留守ならば、やむを得ぬ」
荒木元七郎は、一揖して、弓香からはなれた。
その後姿を見送って、弓香は、にわかに、不安をおぼえた。
いくたびかの危難をくぐって来た弓香の神経は、研ぎすまされていた。
荒木元七郎が、只者ではないことは、直感できた。その眼光は、こちらを刺す異常な鋭さであった。
ただ、偶然、出会った、とは考えられなかった。荒木元七郎は、ずうっと、進八郎と自分を尾けまわし、旅籠を見はっていたような気がした。
この神社へ、自分が参詣するのを、尾けて来たに相違ない。
――敵！
その予感は、まちがいなさそうであった。
――どうしよう？

弓香は、激しい焦躁にかられた。
どうしてよいか、判らなかった。
――進八郎様を討ち果しに来たのではない、とことわったが、わざわざことわったことが怪しい。
討手とみなした方が、正しいように思われた。

二

荒木元七郎という男が、まっすぐに入って行ったのは、上諏訪神社であった。
いったん、宝物殿の前に行き、明けがた交替した諏訪家の役人が、篝火をさかんに燃やしているのへ、一瞥をくれておいて、宝物殿を眺めた。
「お主、何者だ？」
役人の一人が、咎めたが、元七郎は、返辞もせずに、宰領役人のいる小屋へ、歩み寄った。
松崎藤助と水森弥七は、こんこんとねむりこけていた。
元七郎は、二人の寝顔を、見下して、即座に、
「やられたな」
と、判定した。
顔を蹴られて、松崎と水森は、ようやく、目を覚して、ぼんやりと、元七郎を仰いだ。
「お主らに、毒をのませたのは、何者だ？」

元七郎は、平常の口調で、訊ねた。
「毒?!」
二人は、愕然として、顔を見合せた。
「前後不覚にねむりこけていた様子は、ねむり薬をのまされたことが、あきらかだ。……そうか、そこにある酒樽に、混ぜられていたのだな。大方、禰宜に化けたのが、まことしやかな態度で、持参したのだろう」
「お、お手前は、誰人でござろうか?」
「何者でもよい。……ただちに、御用金を調べることだな」
松崎と水森は、大あわてで、宝物殿に駆け込んだ。
純金、正銀、灰吹銀——三十八箱は、整然と、三つの台にならべられてあった。
二人は、純金の箱に、寄った。
べつに開かれた形跡はない。
「あの男、いったい、どこの者か? ご公儀の隠密らしゅうもないが……」
松崎は、厳重に封をされた箱の蓋をひらくのをためらった。
「ともかく、与力殿へ、一応、お報せしてからにしては、如何ですか」
水森が、すすめた。
松崎と水森は、宝物殿を出て、神官の座敷へ、いそいで、行った。
荒木元七郎は、四人の与力の前に、端座していた。
「べつに、異状をみとめませぬが……」

松崎が、報告すると、元七郎は、
「中をしらべたのか?」
と、訊ねた。
「いや、それは……」
「蓋もひらかずに、異状がないとは?」
「封印を剝がした形跡もありませぬゆえ——」
元七郎は、すっと、立つと、与力たちに、
「貴殿らに、調べて頂こう」
と、促した。
荒木元七郎は、実は、公儀目付であった。
公儀目付とは、若年寄の耳目となって、旗本以下の幕臣を監察する。
その日常の職務は、きわめて広範囲にわたっていた。規則、礼式の監察から、諸士への布令、用部屋からまわされて来る願書、伺書、建議書などに目を通して意見具申をするなど。
また、殿中の巡視、評定所への列席もゆるされていたし、さらに、火事があれば現場に馳せつけて、消防諸役の活動ぶりを監視する、といった八面六臂の行動ぶりであった。
定員は、この当時は、十人を原則として、分掌と当番を定め、下僚の徒目付、小人目付、徒押えなどを使っていた。
目付同士は、非常に仲のわるいもので、互いに監察しあい、事あれば、同役を蹴落すという凄じい争いを演じていた。

荒木元七郎は、数年前から設けられた、定員外の隠密目付であった。隠密目付は、各若年寄に直属していた。普通の目付が表側から監察するなら、隠密目付は、裏側から監察していた。

勘定奉行所の与力たちにとっては、最もおそろしい存在であった。

四人の与力は、宝物殿に、駆けつけた。

十二箱の純金箱の蓋が、開かれた。

与力たちの顔色が、一変した。

十二箱のうち、八箱が、鉄の塊にすりかわっていたのである。

「やはり、そうであったか」

いつの間にか、荒木元七郎が、入って来ていて、冷たい声音で、云った。

「昨夜のうちに、まんまと、すりかえられたことだ」

「昨夜のうちに？」

松崎と水森は、生きた心地もない様子であった。

与力や同心たちも、ただ、胸を動悸うたせるばかりで、元七郎の指示を待つばかりであった。

元七郎は、

「盗賊は、多勢ではないことが、明白であるゆえ、さほど、遠くまで、遁げのびては居るまい。遁走路は三筋——甲州街道を往ったか、それとも中仙道を往ったか。あるいは、塩尻峠を越えて、木曾をめざしたか。いずれかに相違ない。三手に分れて、追跡して頂こう」

と、云った。

「もしくは、当地のどこかに、一時、隠匿したかとも、考えられませぬか？」

年配の同心が、問うた。

「いや、それは、考えられぬ。盗賊は、この土地の者ではないからだ」

すでに盗賊が何者か、見当をつけている元七郎の口ぶりであった。

直ちに、追手が、三手にわかれて、奔った。

元七郎は、諏訪家の目付を呼んだ。

甲州街道、中仙道、木曾街道以外に、盗賊がひそかに、金をはこび得る間道があるかどうか、訊ねた。

目付は、かぶりを振り、

「ごらんの通り、塩尻峠、和田峠を越えるのが、やっとでござる。杣道を抜けることなど、全くの不可能でござる。前方は、須波乃湖でござるし……」

と、云いかけた。

とたん——。

元七郎が、

「そうか、湖の氷上を遁走する手があるな」

と、鋭い表情になった。

三

元七郎の直感は、的中していた。

進八郎と庄吉は、湖の上を渡っていた。

氷をすべるためにつくられた小舟に乗って、鉤つきの棹で突きながら、かなりの速度を出していた。

「旦那――、もう心配は、ござんせんや」

舳先で、棹を突いていた庄吉が、額の汗を豆しぼりで拭って、

「あっしのカンじゃ、敵はまだ、箱の中が鉄の塊にすりかわっているのに、気がついちゃいませんぜ」

と、云った。

「そう思うか」

「へえ、おそらく……。細工はりゅうりゅう、しあげをご覧じろ、ってえやつだ。こんなに、うまくゆくとは全く、こっちの方が、信じられねえくらいでさあ。こうなりゃ、純金全部頂戴して来りゃ、よかったねえ、欲が出ますぜ」

「これだけ掠奪すれば、上々だ」

「ところで、旦那、一行が、すりかえられたと知らずに、諏訪を発足すりゃ、しめたものですが、宝物殿から、はこび出す際、重さがちがっているのに気がついて、露見した時には、

もう、旦那もあっしも、諏訪へはひきかえすことはできませんぜ。諏訪家の家中総動員で、怪しい奴を、片っぱしから、ひっとらえるという事態になりますからね」

「うむ――」

「で……、弓香様のお身の上のことですがね、旅籠をお出になる際、こん後どうするか、打合せをなすったので？」

「いや、しなかったな」

進八郎は、こたえた。

「それァまずいや。この黄金を、むこう岸のどこかにかくしておいて、弓香様を、迎えに行く、という気持でいなさるのなら、お止しなすった方がいい。剣呑この上なしだ」

「しかし、すてておくわけには参らぬ」

「手ぬかりでござんしたねえ。弓香様を、お一人で、木曾のどこかへ、行かせなすったらよかったんだ」

「吉左右を待つ、と申して、旅籠を動かなかったのだ」

「女に甘くできていなさる」

庄吉は、ずけずけと云った。

「やむを得ぬ。わしは、迎えに行って来る」

「いえ、それは、まずい。あっしが、今夜のうちに、こっそり、迎えに行って来まさ」

そう云った時、庄吉の視線が、発って来た岸辺へ放たれた。

「旦那！」

「なんだ？」
「ごらんなせえ」
進八郎は、ふりかえってみた。
「氷舟が、七、八隻、こっちめがけて、走って参りやす。……もしかしたら、追手かも知れませんぜ」
「急げ！」
進八郎と庄吉は、必死になって、氷面を棹で突いて、小舟を滑走させて行った。

四

その夜、かなり更けてから——。
弓香は、ねむれないままに、目蓋を閉じて、牀にやすんでいた。
ふと、部屋に、人の気配があるような気がしたが、錯覚であろう、と思いかえした。
錯覚ではなかった。
不意に、燧石が鳴らされて有明行燈に、ぼうっと、あかりが滲んで、闇にひろがった。
弓香は、はっとなって、掛具を顔までひきあげた。
行燈のかたわらにいる黒い影に、恐怖の眼眸をあてた弓香は、
——あ！　やっぱり！
と、合点した。

それは、今朝がた、阿礼神社の境内で出合った荒木元七郎と名のる浪人者であった。
「貴女の愛する御仁は、もう、この旅籠には戻って参るまい」
元七郎は、云った。
「……」
「信用されぬ顔つきだが、ご尤も——。しかし、まちがいなく、古城進八郎は、ここへは、戻って参らぬ」
「……」
「佐渡御用金を盗んで、何処かへ遁走したのだから、のこのこと、貴女を迎えに来るはずがない」
——露見したのだ！
弓香は、絶望感で、気が遠くなりそうであった。
「もう、いま頃は、捕えられたか、斬り死したか……」
そう云い乍ら、元七郎は、寝牀へ寄って来た。
弓香は、四肢を、木か石のようにかたいものにした。
「ふびんだが、貴女は、たった一人、とりのこされた。……そこでだ」
元七郎は、いきなり、掛具へ手をかけると、ぱっと、ひきめくった。
はね起きようとした弓香は、むずと、膝の上を鷲づかみにされた。
「な、なにをなさる！」
「わがものにする」

元七郎は、冷然として、こたえた。
「没義道な！」
「没義道を承知で、わがものにする。あきらめることだ。救い手は、あらわれぬ」
弓香は、抵抗するいとまもなく、寝衣をむすんだしごきを奪われ、あっという間に、後手に縛られた。
そうしておいて、荒木元七郎は、ひとやすみした。
「良人と子供をすてたむくいだな。男から男へ、転々と、受け渡されてゆく運命にあるらしい」
「……」
弓香は、喘ぎ乍ら、
——死んでも、こんな悪党に犯されはせぬ！
と、胸のうちで叫んだ。
しかし、いかに必死に祈り、誓ってみても、その暴力を拒否するてだてはないようであった。
元七郎の片方の掌が、裾をもぐって、脛から膝へ、膝から太腿へ、ゆっくりと、すべり込んで来た。
「いやっ！」
弓香は、絶叫して、身をねじったが、かえって、寝衣と腰巻の裾をみだれさせる結果をまねいた。

元七郎の五指が、ついに、秘部の黒い茂みにふれた。
その刹那であった。
障子がひき開けられて、
「野郎っ！　なにをしやがる！」
と、庄吉が、匕首をひらめかして、元七郎に、躍りかかって来た。
苦もなくかわしざまに、その匕首を叩きおとした元七郎は、にやりとすると、
「待っていたぞ。盗賊の片われは、お前か」
と、あびせた。
庄吉は、
——しまった！
と、ほぞを噛んだ。
元七郎が、弓香を犯そうと、みせかけたのは、廊下に忍ぶ庄吉に、躍り込ませる手だったのである。
「古城進八郎は、どこだ？……お前が、この女を迎えに来たのだろう。古城は、どこで、待って居る？」
庄吉は、弓香を見すてて、廊下へとび出そうとした。
一瞬、背中へ、鋭い刃音とともに、峰撃ちが来た。
庄吉が、意識をとりもどした時、高小手に縛りあげられていた。
「さあ、古城は、どこにひそんで居る？　白状せぬか」

元七郎は、迫った。
口が裂けても教えるものか、と庄吉は、睨みかえした。
すると、元七郎は、にやにやして、
「お前が泥を吐かぬと、こんどは、本当に、この女を弄ぶぞ！　それでもよいか！」
云いざま、裾へ手をかけて、ぱあっと、ひき捲くった。
弓香が、悲鳴をあげて、身を二つに折ろうとした。
元七郎は、そうはさせずに、突き倒しておいて、足くびを摑むと、
「どうだ。他人の女の股ぐらを、とくとおがませてくれようか」
と、云いはなった。

第三十二話　わが生命

一

奥山の庄吉は、図太かった。
「弓香様。しかたがねえ、この期に及んでじたばたしても、はじまらねえ。この野郎の思うがままに、おなりなせえまし。それ以外に、古城の旦那を、救うことはできねえんだ。……おい、隠密野郎。勝手に、そのご婦人を、手ごめにしやがれ！」
庄吉は、居直った。
「度胸があるの、奥山の庄吉」
「ちえっ！　こっちの名まで、調べあげてやがる」
「蛇の道は、蛇でな」
荒木元七郎は、弓香からすっとはなれると、庄吉に近づいて、縛った細引を、脇差で切断した。
「どうしようってえんだ？」

「古城進八郎に会いたい。ここで、待っている、と伝えろ」
「古城の旦那は、金輪際、ここへは、来ねえ！」
「この女人に、惚れているのだろう。よもや、見すてはすまい」
「弓香様には、お気の毒だが、ここは、ひとつ、覚悟をして頂きてえ」
「はい！」
弓香は、けなげに、うなずいた。
元七郎は、うすら笑い乍ら、
「お前は、古城進八郎に伝えればよいのだ。あの男は、必ず、ここへやって来る！」
「来ねえ！　来るもんけえ！」
庄吉は、喚いた。
「公儀隠密目付荒木元七郎が、待って居るのだ。天保倭寇党の企ては、すべて、露見いたして居る、と伝えるがよい」
元七郎は、云った。
庄吉は、いまいましげに、元七郎を睨みかえしていたが、
「弓香様！　たとえ、古城の旦那が、おいでにならずとも、恨んだりはなさらねえでしょうね？」
「はい、決して、恨みには思いませぬ」
弓香は、こたえた。
庄吉は、出て行った。

元七郎は、あらためて、弓香を視やった。
「不幸な女人だな、そなた――」
「……」
「大和田甚内というやくざ旗本の女房になったのが、そもそも、まちがいだったが……、女房として、良人の犯した罪をあばいたのは、まずかったな」
「……」
「大和田は、そなたに惚れていたのであろうし、子も可愛かったに相違ない。家も大事であったと思われる。古城進八郎が、せっかく、罪をひっかぶってくれたのだ。女房であるそなたが、さわぎたてることはなかったのではあるまいか」
「わたくしは、良人が卑劣漢であることには、堪えられませんでした」
「で――その結果は、どうであったか」
「……」
「そなたは、良人の大和田甚内が、組支配によって、詰腹を切らされたのを、まだ、知って居るまい」
「ええっ！」
弓香は、愕然と、目をみはった。
「そなたが、古城進八郎にともなわれて、江戸を出奔してから、二日ばかり後に、大和田は、自裁して相果てた。……そして、妻のそなたは、いま、このていたらくだ」
「……」

「そなたさえ、じっと我慢して居れば、すくなくとも、大和田家は、いま頃、平穏無事であったはずだ、そうではないか？」

「……」

弓香は、泪も出ぬうつろな表情になっていた。

――庄太郎は、どうなったであろう？

わが子の身の上のことだけが、脳裡の不安となっていた。

「女、小ざかしゅうして、牛を売りそこなう、というが、聡明という評判のそなたも、正義をふりかざして、さわぎまわったために、大和田家を滅してしまった。……古城進八郎に抱かれて、恋の炎に焼かれているあいだに、良人は、切腹し、子供は、どこかの寺へ遣られて、小坊主にされてしまった」

「ああっ！」

弓香は、その場に俯伏して、慟哭した。

元七郎は、冷然として、見下していた。

障子戸が開かれたのは、それからほどなくのことであった。

進八郎が、姿を現わした。

二

「やはり、お主は、参るであろう、と思っていた」

元七郎は、うすら笑って、云った。

「その女子のいましめを、といてもらおう」

進八郎は、懐中から、短銃をとり出して、元七郎へ、つきつけた。

「あわてぬことだな。……談合するために、待っていたのだ」

元七郎は、進八郎を見据えて、

「お主は、若年寄遠藤但馬守様の特別のおとりはからいによって、吟味無用の身になって居った。……知らなかったな？」

と、云った。

「――む！」

「但馬守様は、すでに、お主を首謀者として、小普請組の面々が、天保倭寇党なる徒党を組み、ご公儀御用船を奪って、これを八幡船にしたてて、異国へ押し渡ろう、という企てを為していることを、ご存じであった」

「……」

「しかし、確証はないままに、但馬守様は、隠密目付であるそれがしに、探索方を依頼された。……それがしが、調べてみると、まちがいなく、旗本の青年どもは、その企てに、夢中になって居った」

荒木元七郎は、井部鉄之助に近づいて、吉原の廓へ案内させた西国の小藩の勤番ざむらい五十嵐征十郎と、同一人であった。

いかにも、野暮な「浅黄裏」とみせかけて、井部鉄之助に、のそのそと、吉原までついて

行き、そこで、生きた骸骨となっている遊女を見つけて、ひと騒動を起し、鉄之助を安心させておいて、倭寇党のことを、きき出したのであった。

元七郎は、そのことを、進八郎に語って、

「長崎から帰って来たお主は、ただいたずらに、府内をさわがせただけであった。その結果、お主自身は、江戸を追われた。しかし、なお、野心をすてきれずに、佐渡御用金を、盗んだ。たかが、二、三万両を手に入れたところで、どうして、八幡船の再興が成るものであろうか。……お主の思慮には、足らぬものがある。そのことに、お主は、気づいて居るのか、居らぬのか――」

「説法は、それぐらいにしてもらおう。……わしは、女を受けとりにやって来たのだ」

進八郎は、云った。

「御用金と、ひきかえに、渡そう」

「これが、見えぬのか！」

進八郎は、すっと、短銃を、さしのべて、元七郎の胸を狙いつけた。

「それがしを、撃ったところで、なんの利にもならぬ。……すでに、この旅籠は、二重三重に、二百余人が、包囲して居る」

「……」

進八郎は、眦を裂いて、隠密目付を、睨みつけた。

「古城進八郎氏――。考えることだな。無駄な抵抗をして、女もろとも、ここで、死んでしまうか。それとも、御用金を返して、女とともに、落ちのびて行くか」

「御用金を返しても、お主は、われわれを生かしてはおくまい」

「お主も直参ならば、それがしも直参だ。……旗本として、約束を守る。御用金を返してくれるならば、このたびの罪は、問わぬ」

元七郎は、はっきりと云った。

「信じられぬ！」

「信じるか信じないか、それは、お主の胸三寸で、きめることだ。こちらは、待って居る」

「……」

「最も明白なのは、お主は、いま、それがしの一命を奪うことができる、ということだ。こちらは、お主に一命をあずけて、談合して居るのだ」

「……」

「お主は、吟味無用の身となって居ることを、考えるがよい。……そうして、このたびのことは、なかったことにいたそうと、隠密目付たるこの荒木元七郎が、約束して居るのだ」

「……」

「それがしの申し入れることは、おわった。いまから、十かぞえる。その間に、決意してもらおう。それがしを撃つか、それとも、御用金を返すか――いずれかだ」

そう云いおわると、荒木元七郎は、目蓋を閉じた。

三

一刻後——。

進八郎は、弓香と二人だけになっていた。荒木元七郎は、進八郎から、御用金の隠匿場所をきき、人をはしらせて、それがまちがいなくそこに在ったのをたしかめさせると、しずかに立ち去ったのであった。

進八郎と弓香のあいだには、重い沈黙が占めていた。

旅籠の孫娘が、おそるおそる食膳を、はこんで来た。

進八郎も弓香も、箸を把ろうとしなかった。

不意に——、

弓香は、両手をつかえて、

「申しわけありませぬ。わたくしが、ここに居りましたばかりに、斯様のしまつに相成り……」

と、詫びた。

「よい」

進八郎は、手を振った。

「わしは、いま、金よりも、そなたの方が、大切であることを、考えていたのだ」

「え?!」

弓香は、進八郎を仰いだ。

「あの隠密目付が申した通り、わしの思慮は、浅かった。企てには、抜けたところがあった。……すなわち、わしという男は、大きな企てを為す徒党の頭領としての器ではないのだ。そなたと、どこかで、ほそぼそと、くらす——それだけの能力しかない男なのだ」

「い、いえ！」

弓香は、かぶりを振ったものの、なんと云っていいか、わからなかった。

ようやく、午食を摂り了えてから、二人は、旅籠を出た。

西へ——。

あてもなく、塩尻峠を越えて、中仙道を辿って行くよりほかはなかった。

洗馬を過ぎて、本山の入口まで来た時であった。

本山観音堂（信州巡礼所二十一番）の前に架けられた長い橋の上に、いつの間にか、さきに来ていた奥山の庄吉の姿が、あった。

進八郎と弓香を迎えた庄吉の面貌には、険しい色があった。

「旦那——」

行手をふさぐように、立ちはだかって、

「旦那を、見そこないましたぜ」

と、云った。

「すまぬ」

「すまぬじゃ、すまされませんや。あっしゃ、一生一代のはなれ業をやってのけたんでさ。

しかも、これは、あっしの思いついた計略じゃなかったんだ。吉五郎から、旦那が、御用金を横奪りする、という肚を持っていなさる、ときいて居ったから、あっしゃ、双肌脱いだんだ。そうして、見ン事、御用金を、こっちに頂戴した。ところが、どうだ、旦那は、このご婦人に惚れていたばかりに、あの隠密野郎に、やすやすと、返してしまいなすった」

「……」

「あっしゃね、旦那、この弓香様に、旦那のために死んでおくんなさい、と因果をふくめたんですぜ。それだのに、旦那は、惚れた弱さで、のこのこと、旅籠へ行きなすった。あっしが、かくした御用金のそばに行っている隙に――」

「……」

「旦那が、来なさるのを、待っていると、どうだ、旦那の代りに、四、五十人のさむれえが、押しかけて来やがった。あっしゃ、物蔭で、息をひそめて、御用金が、掘り出されて、はこび去られるのを、はらわたがちぎれる思いで、見送ったんだ。……旦那！　あっしの無念が、おわかりですかい。生れてはじめて、あっしは、この血が逆流しましたぜ」

「……」

「あっしゃ、旦那を、憎んだ。さげすんだ。たった女子一人に血迷ったために、このざまだ。なにが、天保倭寇党だ！　なにが、八幡船再興だ！　わらわせる。……旦那なんざ、江戸の隅っこで、この女子衆の尻やら胸やらをなでまわしているのが、分相応だ、というものですぜ」

庄吉は、あまりのくやしさに、われを忘れて、毒吐いた。

進八郎は、黙然として、佇立しているばかりであった。

庄吉の罵詈は、いちいち、胸にこたえた。

――その通りだ。おれは、骨なしの臆病者だ。天保倭寇党を組むなど、おこがましい小人でしかなかったのだ。

進八郎は、庄吉が、ののしって気がすむなら、いくらでもののしってくれ、と思った。

突如――。

庄吉が、口をつぐんだ。

視線をあげた進八郎は、あっとなった。

庄吉の胸に、ふかぶかと、小柄が突き刺さっていた。

「庄吉！」

馳せよった進八郎は、欄干にもたれかかって、ずるずると崩れ込もうとする庄吉を、支えた。

「庄吉！　しっかりしろ！」

庄吉は、苦痛を怺えて、進八郎を、視た。

「こ、このざまは……、旦那のせいだ」

ひくく、呟いた。

四

進八郎は、事切れた庄吉を、橋上に横たえると、橋袂に立つ、小柄を打った者を、睨んだ。
荒木元七郎が、そこにいた。
「約束がちがうぞ！」
進八郎は、憤怒の色を顔面にみなぎらせて、懐中から、短銃を抜き出した。
元七郎は、冷然として、
「その小盗人まで、助命すると、約束はして居らぬ」
と、こたえた。
「わしの仲間だ。むざと殺されるがままに、ひきさがるわけにいかぬ！」
進八郎は、元七郎めがけて、引金をひいた。
弾丸（たま）は、元七郎の耳もとを掠めた。
「止さぬか、古城――」
はじめて、元七郎の双眼が、光った。
しかし、進八郎は、狙いさだめてもう一発、放った。
元七郎は、ぱっと身を沈めた。
次の瞬間――。
元七郎の手には、白刃が抜き持たれていた。

「やむを得ぬ！　斬る！」
隠密目付は、語気鋭く、云いはなった。
「斬ってみろ！」
進八郎は、じりじりと迫った。
短銃には、なお、三発の弾丸が、のこっていた。
元七郎は、進八郎に、その三発をすべて撃たせておいて、襲うべく、すこしずつ、後退し乍ら、
「犬死を、いそぐのう」
と、あざけった。
進八郎は、つづけさまに、二発を放った。
一発は、元七郎のわきの滝大神の鳥居に当り、もう一発は、元七郎の袖を縫った。
「あと一発だな」
元七郎は、にやりとした。
「必ず仕止める！」
「剣には、自信がないようだな。お主は、やはり、ここで、犬死をすることになる」
「横死は、そっちではないのか」
進八郎は、急に、距離をせばめた。
最後の一発が、はずれれば、隠密目付から、まっ二つに斬り下げられることを覚悟しなければならなかった。

進八郎は、敢えて、生死の一瞬をえらんで、突き進んだ。
元七郎は、鳥居を楯にして、退った。
進八郎が、まわれば、元七郎も、まわった。
進八郎と鳥居と元七郎は、直線でむすばれるかたちになり、短銃の引金は、容易に引かれそうもなかった。
進八郎が、右へまわれば、元七郎も右へまわり、進八郎が、左へまわれば、元七郎もまた、左へまわった。
鳥居が、あくまで、進八郎の邪魔をした。
進八郎は、軽率に、四発を撃ってしまったことを悔いた。
数発が残っていれば、これほど、苛立つことはないのだ。
元七郎の方は、充分の余裕を、その表情に示して、最後の一発の放たれるのを、待ちかまえている。
と——。
この決闘に、固唾をのんでいた通行人たちが、突然、どっと、叫びをあげた。
「女子が、橋から、とんだ！」
その声をきいた進八郎は、跳び退って、橋へ奔った。
「弓香！」
はるかな下の渓流に落ちた弓香の、無惨な姿が、ゆっくりと、流れにしたがって、岩と岩のあいだを、ただようていた。

「弓香！　なぜ、投身などを！」
進八郎は、気が狂いそうな衝撃で、喘いだ。
「お主をたすけたかったのだ」
遠くで、荒木元七郎の声が、ひびいた。
「わしを、たすけたいあまりに、か——」
進八郎は、かぶりを振った。
「ばかな！　こんな、ばかげたことがあるか！」
進八郎は、弓香の遺体を見下し乍ら、叫んだ。
「こんなばかげたことがあるかっ！」

第三十三話　生命を売る男

一

「生命、売り申し候」

ひろげた大黒傘に、筆太に、そう記してあった。

そのうしろに、地面に、色あせた緋毛氈を敷いて、端座しているのは、まだ二十七、八の男であった。

尾羽打ち枯らした浪人者ではなかった。月代もきれいに剃りあげ、黒羽二重をつけ、袴を着した——これは、れっきとした旗本御家人なのであった。

浅草伝法院の裏門の前であった。

雷門をくぐって、浅草寺に参詣する、織るような群衆は、当然、その姿を眺めることになる。

「どういうんだ、あれァ？」

「どういうんだって、おめえ、ああ、いうのよ。旗本だって、おめえ、いろいろ、事情があらァな」

「なにも、素浪人じゃあるめえし、生命まで売ることはねえやな」

「女は操を売り、さむれえは腕前を売り、おめえは、魔羅を売ってらァ——。世間いろいろ、売るものがあらァ」

「なにおっ！」

「とぼけたって、知っているぞ。てめえ、伊勢屋の後家をたらし込んで、毎晩、ひいひい、のたうたせてやがるだろ。たしかにおめえの陽物は、立派だからのう。弓削道鏡か、梶山季之か——てえぐれえのものだから、売りものにならァ」

「置きやがれ。おれは、伊勢屋の後家から、金なんぞ、取ってちゃいねえぞ」

「とぎい東西、天知る地知る魔羅が知る。いまさら、かくしたってはじまるめえ。……ところで、伊勢屋の後家のあれは、どうんなあんばいだ？」

「へへへ……、思う壺やき栄螺の貝の、ひとつところへ身はひとつ、だあ」

がやがや、わやわや、とざわめき乍ら、なんとなく、遠まきに蝟集して、生命を売る御家人を、眺めていた。

御家人は、びりとも眉目を動かさず、無表情で、端座をつづけている。

狩野弥太郎は、吉原からの朝帰りで、仲通りをぶらぶら行き過ぎがてに、ふと、その光景に、目をとめた。

顔見知りであった。

平山行蔵の「平原草廬」で、三年あまり前まで、異常な天稟を発揮した道明寺八郎が、こ

の男であった。

平山道場にかよう足を、ぷっつり断ってからは、同門の連中は、誰も、道明寺八郎の姿を見かけた者はなかった。

消息がなくなって、しぜん、忘れられていた存在であった。

しかし——。

狩野弥太郎は、この男のおそるべき業前を、忘れてはいなかった。

道明寺八郎は、生れつき、右腕が萎えていて、左腕一本で、稽古をしていた。

しかも、木剣を杖にして持ち、目にもとまらぬはねあげの迅業をつかった。

たいていの者は、その一閃に、木剣をはじきとばされたものであった。弥太郎も、一度、立ち合って、木剣を握った双手が、じいんとしびれたのを、おぼえている。

弥太郎は、大黒傘の前に、近づいて、

「道明寺、これは、どうしたのだ?」

と、問いかけた。

「どうもせぬ」

道明寺八郎は、抑揚のない、ひくい声音で、こたえた。顔面に血の気はなく、痩せていた。

「どうもせぬ、といって、生命を売る、とは只事ではない」

「ほかに売るものがないからだ」

「少々の持ち合せならあるが……」

「お主に、合力はせぬ。……乞食にまで堕ちては居らぬ」

「どうも、解せぬ」

「すてておいてくれ」

道明寺八郎は、うるさそうに、云いすてた。

狩野弥太郎は、やむなく、そこをはなれた。

広小路に出て、ふと思いついて、茶屋町に入った。

「南蛮屋」

その屋号をかかげた唐物屋が、そこにあった。主人は、唐兵衛と名のる、ちょっと得体の知れぬ五十前後の男であった。

弥太郎が知りあったのは、つい一年ばかり前であるが、太っ腹な男で、雷門の朱を塗りかえたり、大提燈を寄進したり、年の暮になると、浅草一円の貧しい子供たちに、のこらず、凧を配ったりしていた。

前身は、どんなことをやっていたのか、誰も知らなかった。

——どうやら、日本人ではないらしい。

彫の深い風貌から、そういう噂があった。

「ごめん——」

弥太郎は、しんとしずまりかえった店に入って、案内を乞うた。

二

若い女が、出て来た。

これは、無類の美人であった。これほど、完璧に整った、肌のきれいな女は、辰巳芸妓にも、いない。

しぐれという変った名を持っていた。弥太郎は、唐兵衛の妾だ、と思っている。

「いるか？」

「はい。……どうぞ、お上り下さいまし」

唐兵衛の居間は、洋間になっていた。卓子も椅子も、調度すべて、そして、置いてある物は、のこらず、南蛮品であった。

オランダ時計が、秒を刻む音をたてている。

唐兵衛は、九官鳥を、肩にとまらせて、人語を教えていた。

「去年の秋から、お見限りですな」

唐兵衛は、弥太郎を迎えて、笑い乍ら、

「今日は、なんの気まぐれで、おみえになりましたな？」

と、訊ねた。

弥太郎は、この得体の知れぬ商人に、ものをたのんだことは、一度もなかった。

唐兵衛の方が、弥太郎を気に入って、時折、珍しい品を届けてくれるのであった。

弥太郎の部屋には、西洋の剣が、幾振りかあった。唐兵衛の贈りものであった。

「ひとつ、たのまれて欲しい」

「なんです？」

「生命を売りたい、という御家人が居る。わたしと道場で同門であった」

その男が、伝法院の裏門の前で、大黒傘にそう記して、坐っている、と弥太郎は、語った。

唐兵衛は、すぐに番頭を呼んで、

「買って来い」

と、命じた。

「いくらで？」

「いくらでもいい。云い値で買って来い」

番頭は、急いで出て行った。

小半刻も経たず、番頭は、戻って来て、

「あちらの部屋に――」

と、示した。

「いくらだ、と云われたな？」

「百両だそうで……」

「ふむ」

唐兵衛は、弥太郎を視て、刀をかまえるまねをしてみせ、

「強うがすか？」

と、訊ねた。
「すくなくとも、わたしよりは――」
唐兵衛は、出て行った。
ほどなく、居間へひきかえして来た唐兵衛は、かぶりを振って、
「旦那、あの御仁は、どうやら、ただのからだじゃありませんね」
と、云った。
「わずらっているのか？」
「病気――じゃなくて、妙なものに、中毒なすっておいでらしい」
「中毒？」
「津軽ですな」
「津軽？」
なんの意味か、弥太郎には、判らなかった。
「津軽とは？」
「つまり、阿片ですな」
阿片が、津軽と称されたのは、古く奥州の津軽で栽培されていたので、その陰語ができた。
つい近年、大坂の道修町の薬店でも、栽培して、こっそり売っている、という噂があったが、まだ実際に、阿片をのんで、羽化登仙の陶酔境をさまよった経験の持主は、江戸には、見当らなかった。
ただの唐物屋ではない唐兵衛は、道明寺八郎の蒼白な顔面を、一瞥しただけで、看破した模様である。

「阿片をのむと、どうなるというのだ？」
弥太郎は、訊ねた。
唐兵衛は、くわしく説明してから、
「この江戸で、手に入れるのは、まず、ふつうの手段ではむつかしいし、べらぼうに高いものにつきますが、道明寺さんは、売り手をご存じらしいですな」
と、云った。
「生命を売ってまでも、のみたいものか」
「手練手管に秀でた悪女に見込まれて、惚れきってしまった、というやつですな」
「それにしても、百両は高すぎる。すまぬが、二、三両与えて、去なせてもらおうか」
「なに、百両で、お買いしよう、と約束して、とりあえず、二十両お渡ししておきました」
「気前がよすぎるな」
「ちょっと、考えるところがありましてな」
唐兵衛は、にやにやした。

三

道明寺八郎が、「南蛮屋」を出ると、尾行者がつけられた。
ごく目立たない手代であったが、対手に感づかせない尾行の修練を積んでいるようであっ

た。

道明寺八郎は、東本願寺の裏通りを通って、下谷へ出、坂本町を左折して、野のひらけた根岸に入り、御行松の近くにある、小さな家に、入った。

勿論、そこは、道明寺家ではなかった。

途中――。

八郎は、知りあいらしい鳥さしと出逢って、ちょっと立ち話をした。

その鳥さしは、将軍家御鷹匠の下役らしかった。

将軍家御鷹匠という役は、御拳の鷹という、将軍家がじかに、手にとまらせる鷹をあずかっている。

その飼育に、雀を獲って、与える。

当時――。

雀その他の小鳥を、みだりにさし取ることは、禁じられていた。殊に、神社仏閣のあるあたり、また大名旗本屋敷の近くなどは、許されていなかった。

鳥さしは、そのため、一見して、それと判る扮装をしていなければならなかった。

浅黄の頭巾をかぶり、鼠色地の小紋、野絆天、股引、脚絆、黒足袋に草鞋、帯の上には、帯止め三尺を締めて、大小の刀をたばさみ、腰に籠を携げて、これに、さし取った雀を入れておく。

手に小箱を携げているが、これには、鳥黐をたくわえてある。肩には、三本継ぎ四本継ぎの鳥さし竿をかついでいる。長さは、二間で、竹製である。

そのほか、所持するのは、寄せ笛という、小鳥を集める笛である。これを吹き鳴らすのに、修業が十年以上も必要だ、という。

上手下手があって、上手な者は、たちまちにして、数十羽を集めてみせる。

鳥さしの名人ともなると、空を飛んでいる鳥をも、投げ竿といって、ぱっと、とばして、捕えるそうである。

道明寺八郎は、その鳥さしと出逢うと、なにやら親しげに、立ち話をしてから、左右へ別れた。べつに怪しむべき気配など示さなかった。

そして、八郎が入った家は、どうやら、どこかの大店の別宅の模様であった。

尾行の手代は、忍びの術までは心得がなく、そのまま、ひきかえした。

唐兵衛は、その報告を受けて、弥太郎に、

「これァ、どうやら、狩野様のご援助を仰ぐことになりそうですな」

と、云った。

「……」

「阿片というものは、入手方法が、いく通りかあります。その糸をたぐって行くと、意外な面白い見物があるものなのです」

「抜荷か」

弥太郎は、云った。

唐兵衛は、それには、こたえず、

「てまえは、大奥でも、阿片をのんでおいでのお女中がおいでになることを、知って居りま

すよ」

と、云った。

——この唐兵衛という男は、以前は、抜荷をやっていたかも知れぬ。いや、もしかすると、いまも、やって居るのではあるまいか？

弥太郎には、その疑惑が起った。

「迷惑をかけてしまった」

弥太郎は、辞去しようとした。

「狩野様、こちらから、ご連絡申し上げたならば、またお出かけ下さいましょうな？」

「百両で、人一人の生命を買わせたのだ。来ずばなるまい」

そう云いおいて、弥太郎は、「南蛮屋」を出た。

歩き出した時、弥太郎は、

——ひょっとすると、南蛮屋にたのんだのは、おれのまちがいであったのではあるまいか？

そんな不吉な予感が、ふっと、わいた。

——やむを得ぬ。道明寺が、大道で、生命など売るから、こっちも、よけいなお節介をやくことになったのだ。

四

その家には、地下が設けられていた。

道明寺八郎は、夜具などを置いた三畳間の壁を押し、それを廻転すると、そこから通じた階段を、手燭をかかげて、降りて行った。

地下には、かなり立派な座敷が、設けられていて、あかあかと、灯が入っていた。

上座に、一人、若い婦人が、脇息に額をのせて、俯伏せていた。

道明寺八郎は、その前に坐ると、

「姫様、薬を手に入れて参りました」

と、云った。

のろのろと、婦人は、顔をあげた。

公卿貌、と世間が称する、鼻梁（びりょう）もあごも長い、美しいが、やや間のびした面相であった。のみならず、麻薬の切れた痴呆の表情がうかべられていた。

年齢は、三十に手がとどいていよう。

「ま、まことか？」

「たしかに——」

八郎は、懐中から、小さな竹筒をとり出すと、さし出した。

姫、と呼ばれた婦人は、わななく手で受けとると、その栓を抜いて、欲しているものかどうか、たしかめた。

「……あ、ありがたい！」

婦人は、八郎を視かえすと、

「恩にきます」
と、云った。
「お互いに、この薬がなくては、生きられぬ身となりましたな」
八郎は、冷やかに、云った。
脇息のそばに、太い煙管その他の、麻薬吸飲の道具が置いてあった。
婦人は、せわしく、吸飲の用意をし乍ら、
「もう、こ、これがなくては……」
と、上ずった声音でこたえた。
やがて——。
婦人は、脇息に凭りかかって、太い煙管を、くわえた。
ひと息、吸い込んだだけで、うっとりと、恍惚の色が、その公卿貌にひろがるのを、八郎は、見まもった。
それからものの四半刻も経ってから、婦人は、膝を崩すと、
「道明寺、はよう——」
と、促した。
八郎は、ゆっくりと、いざり寄ると、裳裾へ手をかけた。
「はよう……、はよう、愛しんでたもれ」
婦人は、だだっ子のように身もだえして、片膝を立てた。
下着も、下裳も、捲られた。

たっぷりと肉のりした下肢が、あらわにされると、婦人は、羞恥もすてて、膝をひらいた。
八郎は、片手を、そろそろと脛から、内股へすべらせた。
もう、そのとたんから、婦人は、官能に堪えられぬみだらな声を、もらして、身もだえしはじめた。
「ああ……、ああ……、もう——おねがい！……もっと、ああ……もっと！」
婦人は、仰向けに倒れた。
あられもなく、下肢をひろげて、男の指の愛撫にまかせて、呻きつづける。
八郎は、不意に、その上に掩いかぶさると、婦人がすてた太い煙管を把った。
それを吸いはじめ乍ら、ゆるやかに、下半身を動かしはじめた。
婦人は、ぱっと双脚をはねあげると、男の腰をはさんだ。
狂ったと同じであった。
責めさいなまれる喜悦が、全身を、巨きな浪のうねりの中にゆだねたように、彼女を狂わせているようであった。
やがて——。
男も女も、ともに、ぐったりと、死んだようになった。
指一本動かさぬままに、しばらくの時刻が過ぎた。
さきに、目蓋をひらいたのは、八郎であった。
光を失ったうつろな眼眸を、うろうろと、宙にさまよわせていたが、のろのろと身を起した。

婦人の方は、なお、死んだように、ぐったりとなっている。
八郎は、大きく、胸を喘がせた。
それから、じろりと、はだけられたままの女の股間に目をくれた。
けがらわしいもののように、下裳を、その上にかけておいて、八郎は、立ち上って、地下室を出た。
座敷にもどった八郎は、床の間の刀架から、一振を把って、庭へ出た。
抜きざまに、
「えいっ！」
虚空を、斬った。
凄じい片手斬りであった。

第三十四話　阿　片

一

「ここか」
狩野弥太郎は、根岸の御行松に近い、その家の門前に立った。
道明寺八郎のことが、なんとなく気になって、たずねて来てみたのである。
門を入ろうとした時、むこうの小径を、鳥さしが通って行くのを、みとめた。
べつに気にもせず、門を入って、玄関に立った弥太郎は、案内を乞うた。
二度、三度、呼んでみたが、返辞がなかった。
なんとなく、入ってみる気になった。
四間ばかりの屋内は、しんとしずまりかえり、人の気配はなかった。
「まるで、空家だな」
呟き乍ら、座敷を抜けて、裏縁へ出ようとすると、夜具などを置いた三畳の間が、そこにあり、襖がひらかれていた。

何気なく、視線を向けると、そこの壁が、なかば、廻転していた。

「……？」

不審のままに、踏み込んで、壁があけたくらがりをのぞいてみると、階段が設けてある。

そして、地下からは、ぼうっと、あかりがさしていた。

弥太郎は、跫音（あしおと）をしのばせて、油断なく、階段を降りた。

座敷が、そこに設けてあった。

一歩、入ったとたん、弥太郎は、眉宇をひそめた。

上座に、一人の女人が、仰向けに倒れていた。

はだけられた胸は、血汐でまみれ、双手は虚空をつかんでいた。

近づいた弥太郎は、血汐がかたまっていないのを視て、

——殺されて、間もない。

と、さとった。

抵抗した様子はなく、裳裾もみだれてはいなかった。

倒れた脇息わきに、太い煙管（きせる）や、その他の道具が置かれてあったが、

——これが、阿片の吸飲具だな。

と、想像がついた。

公卿貌の、美しいが、やや間のびた面相には、恐怖の色をとどめてはいなかった。

——下手人は、懇意の者で、なにか話を交しているうちに、不意に、胸を刺されたものらしい。

兇器はなにか、とのぞき込んだ時、戸口から、

「狩野！　何故、姫君を殺した？」

鋭くとがめる声が、とんで来た。

いつの間にか、道明寺八郎が、戻って来て、降りて来ていたのである。

ゆらぐ灯火（ともしび）を受けた八郎の蒼白な顔は、幽鬼じみていた。

「おれが、殺（や）ったのではない」

「弁解無用だ。はじめて訪れた者が、この家に、地下部屋が設けられていることが、どうして判る！」

八郎は、弥太郎を、睨みすえて、云った。

「壁があいていた」

「ごまかすな！　お主は、人を使って、この家の様子をさぐらせたに相違ない。……おれが、南蛮屋を出て、ここへ戻って来た時も、尾（つ）けて来た者が居った。お主が命じて、尾行させたのだ」

「誤解だな」

弥太郎は、おちついて、こたえた。

「庭へ出ろ！　姫君の仇を討つ！」

八郎は、階段をのぼって行った。

やむなく、庭へ出た弥太郎は、

「殺ったのは、おれではない。降りてみると、死んでいたのだ」

と、重ねて、云った。
「弁解は無用だ、と申して居るぞ！」
八郎の左手には、もう差料が抜き持たれていた。
弥太郎は、両手を空けたままで、
「道明寺、お主は、なんとなく、死に急ぎしているように思われるぞ」
と、云った。
「死に急ぎなんぞして居らぬ」
「大道で、生命を売ってみたり、おれの言葉もあたまから信じないふりをして、果し合おうとしたり——どうしても、死に急ぎして居るとしか、考えられぬ」
「うるさいっ！　抜け！」
八郎は、すっと一歩出て、まっすぐに、白刃をさしのべた。
鬼気迫る殺気が、その長身に、みなぎった。

二

弥太郎は、やむなく、一歩退って、差料を抜いたが、
「お主、あの女人のことを、姫君と呼んでいたな？」
と、訊ねた。
「……」

「どこの姫君だ？」
「……」
「お主、惚れていたのか？」
八郎は、返辞のかわりに、凄じい突きを放って来た。
弥太郎は、辛じて、その一閃を払って、後退した。
八郎は、第二撃を放つべく、やや前こごみの不気味な姿勢をとった。
——この男、この世に住み難いほど、人間ばなれして来た。
弥太郎は、微かな悪寒をおぼえた。
もともと、道場時代から、孤独を好み、友と親しく交わろうとしない道明寺八郎であった。
右腕が萎えていることが、性根を歪めたのかとも思われる。
弥太郎は、道明寺家の内情は、あまりよく知らなかったが、幾代か前は、公卿で、将軍家の夫人として降嫁する姫君に従って江戸へ来て、高家となったが、落度があって、いったん、廃家となり、あらためて、御家人としてとりたてられた、という。
そこらあたりにも、八郎を暗い気象にする遠因がありそうであった。
「とおっ！」
八郎は、第二撃を放って来た。
弥太郎は、斜横に跳んで、かわした。しかし、背中が、からたちの生垣にふれた。もはや、第三撃をかわすことは許されず、反撃に出るよりほかはなかった。
弥太郎は、やむなく、上段に構えを変えた。

八郎は、にやりとした。
勝負は、双方の一瞬の動きによって、決することになったのだ。
八郎は、勝つにせよ負けるにせよ、この一瞬の立合いに、はじめて、おのれが生きている悦びをおぼえた様子であった。
と――その時。
生垣をへだてて、声があった。
「黄泉の路上、老いは尠し、かの」
弥太郎は背中を向けているが、その声の主の姿は、八郎の視野に入った。
宗匠頭巾をかぶり、十徳をはおっていた。無腰だが、あきらかに、武家の隠居であった。
「邪魔すな、老人！」
八郎が、弥太郎を睨み乍ら、云った。
「邪魔はせぬよ。しかし、しゃべるのは、こちらの勝手ではあるまいかな。……鶯の初音をききに来て、これは、珍しい見世物に、接した。……ぞんぶんに、やりなされ」
「うるさいっ！　去れっ！」
「見とどけさせてもらおう」
老人が、こたえた――刹那、八郎は、弥太郎をすてて、生垣めがけて奔った。
目にもとまらぬ迅さの突きを、老人に送ったが……。
次の瞬間の老人の動きは、鮮やかであった。
かわした、とみるや、生垣をひらっと躍り越えていたのである。

「くそっ！」
八郎は、じりじりと肉薄して、
「老いぼれっ！　なんの邪魔だてだ！」
と、呶鳴った。
「やがて死ぬ気色はみえず蟬の声、かの」
老人は、笑った。
八郎は、猛然と、襲いかかった。
老人は、ぱっと身を沈めた。
白刃は、老人の宗匠頭巾を、つらぬいた。
その時、老人の手は、八郎の萎えた右腕をつかんでいた。
「道明寺八郎、きちがい薬に酔うて、亡父の親友の顔も、忘れたか！　たわけ！」
凛乎たる声をあびせられて、八郎は、ようやく、われにかえったように、老人を見なおした。
「大河内外記殿！」
八郎の口から、その名が、もらされた。
「ようやく、思い出したか」
老人は、八郎の右腕をはなすと、すたすたと、縁側へ近づき、座敷に上った。
座がきまると、老人は、弥太郎に、身分と姓名をきき、うなずいてから、八郎に向って、
「三年前、二条家の姫君が、銅駝御殿から、姿を消されたが……、拉致したのは、お主のし

わざであったの」

と、云った。

「……」

八郎は、顔を伏せた。

公卿は、五摂家が、最上位を占めていた。摂家とは、摂政関白に補せられる資格のある家柄である。近衛、九条、二条、一条、鷹司の五家である。

近衛家を陽明御殿、九条家を陶化御殿、二条家を銅駝御殿、一条家を桃華御殿、鷹司家を楊梅御殿、という。

皇室が衰微している時代とはいえ、摂政関白になる家ともなれば、権威はなお大層なものであった。

摂家随一の近衛家などは、嫡子が元服する時、近衛家に限り、天子の真筆で、名前を賜わったし、その時は、江戸からも、将軍家の直筆で、莫大な金子と珍宝が、贈られた。

二条家は、徳川家と親密な関係で、十五代康道以下、代々、将軍家の猶子となり、将軍の名前を一字もらうのがならわしであった。二条康道の父関白昭実は、元和元年の禁中ならびに公家衆法度に、家康、秀忠と、連署している。そのころから、徳川家とは、あさからぬ関係があった。

その二条家の姫君が、三年前の春、清水寺へ参詣した帰途、突然、行方知れずになったのであった。

大騒動になったが、十日経ち、一月過ぎても、行方は判らなかった。

当時、まだ隠居せず、大目付の要職にいた大河内外記は、閣老の依頼によって、京都へおもむき、探索の指揮をとったのであった。

しかし、ついに、姫君の消息は、杳として知れなかった。

いま——。

大河内外記は、亡友の息子である道明寺八郎に向って、拉致の下手人はお主であろう、と指摘したのである。

「どうした、何故こたえぬ。もう、過ぎ去ったことだ。わしは、大目付ではない。ただの隠居じゃ。かくす必要は、あるまい」

そう促されて、八郎は、

「たしかに、それがしが、かどわかしました」

と、白状した。

「で——どうした？」

「……」

「姫君は、健在か？」

「今朝がたまでは——」

「なに？」

老人は、眉宇をひそめた。

「なきがらは、この家の地下部屋にあります」

八郎の言葉を、弥太郎が、ひきとって、自分がたずねて来てみると、殺されていた旨を、

告げた。

老人は、八郎に案内させて、地下へ降りて行ったが、やがて、戻って来ると、

「お主らの決闘を、偶然、目撃したのは、さいわいであった。……姫君を殺した下手人は、どうやら、あの男らしい」

と、云った。

八郎と弥太郎は、老人の顔を、凝視した。

「わしが、この根岸へやって来たのは、半刻あまり前じゃが、この家の前を、姫君のかくれ家などとは、夢にも知らずに、通りかかると、鳥さしが、急ぎ足で、出て参った」

「鳥さし！」

八郎と弥太郎が、同時に、叫んだ。

「思いあたることがあるようじゃな」

元大目付は、二人の顔を見くらべた。

まず、弥太郎が、

「それがしが、当家をおとずれた時、むこうの道を往く鳥さしの姿がありました。……道明寺、お主、知りあいの鳥さしではないのか？」

と、云いあて、八郎は、うなずいた。

「どういう知りあいだな、八郎？」

老人が、訊ねた。

八郎は、ちょっと沈黙を守っていたが、投げ出すように、

「その鳥さしから、阿片を買いもとめて居りました」

と、こたえた。

「お主は、どれくらい前から、阿片を喫うて居った？」

「姫君を、かどわかす以前より……」

「どこで、おぼえた？」

「兵庫湊へ参った時、そこの唐物屋と親しくなり、おぼえました」

「ふむ！」

老人は、じっと、八郎を見まもっていたが、

「お主は、阿片を買う金子が、欲しく、何者かに、二条家の姫君をかどわかせば、その金をやろう、とそそのかされた。そうではなかったか？」

「ご明察――」

八郎は、みとめた。

「何者だな、お主を、そそのかしたのは？」

元大目付は、何気ない口調で、訊ねた。

「それは、申し上げられません」

「では、きくまい。……ところで、二条家の姫君も、どうやら、阿片の中毒患者になっていたようだな」

「……」

「お主が、そうしたのか？」

「貴方様とは、関りのないことです」
「そうじゃな。一向に関りのないことだな。わしは、もはや、ただの隠居にすぎぬのだからな。しかし、野次馬根性は、むかしとすこしも、かわらぬ。で——つい、首を突っ込んでみたくなる」
弥太郎は、老人の横顔を、瞶め乍ら、
——この老人は、いまだ、本当に、隠居はして居らぬようだ。
と、直感した。

三

茶屋町の唐物屋「南蛮屋」のあるじの居間には、来客があった。
一瞥して、船頭と判る汐風で焼けた赤銅色の皮膚を持った逞しい巨男であった。
カピタン天兵衛という、長崎出島のオランダ商館の千石船の長であった。
オランダにも、数回渡航した経験の持主であった。
このたび、オランダ商館から幕府への進物を積んだ船を、江戸へ航海させて来て、暇をみて、南蛮屋をおとずれたのであった。
「南蛮屋主人唐兵衛さんか、はっはっは……、化けたものだの、あんたも——」
カピタン天兵衛は、傍若無人な大声で笑った。
「お互いに、前身のことは、語るまい」

唐兵衛は、微笑して、こたえた。
「これでも、浅草界隈では、信用のある商人なのだ」
「ほほう、そうかねえ、あんたが、ずぶかたぎの商人になりさがったか」
「なりさがった、はないだろう。なりあがったのだ」
「ばかを云え。大海原を千里ものり越えて、南蛮船に躍り込む日本男児の心意気を、むかしの夢にしてしもうて、ほそぼそと、こんな唐物屋ぐらしをしているざまは、なり下ったとしか、云いようはないわい」
「まあ、そういう見かたもあろうて」
「それとも、なにかい、実は、大きな野望をひそめて、こうして化けている、とでも云いたいのかな。公儀をひっくりかえすような企てを持っているとでも——」
「そんな野望は、ないわさ。……ただ、わしも、ただの唐物屋で晩年を終るつもりはない」
「そうであろうな。どうせ、このカピタン天兵衛に、力をかせ、と云って来るに相違ない、と考えていたわい」
「とりあえず、お前さんに、きいてみたいことがある」
「なんだな？」
「オランダ商館船は、江戸へやって来る毎に、阿片を、はこんで来るかね？」
「なぜ、そんなことをきく？」
「大奥には、阿片をのんでいる女中が居るぞ」
「ふん——、それは、たぶん、医薬として、贈られるものの中から、かすめ取られるのであ

ろうて」
「医薬としてのほかに、お前さんが、ひそかに、はこんで来る阿片は、あるかね？」
「欲しい、という者が居れば、はこんで来るが、べつに、儲けのために、はこんでは来ぬ」
「いままで、お前さんが、阿片を売り渡した対手は？」
「大坂の廻船問屋播州屋ぐらいのものかのう」
それをきくと、唐兵衛の双眼が、光った。
「それで、読めた」
「なにがだ？」
「いや、市中に、阿片が、ひそかに、売りさばかれていることがだ。ふむ、そうだったのか、播州屋が、阿片を買っていたか」
「おい、どうして、阿片のことを、しきりに、気にするのだ？」
「阿片というしろものがあれば、どんな人間でも、虜にすることができる、ということに気がついたのだ。たとえば、将軍家に、そっと、おのませする。阿片がきれれば、将軍家は、気が狂いそうになって、これを、もとめる。その時、阿片を鼻さきに、ちらつかせれば、将軍家は、それが欲しさに、なんでも、云うことをきくだろう。将軍職でも、ゆずる、というだろう」
唐兵衛は、そう云って、にやりとしてみせた。
「ふむ、そういう考えかたもあるのう。……唐兵衛、阿片が欲しければ、はこんで来てやるぞ」

「ひとつ、たのもうかの。ついでに、お前さんに、阿片が欲しい、とたのんで来る者がいたら、すぐに、報せてもらおうか」
「承知したぞ。……さ、ひとつ、江戸の料理を御馳走になろうか」
カピタン天兵衛は、舌なめずりした。

第三十五話　めぐり逢い

一

道明寺八郎が、茶屋町の「南蛮屋」の店さきに、ふらりと立ったのは、それから十日ばかり後であった。

番頭に取次がれると、唐兵衛は、居間に通すように命じた。

八郎は、もの倦げな様子で、

「あと八十両、受けとりに参った」

と、云った。

「貴方がおのみになっている薬は、大層高価な模様でございますな」

唐兵衛は、微笑し乍ら、目だけは冷たく、八郎を見すえた。

「……？」

八郎は、黙って、光のない双眸で、唐兵衛の視線を受けとめた。

「存じて居りますよ。てまえは、これで、シャムロあたりまで、こっそり、抜け旅をしたことがありますのでね。……貴方の皮膚は、阿片に中毒して居られることを、てまえに教えて居りますな」

「八十両、渡してくれるのか、くれぬのか？」

「勿論、さし上げますとも」

唐兵衛は、西洋文字がいちめんに刻まれている函を持って来ると、蓋をひらいた。

小判が、包みもされずに、ぎっしりと詰まっていた。

「八十両といわず、お好きなだけ、お取り頂きましょう」

「どういうのだ？　おれは、生命を、百両で売ったのだ」

「自分の生命というものは、金で売ったり買ったりできる品ものではありません。千両が一万両でも、絶対に売らぬという御仁もおいでしょうな。百両では、いかにも、安すぎる。そうお思いになりませんかな」

「買ったおれの生命を、お主が、どう使うか——その使いかたによって、安くもなろうし、高くもなろう」

八郎は、売った生命は、一度だけ、何事かに使ってもらいたい、と唐兵衛に申し出ていたのである。

その一度が、百人の破落戸の中へ単身で斬り込む、ということであってもいとわぬ、と誓ってみせていた。

「お主は、おれに何かをやらせるために、生命を買ったのだろう？　そうではないのか？」

「べつに、すぐに、貴方の腕前を、役立てて頂こうと思って、買ったわけではありませんが

ね」
「しかし、いま、お主は、八十両といわず、いくらでも、金子を取れ、と申し出たところをみると、おれを、何事かに使おうという肚で居る」
八郎は、云った。
唐兵衛は、ちょっと沈黙を置いてから、
「貴方は、阿片を、どのような手づるで、入手されますかな？」
と訊ねた。
「鳥さしから、求めて居る」
「その鳥さしは、何者でございますな？」
「……」
「うかがいたいもので――」
「知って、どうする？」
「うかがった上で、思案いたします」
「鳥さしは、鳥さしだ」
「と申されると、やはりほんものの御鷹匠の下役なので――？」
「そういうことだな」
「それァ、面妖しゅうございますな。御鷹匠の下役と、阿片は、むすびつきませんな」
「あいつが、どこから、阿片を手に入れて来るのか、おれは、知らぬ」
「それを、つきとめて頂きたいもので――」

唐兵衛は、微笑し乍ら、云った。
「それが、買ったおれにやらせる役目か」
「阿片の出処をつきとめるのは、なまやさしい仕事ではありませぬよ」
「直参旗本に、奉行所の町方同心のまねをやれ、というわけか」
八郎は、自嘲の呟きをもらして、函の中から、八十両を把った。
「もらって参る」
八郎が出て行くと、唐兵衛は、すぐに、手代を呼んで、尾行を命じた。

二

八郎は、花川戸を抜けて、河岸道をひろい、今戸橋を渡ると、右へ折れた。
山谷堀に面した小料理屋の二階に、元大目付大河内外記が、八郎を待っていた。
外記の前に、料理はあったが、酒はなかった。
「どうであったな？」
南蛮屋へ行かせたのは、外記であった。
「それがしに、阿片の出処を、つきとめて欲しい、と依頼いたしました」
「それで、お主は、なんとこたえた？」
「まことの鷹匠の下役から、もとめている、とこたえました」
「うむ。まァそこらあたりが、さしさわりのない返辞であろうな」

外記は、笑って、
「ゆっくり、飲むがよかろう」
と、酒を持参させるために、手をたたこうとした。
「酒は、やりません」
「珍しいの」
「酒の代りに、そろそろ、あれをのまなければ、気が狂いかけて居ります」
「厄介なからだになったものだの。我慢できぬのか？」
「できません」
八郎は、一礼すると、座を立った。
外記は、いたましげに、八郎を見送って、
「父親が生きて居れば、なげくであろうが……」
と、呟いた。
大河内外記自身、十年ばかり余分に生きのびた、と思っているのであった。
大目付職に在ること三十余年の長きにわたった外記であった。
幕府の閣老たちの裏面、そして諸侯の惨めなくらしぶりを、つぶさに眺めて来て、いかに、武士というものの存在が、無意味になっているか、思い知らされたのである。
外記が、青年であった頃は、まだ、武士には武士としての姿勢があったように思われる。
いまは、その姿勢すらも、崩れてしまったようである。
苦しい消費生活が、大名旗本を喘がせているうちに、各家にあった筈の士風を失わしめたのか。

外記が、眺めて来た大名旗本の台所は、おそるべき窮迫ぶりであった。
たとえば——。
萩の毛利家のような大藩でさえも、関ヶ原役の後、領有を八箇国から二箇国に減らされたために、元和九年に、すでに、大坂商人から借りた負債が、銀四千貫にものぼり、延宝三年には、一万貫を超えるにいたっている。
寛文の頃には、二百石以下の家臣は、城下に住むことができず、在郷居住にきりかえて、自ら田畑をたがやすようになっていた。それでも、家計が立たず、浪人を希望する者も出たくらいであった。
文化の頃には、百石取りの士が、家族七人をやしないかねて、あるじは、乗馬用の馬で農耕し、女は木綿を織り、味噌も醤油もつくっている。
生活の苦しさから、家臣が、在郷をもとめたのは、すべての藩に於てであって、例外はない。
仙台の伊達藩でさえも、天明の凶荒以後は、三百石以下の家臣の大半は、在郷ぐらしに移っている。
知行地に、きも入りを置いて、年貢を徴収させて、年貢米を、江戸廻米にあてたり、城下の米商人に売るようなくらしは、むかしの夢になったのである。
そうなれば、武士の体面をすてても、内職かせぎをしなければならなかった。
細工物の加工とか、毛筆つくりとか、家族総がかりでやっている藩士が、八割を占めてい

る現状である。大工や左官の仕事まで、下級の士は、やっているのである。
武士道の吟味、などというものが、保持されるわけがない。
地方に在る藩士は、そうした内職しのぎができるが、江戸に永住する定府の藩士は、それは、主家の体面上、許されぬ。
まして、直参旗本ともなれば、内職は、きびしい法度にふれる。
百石以下の御家人など、その困苦ぶりは、名状しがたい悲惨であった。
このままで、世の中が、過ぎて行くとは、とうてい、外記には、考えられなかった。
富は、商人の倉へ、集ってしまっているのである。
「生命を売る御家人が、現われたとしても、ふしぎではない」
外記は、さめたお茶を口にはこび乍ら、呟いた。
「生きのびすぎたのだな、わしは――」

三

八郎は、山谷を抜けて、玉姫社の前を、ひろびろとひらけた野道へ出た。
ゆるやかにうねった道を辿れば、汐入土手に至る。
根岸へ戻って行くには、山谷から小塚原へ通じる、まっすぐの往還をひろうのが、道順であったが、わざと、野道へそれたのは、思うところがあったからである。
汐入土手にあがった時、八郎は、突然、くるっと踵をまわした。

十歩あまりうしろに、南蛮屋の手代がいた。
「おい、貴様――、尾けすぎたぞ」
八郎は、冷やかな語気で、云った。
手代の顔面が、血の気を失って、凄味を帯びたものになった。
「おれを、尾けまわして、どうしようというのだ？」
八郎が、一歩踏み出すと、手代は、一歩退った。
「……」
「……」
睨みあいが、つづき、一瞬、八郎は、襲いかかる姿勢をとった。
手代の右腕があがった。
八郎めがけて、投じられたのは、手裏剣であった。
八郎は、差料を抜く手もみせず、これを払って、
「南蛮屋唐兵衛の正体が、みえたぞ！」
と、あびせた。
手代は、兇悪な形相になった。
八郎の方は、その時、にわかに、五体に顫えが来た。阿片中毒独特の禁断症状におそわれはじめたのである。
手代の方は、すばやく、八郎の状態を視てとって、冷たく薄ら笑った。
八郎は、白刃をダラリと下げて、迫ろうとしたが、ふらっとよろめいた。

そこを狙って、手代は、もう一本、手裏剣を打った。
辛じて、これを耳朶すれすれにかわした八郎は、禁断症状に抵抗すべく、
「やあああっ！」
と、凄じい叫びを発して、手代めがけて、突進した。
手代の懐中に、手裏剣が二本しかひそめられていなかったのが、八郎にとって、さいわいであった。もし、もう一本、懐中にあったならば、八郎ののどを、貫いたに相違ない。
手代は、身をひるがえして、遁れた。
八郎は、土手縁へ、どさりと腰をおろして、大きくひと喘ぎした。
一人の町人が、すたすたとむこうから、土手へあがって来た。
白刃を手にして、蹲っている武士が、そこにいるのを、みとめても、べつに、怯じ気も示さず、近づいて来た。
ただの町人ではなかった。夜盗のむささび吉五郎であった。
足を停めて、八郎の様子を看やると、
「旦那――、どうかなすったので？」
と、訊ねた。
「すててておけ」
八郎は、視線を落したまま、こたえた。
「すててておけ、と仰言っても、そのご様子は、どうやら、わずらっていなさる」
「……」

「旦那は、先日、伝法院の裏門前で、生命を売っていなすった御仁でございますね」
「……」
八郎は、おこり持ちのように、目に見えた顫えを示していた。
「これァ、いけませんや。ちょっと、お待ち下さいまし」
吉五郎は、駆け出して行ったが、ほどなく、辻駕籠をやとって、ひきかえして来た。
八郎は、その時は、白刃を鞘におさめていたが、立ち上る気力はなく、仰向けに寝ていた。
八郎が、はこばれたのは、室町三丁目の袋物店「色や」であった。
吉五郎は、八郎に肩をかして、二階へ案内した。
「すぐ、牀をのべますゆえ、そちらに横におなり下さいまし」
「いや、牀はよい。それより、た、たのみがある」
その声も、顫えていた。
「なんでございます？」
「根岸の、御行松から一町ばかり東にある家に……」
八郎は、そのたたずまいを説明し、その家の地下の部屋に置いてある薬函を取って来て欲しい、とたのんだ。
「かしこまりました」
吉五郎は、承知すると、床の間の壁を押して、
「小まき」

と、呼んだ。

「あい――」

隣家の二階から、返辞があった。

「わずらっておいでの御家人さんを、おつれした。お世話をしてくれ」

「あい」

吉五郎は、小まきが入って来るのを待たずに、階段を降りて行った。

四

廻り壁から、すらりと、仇な姿を現わした小まきは、床柱に凭りかかって、目蓋をふさいでいる八郎を、一瞥するや、はっ、と息をのんだ。

八郎の顔面が、死人のように蒼ざめているのに、おどろいたのではなかった。

「八郎様！」

小まきの唇がわなないて、その名を呼んだ。

八郎は、しかし、禁断症状に堪えるのに必死で、女へ視線を向ける余裕もなく、ひくく喘ぎつづけていた。

上下の歯が、カチカチと鳴らされ、にぎりしめたこぶしが、顫えるのを見まもった小まきは、いそいで、牀をのべた。

「おやすみ下さいまし」

すすめたが、八郎は、それに移ろうともしなかった。

小まきは、八郎の肩へ手をかけて、

「さ――、どうぞ」

と、起そうとした。

その時、はじめて、八郎は、目蓋をひらいて、小まきの顔を、視た。

しかし、べつに、なんの反応も示さず、すぐに、宙へ視線を、送って、

「みにくい！」

と、呟いた。

「え？」

小まきは、訊きかえした。

「お、おれのみにくさが……、堪えがたい」

八郎は、その自嘲を口にしてから、ようやく、牀へ、身を移した。

小まきは、八郎の寝顔を、じっと見まもった。

――こんなところで、めぐり逢うなんて！

小まきの胸は、一杯になっていた。

八郎と小まきは、同じ貧乏御家人の家を隣り合せた、幼馴染であった。

そして、小まきは、もう十歳頃から、四つ年上の八郎を、恋していたのである。

小まきは、十八歳で、本郷の前田邸へ、女中奉公に上ったが、上る直前に、八郎に、処女を与えたのであった。

二人が、忍び合ったのは、近くの氷川神社の社殿であった。
その夜のことが、昨日のことのように、ありありと、思い浮ぶ。
八郎は、小まきを抱く前に、
「わしが、生れつきの不具であるのに、同情して、そなたを呉れる、というのであれば、そんなあわれみは要らぬ」
と、云ったのであった。
「いいえ、ちがいます！」
小まきは、自分の方から、八郎の胸へ、身を投げ込んだ。
男女の営みを知らぬ青年と娘は、必死にからだを求めあい、夜明けがたになって、ようやく、ひとつに結ばれたのであった。
小まきは、あの時の、体内へ押し入って来た男の力の強さに、思わず呻きを発した瞬間を、脳裡によみがえらせた。
——死んでもいい。
そう思ったことだった。
——あれから、七年！
小まきは、呟いた。
——あたしは、夜働きの妾になり、このお方は、なにやら、疾病にとりつかれておいでになる。
文字通りの憂世の冷酷な宿命に、互いに押し流されて、ここで、めぐり逢った、というこ

とになる。
吉五郎が、薬函を持って、帰って来るのに、さして時間は費されなかった。
八郎は、吉五郎に手つだわせて、太い煙管を、くわえた。
ふた息ばかり、吸い込んでから、ぐったりとなった。
顫えがぴたりととまるさまを、吉五郎は、いたましいものに眺めた。
——これは、津軽らしいが、なんとも、おそろしい薬だ。
吉五郎は、八郎の顔面にみるみる生色がよみがえるのをみとめて、ひそかに、首を振った。
四半刻後——。
八郎は、平常の態度をとりもどして、起き上っていた。
「女子が、世話をしてくれていたが……」
小まきは、いつの間にか、姿を消していた。
「へい、てまえの女でございます」
「そうか。……どこかで、逢ったような、見おぼえのある顔だちのようであったが、おれの幻覚でもあるような気がした。……美しかったのをおぼえて居る」
「旦那——。この薬は、おからだにさわります。なんとかして、お止しになれませんかねえ」
吉五郎は、心から、そう云った。

「見知らぬ者に対して、お主は、ひどう親身になってくれるな」
「あっしは、どういうものか、お旗本衆が、好きなんでございますよ。あっしの親爺が、さるお旗本のお屋敷に、二十年も奉公して居りましたせいでございますかね」

第三十六話　女　官

一

「旦那――」
ひそやかな呼び声が、薄闇の中で、かけられた。
有明行燈のあかりが、ほそめられ、派手な半纏がかけてあるので、人が入って来ても、それは、影になっていた。
桜田優之助は、うたた寝をしていた。
この深川八幡前の小料理屋「ちさ」の二階で、また、数日流連ていたのである。
昏れてほどない時刻であったが、花曇りのいい陽気で、人出が多く、この店にも、客がたてこんで、さわがしかった。
ひっそりとしているのは、この小座敷だけであった。
「旦那――、申しわけありませんが、ちょいと、お耳に入れたいことがありますんで……」
そう話しかけられて、優之助は、ようやく、身を起して、もの倦げに、あくびをもらした。

妙なもので、あくびひとつにも、この男のしぐさには、色っぽさがある。

「なんだ、吉五郎かえ、なんの用だえ？」

「へえ、折入っておねげえ申したいことがありまして――」

むささび吉五郎は、有明から半纏をとって、あかりを大きくした。

それから、吉五郎は、人が変ったように肌の艶も失せ眸子もにごった優之助の貌を見やって、眉宇をひそめた。

「旦那、失礼乍ら、ちっと酒が過ぎるのじゃございませんか」

「ふふふ……、夜働きに、日常をつつしめ、と忠告されるようでは、桜田優之助も、ヤキがまわったものさね。すておけ、すておけ、どうせ、浮世は色と酒、浮名ひろげたこの濡れ衣は、乾く間もない人の口」

「いえ、あっしは、こうして、むだな日をすごしておいでになるのが、なんだか、もったいないような気がするのでございます」

「人間には、むだなことが一杯あるから、浮世を生きられるのではないかえ。爪に灯をともすやからには、花見も酒色も墓詣でも、すべて余計なことかも知れぬが、千両箱をかかえて、三途の川は渡れまい。人生五十年、せいぜい無駄な時間をすごそうではないか」

「ご尤もな仰せでございますが、貴方様のご器量が、このまま、うもれてしまうのは、どう考えても、癪でございますよ」

「古城進八郎は、人の女房を連れて逃亡、行方知れず。佐渡の御用金を掠奪するのにも失敗したときけば、天保倭寇党も、泡のごとく消えてしまって、貧乏旗本どもの夢も破れたわけ

じゃわえ」

「ところが、もうひとつ、うまくやれば、何万両かが入るてだてがあります」

「夜働きめが！　つぎつぎと、濡れ手で粟を思いつき居る」

吉五郎は、膝を進めて、

「道明寺八郎という御家人を、ご存じでございますね？」

「知って居る。狩野弥太郎と、平山道場で、門弟首座をあらそった剣鬼じゃわえ。その道明寺八郎が、どうしたえ？」

「あっしの家で、寝ておいでです。どうやら、津軽の中毒にかかっておいでで――」

「津軽――阿片かえ？」

「へえ。あっしが、家へおつれ申した折、薬が切れて、ひどうお辛そうでございましたが、お命じになった処から、津軽を持って来てさしあげると、てきめんに、平常におもどりになりましたが……なんとも、あれは、おそろしい薬でございます」

「ふうん」

「ところが、昨夜から、急に発熱なさって、大層な量の血をお喀きになりました。津軽の中毒のせいかどうか、胸を患っておいでございます。もう自分の生命は、さほど長くないゆえ、世話になったついでに、ひとつ、金儲けを教えてやろう、と仰言いましてね」

「お前が、天保倭寇党のことでも、しゃべったのであろう」

「気力を出して頂くために、天保倭寇党にお入りになって、南蛮へ押し渡られたら、そこには、阿片が山のようにございましょう、と申し上げたのでございます」

古城進八郎を頭領として、旗本小普請組の若いかたがたが、大きな夢を実現しようとされている、と語ったところ、八郎は、しばらく、沈黙を置いて、軍資金のことを、吉五郎に、問うたのであった。

吉五郎が、古城進八郎が行方不明になるとともに、軍資金調達の方法もなくなった旨を、こたえると、

「わしに、十万両ばかり調達の思案がある」

と、八郎が、云い出したのであった。

二

大坂の廻船問屋に、播州屋というのがある。廻船問屋としては、二流だが、大奥御用達として、もう十年以上も、千代田城に出入りしている。

播州屋の御用は、中国・四国・九州で産れる果実を、いちはやく、大奥へはこんで来ることであった。紀州の蜜柑など、江戸の大商人たちが口にもせぬうちに、播州屋が、はやばやと、大奥の御台所はじめ、年寄、中臈がたの口に入れさせていた。

しかし、この御用のほかに、播州屋は、御典医に、麻薬を売る、という重要な儲け口を持っていた。

麻薬というものは、鎖国のこの当時にあっては、一般の庶民が入手することは、殆ど不可能であった。いや、庶民たちは、麻薬というものがあることさえも、知らなかった。

麻薬を所蔵するのは、御典医の特権であったし、これを使用することによって、名医の評判をとることは、たやすかった。

外科という医術が、未発達である以上、七転八倒の苦痛を示す病人を、麻薬で、すやすやとねむらせてみせるのは、まさに、魔術の冴えであった。

御典医、というのは、世間一般の通称であって、武鑑の中では、儒者に次ぐ地位で、あまり高くはなかった。御番料が二百俵で、何院という称号をもらい、法眼、法印の官名を帯びる。これは、元来僧侶の官名で、法印は僧正相当、法眼は僧都相当であった。但し、医師は、僧侶ではないから、僧官ではなく、僧位のみ受けるわけで、大した意味はなかった。

ただ――。

病人にとって、医師は、万能の神にひとしい。

当然、特権が許された。

たとえば、御典医の駕籠は、大名行列に行き会っても、そのまま、往来を駆け抜けてもよかった。人命にかかわる任務をおびているので、先を急ぐものとされているからであった。

そういう特権が、しだいに、御典医を傲慢にした。

この当時の、将軍家の侍医――いわゆる、御匙ともなると、大層な収入があった。

石町三丁目の多紀安叔などは、楽真院法印という官名を帯び、盆暮に、将軍家から、千両ずつ、二千両の薬礼があった。

この奥医師ともなると、供廻りは侍が二人、挟箱持ち、薬箱持ち、長柄持ち、草履取り、それに陸尺が四人、十人以上をひきつれて、立派な乗物で、往診した。

大名を診る時は、一回で絹二百疋、旗本へ行くと銭三貫文、町家へおもむけば銭数貫文を出させた。

将軍家の脈をとる御匙であるから、ふつうの大名旗本は、依頼しても、なかなか往診してもらえなかった。公儀の許可を得て、やっと、往診してもらうのであったから、当然、薬礼をはずまなければならなかった。まして、町人ともなると、いかに莫大な金を持っていても、診てもらうことは、困難であった。そこを、内密でたのむのであるから、金を積まざるを得なかった。

御典医が、威張ったのは、むりもなかった。

その御典医にとって、最も必要な薬が、麻薬であった。

病気を治癒させてやる必要はなかった。ただ一回の往診で、そんなことはできるものではなかった。その時、病人を一時的に安らかな状態にしてやれば、

「流石（さすが）は、名医だ！」

ということになるので、麻薬を与えるのが最も効果があった。

播州屋という商人は、御典医にとって、なくてはならぬ存在であった。

「……つまり、播州屋が、奥医師からせしめた金は、どれくらいの額になるか、はかり知れない、ということでございます」

吉五郎は、云った。

「面白いな」

優之助は、微笑した。

「ところが、ここに、もう一人、播州屋だけに、甘い汁を、いつまでも吸わせてはおかぬ、と考えた商人が、出て参りました」

「誰だえ？」

「茶屋町の唐物屋で、南蛮屋唐兵衛という男でございますな」

吉五郎は、この南蛮屋唐兵衛に、道明寺八郎が、狩野弥太郎の紹介で、生命を百両で売ったいきさつを、語った。

「いよいよ、面白い話だな」

優之助の表情が、ひきしまったものになった。

「播州屋と南蛮屋を、噛み合せておいて、この狐と狸がひそかにたくわえた金を、横あいから、奪いとる――それが、道明寺八郎様の思案でございますよ」

「やるべし、手に唾して取るべし十万両！……といって、これは、佐渡の御用金を強奪する以上に、むつかしそうじゃわえ」

三

石町三丁目の多紀安叔邸へ、上野の寛永寺の御使いと称する僧侶が、駕籠を乗りつけて来たのは、それから三日ばかり後の宵であった。

医師に、法眼、法印という官名が与えられるのは、寛永寺の一品（いっぽん）親王からであったので、御匙といえども、その御使いに対しては、鄭重（ていちょう）に扱わなければならなかった。

寛永寺の侍僧は、上座に就くと、

「すでにおきき及びのことと存じますが、このたび、京の御所の御宝蔵にある唐渡りの呂調の鐸が、寛永寺へ、お下げ渡しに相成りました」

と、云い出した。

かねてより、寛永寺の門主・自在心院准三后一品舜仁親王は、禁裏に対して、呂調の鐸を、おゆずり賜わりたい、と願い出られていた。

それが、いよいよ御裁可になったので、はるばる、江戸表へ、はこばれて来た、という。

但し、輪王寺宮から願い出られた、というのは名目であって、実は、財政が全く逼迫した禁裏が、上野の御府庫金から援助をしてもらうべく、いわば、抵当の品を送りつけて来た、という次第であった。

「呂調の鐸をはこんで参られたお使いは、御所の勾当掌侍をつとめられる女官でありましたが、大事のつとめをはたされて、にわかに、加減がわるくなり、輪王寺宮様の根岸の別邸の方へ、お移りねがい、いろいろ薬餌をさしあげましたが、一向に快方にむかわれず、ほとほと困りはてた挙句、多紀安叔殿に診せよ、と宮様のお言葉があって、罷り越した次第にございます」

「それは、お安いご用でござる。親王様のご依頼とあれば、なにを措いても、まず、おもむかねばなりますまい」

多紀安叔は、即座に承知した。

侍僧は、一品親王さしまわしの駕籠を用意して来たので、多紀安叔は、それに乗った。供侍一人と薬函持ちと草履取りを連れただけであった。

一行が到着したのは、根岸の御行松の近くにある家であった。

駕籠から出た多紀安叔は、そのたたずまいを眺めて、

――輪王寺宮の別邸にしては、いささか小さすぎるが……？

と、ちょっと、不審をおぼえた。

すると、侍僧が、

「これは、宮様が、京都より参られた女官がたをお泊めするために、もうけられた家でありまする」

と、説明して、安叔を合点させた。

安叔が案内されたのは、地下に設けられた座敷であった。

座敷に入った安叔は、とたんに、

「お！」

と、おどろきの声をもらした。

夜具が、延べてあった。そして、それに、一人の女性が伏せていた。

しかし――。

その女性は、病いに倒れている様子ではなかった。

枕辺には、麻薬吸飲の道具が置いてあり、彼女自身、太い煙管をくわえて、恍惚と目蓋をふさいでいるのであった。

――これは、どうしたことなのか？

安叔は、座に就くと、じっと、女性の顔を、見まもった。
美しかった。これほど完璧な眉目を持つ女性を、安叔は、これまで見たことがない、と思った。
「失礼乍ら――」
安叔は、声をかけた。
「ご様子を拝見いたすに、医師を呼ばれるまでもない、と存ずるが……」
「ああ！……夢であろうか、うつつであろうか」
女性は、呟いた。
――なんというていたらくだ！　津軽を喫み耽っているのを、この法印に、診よ、とは！
「病いで臥せておいでないのであれば、これにて、失礼つかまつる」
安叔が、立とうとすると、女性は、
「あ――待ってたもれ。……わたくしは、わずらって居りまする。どうぞ、脈を――」
と、右手をさしのべた。
安叔は、しぶしぶ、膝行して、脈をとろうとした。
その瞬間――。
どうしたのか、行燈（あんどん）のあかりが、せわしくまたたいたかとみるや、ふっと消えた。
闇の中で、安叔は、女の香をかがされて、にわかに、欲情をそそられた。
「ああ！」
女性がもらす堪えがたそうな喘ぎの息が、安叔の欲情を、さらにそそりたてた。

「ごめん！」
安叔は、その胸の隆起をさぐるべく、片手を、襟もとから、さぐり入れようとした。
女性の方は、その手を、意外な強い力で、むずとつかむと、抱きついて来た。
安叔の口は、唇をもとめて、うろうろして、耳朶やら頬やらにふれた挙句、ようやく、もとめるものに、ぶっつかった。
女性は、唇を与えたが、しかし、安叔の双手をしかととらえてはなさず、それ以上の愛撫を許さなかった。
安叔は、しだいに、あせった。
男である。こうなれば、しゃにむに、暴力に訴えても、犯してしまわねばならぬ。
安叔は、そうほぞ（いい）をきめるや、片膝を、ぐいぐいと、脚のあいだに押し入れて、こじあけようとした。
とたん――。
「御典医ともあろう人物が、禁裏の女官を、手ごめにするとは、如何なものか」
その声が、階段の上から、ひびいて来た。
はっとなって、身を起した時には、跫音（あしおと）はすばやく、地下まで、降りて来ていた。
安叔は、はねあがって、遁げようとしたが、双手をつかんだ女性の力は、異常な強さであった。
行燈に、灯が入れられた。
安叔は、全身をこわばらせて、侵入者を視た。

「直参小普請組、狩野弥太郎」
対手は、そう名のっておいて、じろじろと、安叔を眺めた。
安叔の姿は、弁解のしようのないものであった。
女性の上に、掩いかぶさって、片膝を、股のあいだに押し入れているのであった。
実は、双手をつかまれ、片膝を、ぎゅっとはさまれて、逆に、身動きできぬようにされていたのである。
——武芸の心得のある女子なのだ。
安叔は、そう思った。
まだ、それが、男子が化けたのであるとは、気がついていなかった。
「どうした、御匙殿。起き上られては、どうか？」
弥太郎は、薄ら笑い乍ら、促した。
安叔は、女の方につかまって身動きできぬのだ、とも云えず、屈辱で、顔面を歪めた。
「それがしは、輪王寺宮家の、申さば、用心棒をつとめて居る旗本だが、このていたらくを、宮様に、報告すべきかどうか——とくと、思案いたさねばならぬ」
——計られたのだ、くそ！
安叔は、憤怒にかられつつ、沈黙を守るよりほかはなかった。
たしかに、自分の方が、欲情をそそられて、挑みかかったのが、わるいのである。
「御匙殿、返答は、どうなのだ？」
弥太郎は、語気をつよめた。

「いくら、出せ、と申されるのだ？」
どうせゆすりなのだ、と解釈して、安叔は、訊ねた。
「いくら出せ、だと！」
弥太郎は、態度を一変させた。
「おいっ！　直参旗本に対して、その無礼は、許せんぞ！　貴様は、いま、斬られても、やむを得ぬ所業に及んで居ることを、忘れたか！」
叱咤されて、安叔は、首を縮めて、
「お、おゆるしを——」
と、謝罪した。
「勾当掌侍殿、はなして、おやりなさるがよかろう」
弥太郎は、云った。
勾当掌侍——実は、桜田優之助は、
「ほほほ……、女子だてらに習うた柔術が、いま、役に立とうとは——」
と、云って、安叔を、解き放った。
安叔は、畳に降りると、顔面に噴いた汗をぬぐって、
「い、いかような御処置にも、服しますほどに、何卒ご内聞に願いとう存じます」
と、頭を下げた。
「こっちを、ゆすりたかりとみて、金ですませようとしたお主の傲慢無礼が、許しがたい」
「そ、そうではござらぬ。ただ、そのう……」

「今更、弁解しても、はじまるまい」
「てまえ、いかようの御処置にも、服します、と申し上げて居りますれば、何卒……」
安叔は、平伏した。
弥太郎は、優之助と顔を見合せて、にやりとした。
——これから、芝居は面白くなる。
「勾当掌侍殿、どうされる？　どのようにして、この御匙殿を、詫びさせますか？」

第三十七話　江戸の空

一

大坂の廻船問屋、播州屋太郎左衛門が、室町三丁目の江戸支店へ、姿を現わしたのは、それから、十日あまり過ぎてからであった。
播州屋が、出府して来るのは、三月に一度であった。支店の方は、江戸番頭にまかせてあった。
その江戸番頭対手（あいて）に、山積していた用件を、一刻ほどで、片づけた太郎左衛門が、
「さて、今宵は、吉原へでもくり込んで、ひとつ、派手に遊ぼうかの」
と、云った折であった。
使いが来て、石町三丁目の御匙、多紀安叔の手紙をもたらした。
『是非、お目にかけたき珍しき品あり、さしつかわしたる駕籠にて、おいでありたし。その折、例の品、おたのみ申し候』
多紀安叔が、こんな誘いの手紙を寄越すなど、絶えてなかったことである。

太郎左衛門は、吉原行きを中止して、迎えの駕籠に乗った。勿論、その膝には、〝例の品〟をのせていた。

太郎左衛門が、はこばれたのは、根岸の御行松近くの家であった。

多紀安叔が、座敷で、待っていた。

なぜか、安叔は、顔色がすぐれなかった。

「どうなさいました、先生？　ご気色がすぐれぬようにお見受けいたしますが……」

太郎左衛門は、眉宇をひそめて、訊ねた。

「い、いや、べつに――」

安叔は、かぶりを振った。

尤も、なにか云いたそうであったが、縁側にひかえている男が、鋭く目を光らせていて、その口を封じた。男は、むささびの吉五郎であった。

「いったい、なにを、見せて下さろう、と仰言るので――？」

「う、うむ。……ひとまず、こちらへ」

安叔は、地下へ降りる階段ぎわへ、みちびいて、

「この下に――」

と、指さした。

「どうぞ、お先に」

「いや、お主一人の方が、都合がよい」

安叔は、かぶりを振った。

「では、ご免を蒙りまして……」

太郎左衛門は、階段を降りて行った。

地下に設けられた座敷を、そっと、のぞくと、夜具が延べてあり、それに一人の女性が、俯伏せていた。

島田髷が、のぞいている。

「ほう、これは――」

太郎左衛門は、にやりとした。

「先生も、粋なまねをしなさる」

太郎左衛門は、部屋にたきこめた香を、鼻孔に吸い込み乍ら、一歩入った。

とたん――。

風もないのに、有明行燈のあかりが、すうっと消えた。

「これは、いかんな」

太郎左衛門は、行燈の方へ、手さぐりで進もうとした。

その時――。

夜具が、動き、伏せていた女性が、ゆっくりと起き上った。

「あっ！」

太郎左衛門は、仰天した。

それは、骸骨であった。闇の中に、燐光を発し乍ら、はっきりと浮きあがった。

太郎左衛門は、一瞬、きもをつぶしたが、すぐに、自分をおちつけて、

「先生は、からかいなさるのも、程々にして頂きたいものだ！」
と、憤りを口にした。
すると、骸骨が、ゆっくりと口をひらいて、
「その方が売った阿片が、わたくしを、こんなあさましい姿に、変えてしもうた」
と、云った。
「じょ、冗談じゃない。……からかうのも、いい加減にしてもらいたいものだ」
「からかっては居らぬ。まことのことを申して居る」
「ばかばかしい。灯をともしてもらいたいものだ」
「播州屋、阿片の中毒患者を、つぎつぎとこのようなあさましい姿に、ならせて、おのれは、ふところを、こやしたな」
「もうたくさんだ！」
播州屋は、吐きすてておいて、階段へ馳せ戻ろうとした。
瞬間——。
播州屋は、したたか、腰を蹴とばされて、つんのめった。

二

島田髷の骸骨は、ふっと、闇の中へ、消えうせた。
「先生っ！　多紀先生！」

播州屋太郎左衛門は、叫んだ。
「どうにかして、おくんなさい。……な、なんのために、わしは、こんなひどい目に遭わなければならんのだ！」
その叫びに応えて、行燈にあかりが入れられた。
太郎左衛門の前に立ったのは、若い旗本であった。
「直参小普請組、狩野弥太郎だ。おぼえておいてもらおう」
「なんのつもりで、こんな悪戯をなさる？」
太郎左衛門は、睨みつけた。
「取引をしたい」
弥太郎は、云った。
「取引？」
「そうだ。取引だな」
「なんの取引を——？」
「お主の生命と、お主の倉に積んである千両箱と、ひきかえにしたい」
「……？」
太郎左衛門は、ちょっと、対手の云うことの、意味を汲みとりかねて、不審の表情になった。
「どうだ？　自分の生命は、五万両ぐらいのねうちはある、と思って居るのではないか？」
太郎左衛門は、返辞をする代りに、

「多紀先生っ！」
と、呼んだ。
「多紀安叔は、お主をおびき出す囮の役目を終って、もう、帰った」
「囮?!」
「左様、囮だ」
「あの先生が、わしをおびき出す囮になるなんて――」
「人間、弱点をつかまれると、やむを得ぬのだな。お主もまた、われわれに、弱点をつかまれてしまった」
「てまえは、なにも、わるいことなんか、してやしませんよ。……戻らせてもらいましょう」
「おっと、お主は、この地下部屋に、捕虜になっているのだぜ。許しがあるまで、陽の目は、見られぬ」
「冗談じゃない。人をこけにしなさるな！」
出ようとする太郎左衛門の鼻さきへ、すっと、白刃の切先がつきつけられた。
「これは、おどかしではない。へたにさわぐと、本当に、まっ二つに斬る。小普請組の愚連隊は、気が短い、と思え」
「旦那、人を誰だと思っているのだ！」
太郎左衛門は、怯じずに、懐中にしのばせた匕首へ、手をかけようとした。
その刹那――。

弥太郎は、白刃を一閃させた。
太郎左衛門の髷が、刎ねとばされた。
「あっ！」
太郎左衛門は、その場へ、坐り込んでしまった。
「どうせ、ふところから出すなら、匕首のかわりに、店の倉の錠前の鍵を出してもらおう」
弥太郎は、薄ら笑い乍ら、云った。
「……」
太郎左衛門は、睨みかえしている。
「死んでも、渡さぬ、という形相だな。しかし、死ぬと、二度とは生きかえれないのだぞ。あきらめることだな。金は、働けば――お主なら、また悪事を為せば――もうかる。生命は、いったん、すてると、もとにもどらぬ。このかんたんな理を、どうも強欲な商人は忘れてこまる」
「倉には、千両箱など、ひとつも置いてあるものか」
「そう云うだろう、と思った。ところが、あるのだな」
「ないっ！」
「ふつうの人間が、倉に入っただけでは、千両箱が、どこに置いてあるのか、見つけられぬ、と云いたいのだろう。……こっちには、一歩入ったとたんに、くんくんかいで、すぐに見つける男がいるのだ。面倒かけずに、鍵を、こっちへ、渡してもらおう」
弥太郎は、云った。

「それとも、お前を、斬り殺して、鍵を奪ってもいいのだ。この地下部屋で、人一人殺しても、世間に知れるようなことは、絶対にないのだ」

その夜――。

太郎左衛門が、弥太郎に渡した鍵を、むささび吉五郎が持って、播州屋に忍び入っていた。

三

道明寺八郎は、床縁に頭をのせて、目蓋を閉じていた。

喀血してから、五日が過ぎていた。かなり高い熱がつづいていたが、ようやく、昨日から、ひいていた。

――あと半年、持つかな！

さしたる感慨もなく、八郎は、はかっていた。

――こうやって、寝ていても、せいぜい、一年の生命だろう。

自分に咳いた折であった。

床の間の壁が、まわった。

その軋りに、八郎は、視線を仰がせた。

すらりと、仇な姿を現わした小まきは、

「ごめんなさいまし」

と、ことわって、八郎のわきを通って、畳へ降りた。

「妙な通路があるものだ」

八郎は、起き上った――とたん、はっとなった。

小まきの顔を一瞥して、

――まさか？

と、わが目を疑った。

「お忘れでは、ありませんでしたね、八郎様」

小まきは、云った。

「お前は、満喜！」

「はい――」

小まきは、前に坐ると、

「あたしは、いまは、夜働きの盗人の妾でございます」

「……」

「こんなところで、こんな姿で、お逢いするなどとは、夢にも……」

「おれも、いまでは、労咳病みの、阿片中毒患者だ」

八郎は、自嘲の声をもらした。

小まきは、病みおとろえた八郎の貌を眺めて、いたましげに、かぶりを振った。

そこへ――。

階段を、とんとんと足早やにのぼって来た吉五郎が、

「旦那――」

と、声をかけて、唐紙を開けた。
小まきがそこにいるのをみとめても、べつに気にせず、
「旦那、大坂商人といっても、大したことはございませんねえ」
と、云った。
「というと？」
「播州屋の倉へ、忍び込んでみたところ、千両箱が、いくつあった、とお思いで？」
「……」
「たった三つ――三千両でさ。これじゃ、話になりませんや」
「三千両！　おれたち貧乏旗本にとっては、星の数ほどにも思えるが……」
「なァに、天保倭寇党は、ご公儀の軍用船をぶん捕って、南蛮国へ攻め込もうというのですぜ。その軍用金にしちゃ、三千両は、鼻くそだ」
「天保倭寇党か」
八郎は、ごろりと仰臥して、天井を仰ぎ乍ら、
「おれも、健康ならば、その夢をみさせてもらうのだが――」
と、呟いた。

同じ時刻――。
桜田優之助と狩野弥太郎は、深川八幡前の小料理屋「ちさ」にいた。
弥太郎が、沈んだ面持で、

「古城進八郎から、手紙が、篠田主水之介殿の許にとどいた」
と、告げた。
「どこに、ひそんで居るのだえ？」
「もう、この世には、居らぬ」
「え?!」
優之助は、目をみはった。
「木曾山中で、切腹した――らしい。とどいた手紙は、遺書であった」
「なんということを……」
優之助は、暗然となった。
「どうやら、天保倭寇党の壮図は、画餅におわったようだ」
弥太郎は、なげ出すように、云った。
「所詮、旗本小普請組など、どうあがいてみたところで、なにもできはせぬのだな」
「……」
「ろくろくとして、貧乏にあまんじて、虫のように、死んで行くだけのことか」
「……」
「優之助、お互いに、悪あがきは、止した方がよさそうだ」
「ほほ……」
優之助は、急に、笑い声をたてた。
「狩野弥太郎ともあろうものが、なんの弱音か。しっかりなされ。……われら小普請組

は天保倭寇党が、画餅に帰したぐらいで、意気がくじけてたまるものぞ。……次には、別の夢を――もっと大きな夢をみようではないかえ」

「……」

「さ――伏玉でも七、八人呼んで、わっと、ひとさわぎじゃ」

優之助は、手をたたいた。

弥太郎は、しかし、そんな気にはなれず、ぼんやりと、昏れがたの空を仰いだ。

空の色は、もう初夏のようであった。

解説

武蔵野次郎

早いもので柴田錬三郎氏が昭和五十三年（一九七八）六月に死去してから、ちょうど今年（昭63）で満十年の歳月が経過したことになる。いろいろと思い出の多い作家であったが、柴田錬三郎の文学的功績として一番最初に挙げられることは、戦後沈滞していた時代小説を再び復興させ、新しい息吹きを与えたことである。戦前の時代小説では見られなかったモダニズムを作品に与え、現代人の読者に歓迎される時代小説のスタイルを確立するに成功したのは、柴田錬三郎をもってその嚆矢（こうし）とするのである。

「オール讀物」十二月臨時増刊号（昭63）は「昭和の時代小説50篇」と題する一冊であるが、それには柴田錬三郎作品としては『眠狂四郎市井譚・義利人情記』（昭和四十七年初出発表）が収められている。柴田作品の代表作は「眠狂四郎シリーズ」であるから、その中の一篇が採られているのは当然のことだろう。下総の銚子から江戸へと向かう御用船に乗り合わせた眠狂四郎と養老政と名のるやくざ男との間に発生した人情味溢れる一幕をサラリと描いた短篇であるが、例によって狂四郎の人物像が鮮やかに描き出されている。事件の真相を話してやって悲しむ養老政を慰める狂四郎のセリフへ「お前は、昨夜は、死ぬ覚悟のために泥酔したが、今日は、生きのびるために、酔うがいい。ふところの十両は、酔いつぶれるまでの飲

み代だと思え」〉という描写で、パッと切って落とすように終るラストの手法も鮮やかなものであり、狂四郎の颯爽たる姿が浮かび上がってくるようだ。巧い短篇である。

ともあれ、柴錬イコール眠狂四郎というくらいに、作者のダンディズムが時代小説の主人公に見事に活かされているところに、「眠狂四郎シリーズ」が大ヒットした所以があると思われる。こういう時代小説作法は戦前からの作品ではみられなかったものであり、戦後初めて柴田錬三郎によって創作されたものであるだけに貴重なものがあり、戦後の新しい時代物の読者層を開拓すると共に、時代小説復興の旗手となったのである。

そういう偉大な作家であった柴田錬三郎であるだけに、大衆文芸の分野において、その名を長く遺し記念するために、今年（昭63）を第一回として「柴田錬三郎賞」（集英社主催）が創設されたことは、ひじょうに喜ばしいことである。この文学賞ができたことを契機として、優れた作家とその作品が毎年出ることが期待されるのである。

さて、本篇『われら旗本愚連隊』は、昭和四十四年（一九六九）から翌四十五年にかけて「週刊ポスト」誌上に連載された長篇であり、作者五十二歳の時の作品である。この年には、他に『乱世流転記』（集英社文庫既刊）、『貧乏同心御用帳』『巷説・水滸伝』などの長篇も同時に執筆発表されている。

全三十七話をもって構成されている本篇の物語には、タイトルの「旗本愚連隊」で分かるように、旗本の若者たちが物語を織りなす人物として登場してくる。その中心となる主人公が、狩野弥太郎と井部鉄之助の両人である。弥太郎も鉄之助も共に旗本小普請組の家の次男坊という身分設定である。

小普請組というのは、旗本であっても公式の御役に出ない侍、つまり非役の身分であるから閑職である。普請という名詞が付いているから、建築、土木の仕事を意味しており、それの小普請とあるのは、たとえば、屋根の瓦が壊れたとか、垣根が壊れたとかいう小さい工事を行なうことを意味するのだが、小普請組に属する無役の旗本、御家人がそれらの工事を実際にやるわけではない。あくまで無役のことを意味している。そんな家の次男坊という情ない身分に生まれている弥太郎、鉄之助であるから、

〈「お主は、当分養子でも、行くか？」

「当分養子か」

鉄之助は首をかしげた。

「当分養子」というのは嫡子のある旗本が、その嫡子が痴呆あるいは病身であるために、他家の次三男を、貰って、老中ならびに頭・支配に届けておくのを、いう。

「当分養子でも、わしは、行くのう。行って、実子を毒殺して、当分を永久にしてくれる。南無阿弥陀仏、金欲しや、死んでも生命のあるように――目下、強欲になろうと、自らをはげましているのでな」

そういってから、鉄之助は、大声をあげた。

「ああ、金が欲しい！」〉（第一話「賭」の一）

と描写されているようなデスペレートな対話を交わす若者たちなのである。それだけに本篇で創作されている物語に見られるような興趣に満ちた行動を起こしてゆくのだが、そこが面白く描き出されている。

次にこれも弥太郎、鉄之助に並ぶ主要人物として登場してくるのが、桜田優之助である。まるで女のような美男子であり、〈当人は、充分その美貌を心得ていて、華やかな柄の丹後ちりめんを、なで肩にぞろりとまとって居り、これに、月代に紫の布をのせれば、まさしく、歌舞伎の女形である。〉（第二話「決闘」の一）と描かれている優之助の人物像も興味深い。優之助も歴とした千石取りの直参の家だが小普請組に入れられている。つまり無役の身分である。

弥太郎や鉄之助が何かと頼り尊敬している侍として、篠田主水之介が登場してくる。主水之介は三千石以上の布衣の身分の大身だが、やはり小普請組に入れられている。主水之介は眼が不自由だが鋭い勘の働く人物であり、弥太郎たちを助けてやる人物に設定されていることも物語を面白くしている。

さらに第八話「倭寇」に話が進んでゆくと、古城進八郎が登場してくる。進八郎は、書院番役の侍であったが、自らを乞うて小普請組入りし、長崎へ三年余も行っていたという人物である。小普請組の若者たちを集め、まず軍資金をつくり、公儀の軍艦を奪って日本を脱出し海外で働くことをめざす天保倭寇党と名のる団体を結成することを計画しているという人物に設定されていることなども、いかにも柴錬伝奇時代小説に登場してくるキャラクターにふさわしい興趣を感じさせてくれる。

主要人物である狩野弥太郎ほかの旗本小普請組に属する若侍たちに加えて、本篇には甚だ興味深い脇役連（女性も含めて）が多数登場してくる。たとえば、女装した桜田優之助と同行して江戸城大奥に潜入し金を奪う怪盗むささび吉五郎、篠田主水之介の目として働く忍者

伊賀の刃心、これは主水之介が、十年前、八王子の千人同心の子弟の中から選出して伊賀の里へ派遣し、忍びの術を修業させたという若者である。こういう人物が登場してくるあたりも、戦後流行した〝忍者もの〟を偲ばせるものがある。

本篇を構成する物語は、それこそ波瀾万丈の面白さに満ちた（そこにこそ伝奇時代小説独自の興味があるわけだが）ものと言ってよいが、それに加えて、江戸が舞台であるだけに、風物詩としての江戸の模様がいろいろと配されているところなども大いに読者を楽しませてくれる。

〈江戸に、名月の宵が、来ていた。

望月という。

この宵は、武家屋敷をはじめ、商家でも裏店でも、すべて、団子をつくり、これに柿や栗や芋や枝豆や葡萄を添えて、三方や盆にうずたかく盛りあげ、座敷の縁のさき、あるいは、屋上の物干台にかざった。尾花秋草を挿した花入れを配して、風情をつくることは、勿論であった。

文士墨客は、望月の筵をひらいて、吟詠を愉しむ。

江戸の風雅な行事のひとつであった。〉（第七話「男と女」の一）

といった調子であり、江戸に関わる情緒に満ちた描写が多く配されていることも、印象にのこる。

第二十三話「富札」に入って、哀愁に富んだ人物である悲運の島中雄之助が登場してくる。この雄之助の富札にまつわる皮肉な物語も上手くできているが、不運に死んだ雄之助の最後

の依頼をはたすべく狩野弥太郎が尋ねていった千雪という女性と、招潮硯という古玩文房具に関わる挿話も甚だ巧みにできているので、読者はここでも柴錬作品の巧緻さを味わうことができる。

佐渡金山から運ばれてくる多額な金を奪うべく諏訪の地にやってきていた進八郎と盗人の庄吉が、腕の立つ公儀目付荒木元七郎のために、計画が挫折してしまうことになる終結部近くを飾る物語や、優男優之助が大活躍して阿片密輸入に暗躍する奸商どもを退治するラスト挿話にも胸のすく面白さが盛られている。

すべての事件が終ったのち、狩野弥太郎が、

〈「所詮、旗本小普請組など、どうあがいてみたところで、なにもできはせぬのだな」〉

（第三十七話「江戸の空」の三）

ともらす感慨にも、江戸時代の旗本小普請組に属していた侍たちの悲しみといったものがよく表現されている。しかし、そういう悲運をもはねとばす勢いで暴れ廻った若者たちの愉快な物語として、小説作りに優れている作者の才筆を十分に楽しめる長篇であることは間違いないところである。

集英社文庫　目録（日本文学）

司馬遼太郎・編　長城とシルクロードと

芝木好子　面影　柴田錬三郎　地獄の館　島尾敏雄　夢の中での日常

芝木好子　巴里の門　柴田錬三郎　曲者時代　島田荘司　嘘でもいいから殺人事件

芝木好子　女の橋　柴田錬三郎　乱世流転記　島田荘司　漱石と倫敦ミイラ殺人事件

芝木好子　幻華　柴田錬三郎　貧乏同心御用帳　清水一行　虚業集団

芝木好子　青磁砧　柴田錬三郎　江戸っ子侍(上)(下)　清水一行　首都圏銀行

芝木好子　女の肖像　柴田錬三郎　遊太郎巷談　清水一行　重役室

芝木好子　女の庭　柴田錬三郎　生きざま　清水一行　投機地帯

芝木好子　冬の椿　柴田錬三郎　おらんだ左近　清水一行　小説　兜（しま）町

芝木好子　黄色い皇帝　柴田錬三郎　うろつき夜太(上)(下)　清水一行　同族企業

芝木好子　夜の鶴　柴田錬三郎　花の十郎太　清水一行　動脈列島

柴田錬三郎　英雄・生きるべきか死すべきか（上中下）　柴田錬三郎　毒婦伝奇　清水一行　神は裁かない

柴田錬三郎　度胸時代　柴田錬三郎　日本男子物語　清水一行　相場師

柴田錬三郎　生死の門　柴田錬三郎　若くて、悪くて、凄いこいつら(一)(二)(三)　清水一行　動機

柴田錬三郎　大将　柴田錬三郎　われら旗本愚連隊(上)(下)　清水一行　合併人事

柴田錬三郎　図々しい奴　島尾敏雄　われ深きふちより　清水一行　背信重役

島尾敏雄　島の果て　清水一行　敵意の環

集英社文庫

われら旗本愚連隊（下）

1988年12月20日　第1刷

定価はカバーに表示してあります。

著者　柴田錬三郎

発行者　若菜正

発行所　株式会社　集英社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10
〒101-50
電話　東京（230）6100（編集）
（230）6393（販売）
（230）6080（製作）

印刷　凸版印刷株式会社

本書の内容の一部または全部を無断複写、複製、転載することを禁じます。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。

©Eiko Saitō　1988

Printed in Japan
ISBN4-08-749411-X C0193